

「・・・・・・・・どうしたんだ一体？」

「さ、さあ、僕にもさっぱり・・・・・・・・」

教室で刑執行目前の死刑囚みたいな風情を漂わせた箒の様子に誰も近づく事が出来ないでいる。

同室の一夏も似たようなもので、ミシエルの隣で頭を抱えながら悶々とした様子であった。近づきたい雰囲気を出している箒よりは一夏に聞いた方が手っ取り早そうなのでそうする事にする。

「・・・・・・・・何かあったのか？」

「それがさ、昨日あの後箒と部屋に戻ってからなんだけど――」

「――」

2人分の呼吸音をシャワーの水音が掻き消す。大雑把に汗を洗い流し終わると、箒の細い指がシャワーのカランを捻り、お湯が止まる。

「わ、私が一夏の身体を洗ってやろう。一夏はそのままじっとしていてくれ」

「いや、箒がそこまでしてくれなくても――」

「やらせてくれ。私が、そうしたいだけだから……」

両方の肌が紅潮しているのは決してお湯を浴び続けていただけではあるまい。

箒はボディソープを手にとると、それを自らの身体に塗りつけ始めた。瑞々しく張った肌が特徴的な光沢に包まれ、只でさえ艶めかしい姿がより一層色っぽさを増す。

「ほ、箒？」

「い、いくぞ」

箒は一夏の背中に抱きついた。ぬるりと肌と肌が滑り、擦れ合う度に白い泡が接触面の間に生じ始める。

箒が身体を動かす度、背中で潰れてぐにゅぐにゅ形を変える乳房の

感触に一夏の本能が昂ぶる。箒も箒で一夏に直接自分の身体を擦りつけているという事への背徳感と、鍛えられた一夏の背中の筋肉の隆起に固くなった先端の突起が僅かに引っ掛かる度に伝わる刺激に、否応無しに下腹部が熱くなるのを自覚していた。

擦れ、ぶつかり合う度に泡のベールが互いの身体を包んでいく。胸だけでなく、同じように塗りたくった下腹部や太もも、自らの叢までも駆使して箒自らの肢体で一夏の垢を洗い落とす。

ぬちゅぬちゅと卑猥な音を立てて一夏の胸板をまさぐっていた箒の両手が、段々と下の方へと移動していった。とつくの昔に屹立していた男の証に触れた途端、素っ頓狂な声がシャワールームに木霊した。

「ちょ、箒、そこまではしなくていいから!」

「なあ一夏。私は、お前を満足させられているか? 私は、ちゃんとお前を悦ばす事が出来ているのか?」

「あ、当たり前だろ。俺だって箒にこんな事してもらって嬉しいけど………無理、しなくていいんだぞ」

「む、無理などしていない! 私が一夏にこうしてあげたいんだ! もっと一夏に悦んでもらいたくて、もっと一夏と触れ合いたくて、もっと、一夏と———」

唐突だが、一夏は自分が箒の事を愛おしく思っている事にこの時ようやく思い至った。

凛々しく、強く、美しく。そんな彼女がここまでこんな自分に健気に、ここまで大胆に接してくれる。そう改めて理解した瞬間、無性にこの少女を抱き締めたくなって、迷わず実行に移した。

彼女の中で激しく脈打つ鼓動が伝わってくる。きっと彼女もとても恥ずかしかっただろうに、それを抑え込んでここまでしてくれてきた事をとて嬉しく感じた。

「いち、か？」

「ゴメンな、箒。ここまでしてくれるぐらい箒が俺をどう思ってるのかとつくに気付いてたつてのに、ハッキリ答えを出さないままで」

この気持ちが明確な恋心なのかはまだ分からない。

敢えて言うならこの感情は『独占欲』と呼ぶべきか。こうして身を捧げてくれる幼馴染を自分の物にしたい。彼女の気持ちが他の男に向かないようにしたい、そんな衝動。

——それとも、この独占欲もまた恋心の一片なのかもしれない。

「い、一夏が謝る必要はない。これも、私の我儘だから——」

「それでもさ、ここまで大胆な事してくれる可愛い女の子に答えを出さないままじゃ男としちゃ最低だろ？……いや、とつく

に最低かもな」

今なら五反田の気持ちが分かる。女の子と話をしたりする度しょっちゅう呆れられたりしてたけど、きつとそれはその女の子達がこんな自分に好意を向けてきていた事に気付いていたからだと思う。

事ある毎に「殴って良い？つか殴らせろ」とか言われてたのも懐かしい。ゴメン五反田、今ならお前に殴られても仕方なかったんだって理解出来たよ。

『——上達したら、毎日あたしの——』

思考にノイズ。何だか昔の記憶の断片が蘇ったが、今はそれどころじゃない。

「せめてこれだけは、俺の口から言わせてくれ」

「いちか・・・・・・・・」

ああもう、こんなに可愛かったって筈って？無性に抱き締めたくなつたけど我慢。もし今実行に移したら告白する前に襲いかかりそうだから。耐える俺。

唐突に度々シャルロットの事でミシェルが脅しをかけてくる気持ちがよく理解出来た。

大事な大事な自分の伴侶に他の男が色目使って、そりゃあ怒髪天突くってもんよ。

「第……俺は、お前の事が――」

一夏が言い切る前に。

シャワールームを隔てる扉が勢い良く開け放たれた。

「――教師からの呼び出しを無視して乳繰り合つとは、いい度胸だな。貴様ら」

「あ、ありのまま起こった事を話すぜ！

『俺から箒に告白しようと思ったら、気が付くといつの間にか千冬姉の部屋で正座させられていた』

な、何を（ry」

「ポルポル乙……で、告白のタイミングを潰されたせいで篠ノ之があんな風に燃え尽きている訳か」

「朝まで床に直接正座させられたよ……今でも足の感覚がおかしいっての。結局言えずじまいになっちゃったしさあ」

椅子の上で足を揉みほぐしつつ溜息。ダウンナーな箒とミシエルの顔から滲み出る無意識の威圧感により、周囲が遠巻きにしているせいで聞こえていないのは幸いだった。

一夏が箒に告白しようとした事を聞きつけたら最後、これまで以上の大騒動が勃発していたに違いない。

「しばらく筭は千冬姉の部屋で寝泊まりして俺1人であの部屋使え
つてさ。元々人数調節の問題で俺が1人部屋になるのは決定してた
らしいんだけど」

筭があそこまで凹んでいるのは一夏と部屋を引き離された上に鬼教師の部屋で寝食を過ごさなければならぬ事への恐れもあるのかもしれない。

「本当、何でよりもよってあのタイミングで千冬姉が来るんだよ・
・・・・」

「・・・・・とりあえずは、ご愁傷様という他ないな」

机に突っ伏していた一夏が何処か恨めしげにミシエルを見上げる。

「あのさ、ふと気になったんだけど、ミシエルがシャルロットに告白した時はどんな感じだったんだ？今後の参考の為に切実に聞かせてほしいんだけど」

「ふえっ？えっと、それは、言わなきゃダメかな？」

何故かシャルロットの方が照れている。問われた張本人は対して動揺した様子もなく肩を竦めてみせてから、

「参考にならんと思うぞ……何せ、初めて出会って1時間
足らずで即プロポーズしたからな」

そりゃ参考にならねえや、と再度机にへばりつく一夏であった。

「ところで一夏は転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

「ああ……何でも、中国の代表候補生だそうだが……」
「」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

話題転換したシャルロットとミシエルの言葉に首を捻っていると、
話を聞きつけたセシリアが会話に加わった。

他のクラスメイト達が相変わらず彼らの周りに近付けていないこと
を踏まえれば中々の度胸と言える。

一夏の元にセシリア―間違はなく自分の恋敵の1人―に気付いた篇
もorzモードからようやく復活して友人の輪に乱入。

「このクラスに転入してくる訳ではないのだろう？騒ぐほどの事でもあるまい」

「もしそうだったら幾らなんでも偏り過ぎだもんね」

「確かに、な……」

ミシエルにシャルロット、セシリアという代表候補生が3人、専用機持ちなら一夏も加え4人。

一夏達の学年で専用機持ちが他に4組に1人しか居ない点を踏まえると、抗議が出てきてもおかしくない偏り具合だ。

まあそれはともかくとして。

「にしてもようやく復活したな箒——それでさ、昨日の事なんだけど」

「あ、あ、ああ、あああああっ!？」

上ずっている。箒の声が激しく上ずっている。

身悶えしそうなのを必死に堪えているみたいにプルプル震えつつ真っ赤な顔の箒の様子に、ハイパーセンサーよりもより限定的かつ鋭敏なセシリアの恋する乙女センサーが緊急警報。

こ、この反応は一体何がありましたのっ！？とガクブルしながら今は展開を見守る事しか出来ない。

「……ああクソっ、こういうのって時間が経つと決意が薄れるんだよな」

そう吐き捨て頭を掻き毟る一夏。セシリアの警戒レベル一段階上昇。

「必ず、俺の方から答えてみせるから。ちゃんと、俺から告げてみせるから——それだけの決心がつくまで、待ってもらえないか？」

「も、勿論だ——これまで6年間も待ったんだ。もうちょつと位なら、待ってやらなくもないぞ」

「ホントごめんな、待たせてばかりで」

ミシエル達が見守る前で筈は口ではそう言いつつも、待ち遠しさと喜びで弾けるギリギリ手前な雰囲気を漂わせながらはにかんだ。

遠巻きに眺めていた同性のクラスメイト達さえ魅了しそうなくらい美しい笑み。セシリアの警戒レベルデフコン1。既に敵は警戒ラインを突破済み！

やはり同棲していると此処まで一気に差がついてしまうものなのか。いや、まだセシリアの戦いは終わっていない、筈！！

「そ、そうですね。一夏さん。クラス対抗戦に向けてより実戦的な訓練をわたくしと行いませんか？何せわたくしも専用機持ちですし、現在専用機を持っているクラス代表は1組代表の一夏さんと4組のみ——」

「——その情報、古いよ」

一夏にはとても聞き覚えのある声がした。彼以外の人間は初めて聞く少女の声だった。

一夏達のみならずクラス中の千人が声の主へと振り向くと、小柄でツインテールで強気そうな少女が教室の入り口に王立ちしている。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴^{リン}？お前、鈴か？」

「そうよ、中国代表候補生、鳳鈴音^{ファン・リンイン}。今日は宣戦布告に来たってわけ」

胸を張って（女性的に『胸』の範疇に入るかはともかく）そう堂々と
言い放つ少女——鳳鈴音に対し、

「何格好つけてるんだ？すっげえ似合わないぞ。それからそこに立つてると通る人の邪魔だから」

「んなつ！？……あ、アンタってヤツは相変わらず人の上げ足を取って……！」

「いやでも本当の事じゃん。ほら後ろ」

「おい」

「何よ！？」

ズベシッ！！

見事な出席簿による一撃が入った所で鬼教師、織斑千冬の登場である。

中学時代から苦手だった千冬に自分の教室に戻るように指図されて、

結局その後は良い所を全く見せる暇もなくすごすごと退散した鈴であつた。

一夏の説明曰く、鈴は箒と入れ違いになる形で転校してきた友人との事。

鈴も中2の終わりぐらいに中国に戻ってしまったので、再会するのは1年ぶりなんだとか。

昼休み、食堂で昼食を取りながら簡単に自己紹介をし合う。

「僕はシャルロット・デュノアっていうんだ。一応フランスの代表候補生なんだけど、よろしくね」

「こちらこそよろしくお願いね。で、こっちが……」

含みの混ざった眼差しをシャルロットの隣に座るミシエルへと向ける。

仏頂面と勝気な瞳がぶつかり合い、ミシエルの方から大きな手がズイツと差し出された。

「……ミシエル・デュノアだ。よろしく頼む」

「鳳鈴音よ。話はテレビ以外にも一夏からも色々と聞いてるわ。一夏の命の恩人なんだっけ？」

「ええっ、そうなんですの!？」

自己紹介の場で一人鈴からぞんざいな扱いをされたセシリアだったが、鈴はそっちは気にせずミシエルの額に深い皺が刻まれるのを見て取った。

「……そんな大層なものじゃない。ただ友人を助けに入ろうとしただけだし、結局俺は何も出来なかったのだからな」

「でもさ、あたしも昔はよく一夏助けてもらったりしてたんだけど、しょっちゅうアンタや千冬さんみたいに誰かを守るように強くなりたいて——」

「す——っぷ! もう言わないでくれ鈴後生だからお願いだから本人の前でそんな事言われるとスゲー恥ずかしいから!」

「あつ、え、ええゴメン一夏。つい口が滑っちゃって」

必死にテーブルにひれ伏す勢いで頭を下げる一夏と咳払いで誤魔化す鈴。

「とにかくそっちも前からの一夏の友達みただし、仲良くしましよ」

「あ、ああ……………」

手の平を叩きつけるような勢いで、躊躇い無く鈴はミシエルの手を握った。サイズが違い過ぎるせいで完全にミシエルの手を握れてないが、お構い無しに手をブンブン上下させる。

それから先に握手を求めてきた相手の方が、虚を突かれたような様子なので、首を捻った。

「何驚いた顔してるのよ？」

「……………いや、な……………初対面の女性にこうして普通に接してもらえたのがもう何年ぶりの気がして……………」

くうつ、と熱くなった目頭を押さえてミシエルは天を仰ぐ。鋭く細い眼の端が僅かに光っている。

泣くほどの事なんだろうか、と一夏やセシリア辺りはそんな考えを抱いたが、ミシエルの身なりを考えると嫌でも納得出来てしまった。自分達だってミシエルと発遭遇した時はやや腰が引け気味だったし。シャルロットはあわあわとハンカチを取り出そうとしている。箒は箒で見た目超強面な同級生の中身のギャップに呆れ半分驚き半分。鈴だけが、ふーんと興味なさげにラーメンを啜る。彼女の場合、国に居た頃は軍関係者ともよく顔を合わせていて彼の様な厳めしいタイプの人間にも慣れていた、というのが平然とミシエルに接せれる彼女の事の真相だったりする。

ちなみにミシエルもラーメンを注文していた。鈴は普通盛りの醤油ラーメンだがミシエルの方は大盛り豚骨ラーメンである。

「・・・西洋人としては箸の使い方上手いじゃない。麺も上手く啜って食べれてるし」

「確かに、外国の人って麺類とか啜って食べるのが苦手っていうよな。セシリアとかシャルロットとかもスパゲティとか食べる時凄く丁寧っていうかさ」

「それは当たり前ですわ。淑女として礼儀作法をきっちり叩き込まれていますもの！何処かの誰かさんとは違いますのよ！」

「へーそれって誰の事言ってるのかしらねえ？」

さっきまで豪快にラーメンを食べていた鈴の額に井桁マークが浮か

ぶ。

「むしろ僕らの方じゃあんまり音を立てて食べる事自体マナー違反って感じだからね。音を立てて食べるって文化は日本限定なんじゃないかな？」

某カップヌー。ルも西洋版では麺が短めに加工されているとか。

日本食の流行でそういった日本独自の食べ方も広まってはいるがそれはその店の中だけの話であって、それ以外の場合では周囲の輿感を買うので海外旅行の際にはご注意を。

話題は再び変わり、

「一夏、アンタクラス代表なんだって？」

「まあな、半分成り行きだけど」

「でも何となく、一夏なら仕方ないって思えるわ。アンタ昔っから強かったもんね」

「そうそう、セシリアさんと戦ってた時の一夏、凄かったんだよ」

「うむ、あれぞまさに武士と呼ぶに相応しい勇猛果敢かつ見事な戦いぶりだったな」

最早囁ませ犬状態で敗れた張本人であるセシリアが呻いていたが無視。

「ふーん．．．．．あ、あのさあ、ISの操縦、見てあげても良いけど？」

「いや、そっちはミシエルとかに見てもらってるから別にいいぞ」

快活な雰囲気からは珍しく歯切れが悪そうに、言ってしまえば恥ずかしそうにしながらも申し出た鈴の提案を一夏は一蹴してしまった。

椅子の上でこけそうになる鈴と、その反対側で彼女の考えに気付いた篤とセシリアが密かに邪笑。対照的な少女達の様子にシャルロットは苦笑し、ミシエルは黙って麵を啜る。

「そ、そう。それは仕方ないわね、残念だけど．．．．．」

本当に、残念そうだった。

その後は鈴の実家が前は中華料理屋をやっていた事など、取りとめの無い話を交わしてから鈴と分かれる事になった

そして放課後の訓練タイム。

今日使用する第3アリーナには『5人分』の巨大な人影が存在した。

「ちょっと待てえ！どうして貴様がここに居る、セシリア・オルコット」

訓練用の日本製第2世代型量産IS<打鉄>を身にまとった箒が、激昂しながら招かれざる客であるセシリアに巨大な刀を突きつけた。
向けられた側はしれっとした顔で、

「いえいえ、わたくしは一夏さんに直々に対遠距離射撃戦での手解きを行おうかとはせ参じただけですわよ？」

「その射撃戦で刀1本の一夏に負けた張本人が何を言う！」

「な、ぬぁんですってえ！？」

「ええい此処から立ち去れ！一夏との訓練は私以外はあの2人だけで十分だ！ただでさえ千冬さんにいい所で邪魔された上に同じ部屋で共に過ごす事も出来なくなっただけかと言っのに！」

「絶対後半部分の方が本音でしょうそれ！こちらこそ貴女ばかりに良い思いをさせる訳にはいきませんのよー！」

近接装備を展開したセシリアと箒がチャンチャンバラガチンコファイトをおっぴじめてしまった。ついでに2人共思いつきり一夏目当てである事を本人の前でぶっちゃけてしまっている。

あ、セシリアのライフルまで火を噴いた。流れ弾には注意してもらいたい。

「やっぱりモテてるねー一夏って」

「……………だが同じ男からしてみれば余り羨ましく思えないがな」

「スマン箒、あと1秒早く俺が決心して告白していれば……………」

「そりゃ嫉妬とかに駆られて一々IS引つ張り出すような女子は冷静に考えなくても迷惑千万でしかなかろう。」

「一夏が女性関係で白黒つけてしまえば手っ取り早そうなのだが、箒はもうちよつと待たされる事になりそうだ。ゴメン箒、でも一旦告白するタイミング外すと告白し直すのってすごい度胸が要るんだって！」

——人それを『ヘタレ』という。

と、ぶつかり合っている箒とセシリアを見たシャルロットが名案を想いついたとばかりに手を打った。

「ねえ皆、ペアを組んで2対2の模擬戦しない？丁度射撃型と格闘型が2機つつ居るんだし。僕が審判やるね！」

「「わたくしなら私が一夏と！」」

取っ組み合いながら立候補する雌豹2匹。互いの発言を耳にすると、お前が言うなと再度睨み合う。

肉体言語も交えた議論は平行線で、譲り合う気配は全く無い。これはしばらくかかりそうだ。

「なあミシェル、一緒に組んでくれね？」

「・・・・・・それは構わないが、お前が原因なんだからあの2人を止めに入るぐらいはしてくれ、色男」

一方一夏はミシェルを選んだ。

1 - 8 : Fire in the hole ! / 友情 (前書き)

ミシエルのISのイメージは赤以外の部分が黒に変わったヴェルデバスターでどうぞ。武装は殆ど違いますが。

1 - 8 : Fire in the hole ! / 友情

俺が自分を鍛える事が好きなのは、間違い無く前世の『俺』の死に方が関係している。

神経を侵す原因不明の奇病。四肢が少しずつ少しずつ動かなくなり、やがて呼吸器も機能を停止してしまう病。

何も感じなくなる事こそが何よりも苦痛だった。触覚や痛みが日に日に感じなくなり、身体が動かなくなっていく事への恐怖は筆舌に尽くしがたい。実際俺がベッドの上から動けなくなる頃には髪が100歳の年寄りみたいに真っ白になっていた。

死の闇に引きずり込まれる間際に感じたのは、このまま死んでしまいう事への恐怖と………これでようやく真綿で絞められるような地獄から解放される事への安堵感。

『ミシエル・デュノア』として転生した事を理解し、受け入れ、そして思ったのは———こうやって自由に自分の手足を動かせるのがなんて素晴らしいんだ、って事だった。

だから俺は身体を動かし続けた。疲労も苦痛も『俺』に心地良い生への実感を感じさせてくれた。

初めて握った本物の銃の感触。初めて引き金を絞った時のあの反動。それもまた俺には甘美な体験で、とにかく撃ちまくった。腕も磨い

た。

単なる銃の扱いだけじゃなく、家の伝手でPMC（民間軍事会社）のインストラクターに戦闘テクニクを叩き込んでもらった。

正確には親父の同業者の武器商人の私兵集団だったんだけど、皆気の良い人達ばかりだったし（年齢的には）俺と同じ位の少年兵まで居たのが印象深い。今もココさんはヨナ達を引き連れて武器を売りに世界中を回っているに決まってる。

そして、今度は銃片手に本物の『闘争』を体験して、その代償に生死の境まで彷徨ってしまった俺は、理解した。

——闘争もまた、今の『俺』に生を感じさせてくれる存在なんだと。

……シャルロットには負けるがな。

つまり、何が言いたいのかというと。

自分を本気で殺しにかかる敵との殺し合いよりは少しばかり劣るが………実戦ほど命の危険性は限りなく低いとはいえISによる

戦いも、それなりに悪くないという事だ。

十数mの間隔を空けて一夏とミシエル、箒とセシリアが各々ISを身に纏ってアリーナの中央で向き合っていた。

女性チームの方はお互いにガンを飛ばしまくっていて、2人仲良く（？）気分最悪殺気満点といった感じである。その様子に一夏は冷

や汗を流し、ミシエルは無表情で何を考えているのか読み取れない。何故か頭部全体を守るヘルメットと赤いバイザーだけ展開していなかった。

「早く構えたらいかがです？」

一夏の<白式>は<雪片式型>、箒の<打鉄>は近接ブレード、セシリアの<ブルー・ティアーズ>は<スターライトmk?>を展開済み。

1人武装を展開していなかったミシエルだが、セシリアに言われ遂に戦闘態勢に入る。その姿を見た瞬間、一夏は驚き箒は呻きセシリアは機体色並みに顔色が青くなった。

一瞬の内に人間武器庫が出現していた。右手には銃口の横側から銃剣が生えた細長いショットガン。左腕には菱形の盾と一体化して腕部装甲に装着された3連銃身のガトリング砲。

両肩の上からは砲身が伸び、しかも左右で形状が違う。根元の機関部は背中の箱型スラスターの両横に取り付けられ、更にその下にはそれぞれ大きな半球形のパーツ。

盾の様な棺桶の様な1対のアンロックユニットも加わって、とにかく不沈戦艦みたいな威圧感がミシエルから放たれ始めている。

マズい、アレの相手は危険過ぎる——箒とセシリアの本能が一致した瞬間だった。一夏は味方で良かったと心から安堵した。

ミシエルは首をボキボキと鳴らしながらゆっくりと大きく回し、それからまっすぐ箒とセシリアを見つめた。

まるで獲物を捉えた猛禽の様な目で。

「……………それではそろそろ始めるとしよう」

1人ピットに入ったシャルロットが試合開始のブザーを鳴らした。

ミシエルの顔がバイザーに隠れる間際……………その顔が獰猛な笑みを浮かべているのをセシリアの目が捉え、背筋を震わせた。

「——戦争の時間だ」

彼の言葉が、彼自身の手によって現実の物となる。

ブザーが鳴り終わった瞬間、箒とセシリアに同時にロックオン警報が宣告された。

一夏は射撃兵装を持たない―そもそも射撃用のFCSすら搭載されていない―のでミシエルがロックオンしたに違いないが、次いで放たれたのはショットガンでもガトリング砲でも両肩の砲塔でもなく。

――半球形のパーツが左右に割れ、円を描くように配置された大量のマイクロミサイルが姿を晒す。

「か、回避ですわー！」

「言われなくとも！」

ロックオンされた2人がそれぞれ別々の方向へ跳躍すると同時に左右のミサイルポッド、<ホーネット・ネスト>から大量のミサイルが解き放たれた。

左右大外から挟み込む軌道で降り注ぐミサイル。セシリアはレーザーライフルで数発撃墜し箒は回避機動で振り払おうと試みるが、捌き切れず周囲に着弾。一気にシールドエネルギーを失ってしまう。

そこへ加わる左腕のシールドガトリング<グリムリーパー>の掃射。

<グリムリーパー>は武装ヘリや巡視艇向けのGAU-19ガトリングガンをIS用に改良した物だ。12.7mmライフル弾を分速1500発という速さ（IS向けに連射速度を調節済み）ばら撒く。

大きく薙ぎ払われた弾丸の鎌は箒とセシリアに十数発ずつ命中した。シールドに激突した途端、小さな爆発が起こったのに気づいたセシリアは悲鳴を上げた。

「爆裂弾を使用しているの!？」

シールドが存在する限り50口径弾程度では貫通はしない。

が、対IS用爆裂弾は命中する度に発生する爆発により、普通の弾丸よりもシールドエネルギーを多く消費させる事が目的の弾丸だ。もちろん直接ISに当たっても効果的である。

これはマズい。防御じゃなく回避に専念し続けなければならない。

と、低い姿勢でミシエルへと迫る影。箒だ。

「それだけの装備なら動きは遅かるう!」

素早く踏み込み飛び上がると近接ブレードを振りかぶる箒。ミシエルは回避しようともせず、その代わりアンロックユニットの片方がその大きさには似合わない機敏な動きでミシエルと箒の間に割り込んだ。

箒の一撃が浮遊する盾、<シールド・オブ・アイギス>に触れる事はなかった。刃がぶつかる寸前で、箒の動きそのものが固定されて

いた。

「な、何っ!？」

「俺の存在を忘れんな!」

停止した箒の頭上を覆う影。一夏が後ろからミシエルを飛び越え、箒に襲いかからんとく雪片式式くを構える。

「させませんわ!」

セシリアの援護射撃が一夏を掠める。そこからビットによる包囲攻撃。一夏とミシエルが揃ってそこから離れて回避すると、また箒は動けるようになった。

「今のは一体何だと言うのだ………?」

『あれはAIC、アクティブ・インーシャル・キャンセラーだよ。』

ドイツで研究されていた物で、元々はISにも搭載されているPIハッシブ・インーシャル・キャンセラーCを発展させたものなんだ。物理的な攻撃をほぼ無効化しちゃう機能なんだけど、それをくブルー・ティアーズくのビット機能と組み合わせる攻防両方の性能を持たせた装備なんだ』

「何と面妖かつ厄介な……!」

わざわざピットから繋いでくれたシャルロットの解説に感謝しつつも思わずそう吐き捨ててしまう。つまり下手に近づけないという事ではないか！

箒が歯噛みした所で急に<シールド・オブ・アイギス>の先端が向けられたかと思つた次の瞬間、光弾がシールドに命中してその衝撃によるめいた。

成程、オリジナルと同じくレーザー砲も搭載している訳か。涙が出てきそうだ。しかもセシリアと違いピット単体のみならず、ミシエルまで攻撃に加わっている始末。

その代わり1対の大型ピットはミシエルから数m程度の距離しか動こうとしない。<ブルー・ティアーズ>と違ってオールレンジ攻撃ではなく防御・迎撃を優先した結果なのだろう。

攻撃が止み、入れ替わりに一夏の<白式>が箒に向かう。

「俺が相手だ、箒！」

「望む所！」

刃と刃が激突する衝撃音。

一方ミシエルの<ラファール・レクイエム>は<ブルー・ティアーズ>との1対1に移る。透き通るような蒼い機体と凶暴さを感じさせる全身の黒と赤が対照的だった。

多方向から畳みかけようとビットを飛ばす。するとミシエルの左肩上部に突き出た砲塔が動きを見せた。対空砲の様に長い砲身が2つ横に並んでいて、砲身の直径そのものはやや太い。

専用のFCSからの命令により砲塔が旋回し、2本の砲身が根元から上下に動いてから双門機関砲が火を噴いた。やや遅めの連射速度だが初速そのものは高速で吐き出された砲弾は、セシリアが展開したビットへと突き進み。

空中で砲弾が次々と爆発し、撒き散らされた破片にビットが巻き込まれた。

「空中炸裂弾!？」

「・・・・・・駆逐艦にも採用されてる機関砲の改良型だ。空を飛ぶ物を撃ち落とすのは得意だぞ」

<レイנסトーム>も艦艇や装甲車に搭載されていた既存の兵器をIS用に転用・改修を加え、砲身を単式から連装に変更した代物である。

<ブルー・ティアーズ>のレーザー射撃主体の攻撃とは違い、放たれ続ける実弾と炸薬の着弾は直撃せずとも撃たれている側に影響を与えていく。

周囲で鳴り響き続ける着弾と爆発音の連打。シールドと絶対防御の存在を理解していても晒され続けるのはセシリアの感覚を、何より

精神を蝕んでいった。

「これはっ………堪りませんわね………！」

誰が好き好んでこんな目に晒され続けたいものか。成程、確かにこれは『派手』で、まるで『戦争』でもしているかのような激しさだ。山田先生がトラウマになったというのも嫌という程理解出来た。

連装機関砲の砲弾はセシリア自身にも襲いかかり、大きい部類とはいえ『銃弾』に分類される50口径弾を遥かに超える爆発が周囲を揺さぶる。

セシリアの身動きが封じられている間に、ミシエルは自由な右手に握るショットガンで他のビットも撃墜していった。セシリアが機関砲の銃撃に捌られ続けるが為に、殆ど操作を放棄されたビットを散弾で撃ち落とすのは容易かった。

いつの間にかセシリアはアリーナの壁際に追い詰められていた事に気付く。ビットも4機失った。シールドエネルギーも今や半分以上。まさにジリ貧。

せめて一矢報いるべく、連射の僅かな切れ目を狙って腰部に残されていたミサイルを発射した。反射的に<レインストーム>はミシエル目がけ飛来するミサイルの方に向けられ、見事撃墜してみせる。

それで十分だった。アリーナの壁に沿って瞬時加速。<レインストーム>並びに右肩の固定式大口径砲の射界から逃れ、ミシエルから見て右方向へ回り込むよう横滑りしながらレーザーライフルを構え

る。

「このタイミングなら——っ!？」

セシリアにとって不運だったのは、砲撃の射界から出来るだけ遠ざかるべくミシエルの真横まで移動した事で、彼のすぐ横に浮かぶ<シールド・オブ・アイギス>にミシエルの姿がすっぽり隠れてしまふ位置取りをしてしまった事だ。盾に隠れて何処も狙い撃てない。

「（ならば早くこちらを向きなさい！私に再度狙いをつけようとしたその時こそ、わたくしの射撃が貴方を貫きますわ！）」

セシリアにはそれだけの技量がある。無理に瞬時加速を使ってしまった為に、これ以上高速機動を行うエネルギーも残っていない。

幾ら頭まで装甲に守られていても、<スターライトmk?>の威力ならば直撃さえできれば絶対防御を発動させれる筈。この一弾に、全てを賭ける。

——ミシエルの攻勢が余りに驚異的過ぎ、容赦ない砲火を浴びせられ続け追い詰められていたセシリアは忘れていた。

「だから俺を忘れんって」

「そちらに行ったぞ、オルコット！」

「えっ？」

振り向けば、アリーナの反対側で箒と戦っていた筈の一夏の姿。

背中をく雪片式型>で斬りつけられ絶対防御発動。くブルー・ティ
アーズ>のシールドエネルギー残量0。

セシリア・オルコット、撃破。

「……………フォロー、助かった」

「へへっ、良いつて事よ」

箒と鏑迫り合いを繰り返していた最中、一際大きな爆発が起きてからハイパーセンサーでセシリアがミシエルの横に回り込んだ事を察知した一夏も瞬時加速を起動し、セシリアの背後を取ったのである。

箒が一夏との戦いに夢中でセシリアへのフォローがその瞬間まで頭に無かった事と、瞬発力に優れたく白式>だからこそ成功した奇襲だった。

「これで残るは……………」

「箒だけ、だな」

「くっ！」

箒も矢継ぎ早に銃撃砲撃を撃ち込んでくるミシエルと、と自分を上回る剣技の持ち主である一夏相手にたった1人で凌ぎ続けられる訳もなく。

あっという間に箒の<打鉄>もシールドエネルギーを枯渇させられ、黒星をつけられるのであった。

「いやー、前に聞いてて何となく分かってたつもりだけど、本当に派手だったなミシエルのIS」

「……………否定はしない。俺がトリガーハッピーなケがあるせ

いもあるが、ああいう戦い方もそれなりに有効だからな」

模擬戦が終わってから涙目でセシリアに詰め寄られた。「し、死ぬかと思いましたわ!」とは本人の言い分。

一夏もこればかりはセシリアの気持ちがよく分かった。そりゃあんな弾幕誰が相手にしたがるもんか。

今度はミシエルが<ブルー・ティアーズ>のビットを撃墜してしまったので再度修理に出さなければならぬという。その辺りがミシエルはちよつと申し訳ない。

「はい2人共お疲れ様」

「………ありがとう、シャルロット」

2人と同じピットの方に居たシャルロットがタオルとスポーツドリンクを手渡してくれた。

「サンキューシャルロット。でも動いた後だったらキンキンに冷たいと身体に悪いから、こういう時はむしろぬるめの方がずっと身体に良いんだぞ」

「えっ、そうなんだ。じゃあ今度からそうした方が良いかな?」

「………気遣ってくれるのは嬉しいが、不健康な物ほど気持

ちいいのがジレンマでもある」

歩きながら談笑する。3人分の足音にミシエルの義足が床にぶつかるゴツン、ゴツンという音が加わった。

「何となく思っただけだよ」

「えっと、何の事？」

「ミシエルのIS。実習で最初に見た時からそんな気がしてたんだけど、ミシエルのISって他の機体とずいぶん感じが違うんだよ。武装とかもそうだし」

「……より兵器的で実戦的、という事か」

「そうそれだよそれ、そんな感じ。一応剣の修行してた時にそういう心構えとかも千冬姉や兄弟子の人から叩き込まれたりしたせいかもしれないけど、ISも一応立派な『兵器』だろ？他の人達はそこから辺どう考えてるのかよく分からないんだけど」

「そうかもね、確かにISにそこまで詳しくない人達からしてみれば、むしろファクションの1つぐらいにしか考えてない人も結構多いもんね」

その辺りには女性しか扱えない、というISの特性が深く関わっているのだろう。

最近ではIS絡みの本といえば軍事的・兵器的な観点を含めた物ではなく、IS（並びに水着同然のISスーツ）を身に纏った見麗しい美女・美少女達のグラビアをまとめた写真集などの方が評判だとか。

そういった流行がより世間が持つISに対する概念を歪めていつている、のかもしれない。

「でもミシエルのISとか使ってる武器とか、それこそ兵器っぽかったからさ。おかしい話かもしれないけど、ISが無い実際の戦場とかあんな感じなんだろうな、って思ったんだよ」

一夏もまた『実戦』の空気を知っている。目の前で人が傷つき、死んでいく光景を目の当たりにした事がある。敵意を持った相手に囲まれ、自らの命を守る為にその手で敵を打ち倒す感触を一夏は知っている。

ミシエルの義足を目にする度、その記憶が蘇るのだ。剣を振る度、その感触を思い出すのだ

「やっぱり忘れちゃダメなんだろうな。ISってのはさ、武器で、力なんだよ。誰かを傷つけ、殺せる兵器なんだって事を」

右腕の待機形態のく白式く目に向けて。

そう、『コイツ』も竹刀や木刀や真剣や銃と何ら変わらない。扱い

方1つで守る事にも殺す事にも使える手段の1つでしかないのだ。

かつてミシエルが銃を使って一夏を助けに入った時の様に。そしてまた別の人間の銃によってミシエルが撃たれ、片足を失った時の様に。

——けれど。

このISを作った『あの人』は——本当は何を考え、こんな『力』を生み出したのだろうか？

「……だが結局、人を傷つけ、殺すのは、人そのものだ」

「それも分かってる。だけど、そうならない為にもこの力がどういう存在なのか、理解しとかなきゃダメなんだと俺は思う」

『コイツ』に振り回されて自分や他人を傷つけない為にも、大切な物を守る為にも———もっと『コイツ』を理解し、そして自分自身もまた高めていかなきゃならない。

だがそれを自分1人でやってみせるなんて啖呵をあっさり言い切れるほど、一夏は自信家ではない。

「出来たらで良いんだけどさ、これからも偶にで良いから、訓練に付き合ってくれないか？ずっと俺1人だけで続けるだけじゃ限界があるだろうし」

「……………何を今更。俺自身こうやって鍛え合うのは嫌いじゃない。幾らでも付き合おう」

「僕も一夏がそうしたいんだったら幾らでも手伝うよ？だって友達だもん」

ミシエルは、ほんの僅かに唇の端を持ち上げたただだが間違いなく笑みを浮かべ。

シャルロットは太陽の様に温かく、見る者を安堵させる優しい笑顔で。

『友人』からの頼みに即答してくれた。

そして一夏も笑った。目の端を、ちょっとだけ光らせながら。

「……ようやく本気で、この学校に来て良かったって思った気がするよ」

——こんな友人達に出会えて、本当に良かった。

1 - 9 : 約束の行方 / 恋は戦争？

「あ、あのさ、一夏——約束、覚えてる？」

「えーっと、あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を——」

「そ、そう、それ！」

「——奢ってくれるってやつか？」

「最っ低！！死ねっ、この馬鹿っ！！！！」

ぶあっちん！！！！！！

「——てな感じで、その場に居た筈からも『馬に蹴られて死ね』
つてお言葉を頂いたんだが」

「……で、その理由が分からなくて俺達に聞きに来たと？」

「そう、そんな感じ」

ベッドに腰掛けたミシエルは、顔に刻まれた紅葉の痕が痛々しい一夏
の言葉に頭を抱えてしまった。

そーいやそういうイベントもあったようなあったような。2次創作
でも大概出てきたイベントだから一応記憶には残っているけど、改
めて当事者の口から聞くとうん、頭痛を覚えてしまう。

「うーん、約束の意味はよく分からないけどとりあえず僕も一夏は
ライオンに噛まれて死んじゃえババアと思っよう？」

「よく分かってないのに笑顔で女の子がそんな怖い事言わないでく
れよ!？」

ちなみに何故ライオンなのかはプジョーというフランスの有名な自
動車メーカーの企業ロゴがライオンだからだったり他にも理由があ
ったりなかったり。とりあえず乙女（但し非処じウボア）的に鈴

と箒側だ。これで3対1。尚も情勢は悪化の一途。

シャルロットはミシエルと同じベッドの上に女の子座りの姿勢でミシエルに寄り掛かっていた。彼の腹辺りに両腕を廻し、時々猫みたく顔を擦りつけている。

むしろシャルロットは子犬属性じゃなかるうか、などと益体もない感想を一夏は抱いてしまった。ほら、ミシエルに頭撫でられた途端高速回転するゴールデンレトリバーの尻尾が容易に幻視出来たし。

というかシャルロットの格好は地味なようでシンプルかつスタイリッシュなデザインのスポーツジャージなのだが、身体のラインがよく分かるのでキュツと引き締まった腰のくびれからお尻の曲線とか身長に不釣り合いなぐらい豊かな胸元とかについつい目が行ってしまい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ピキピキ）」

「ゴメンナサイ俺が悪うございましたなのでどうかその安全装置を外した銃をぜひともホルスターの中に御戻し下さい」

「やつぱり一夏も男の子だねえ。でもそうがつつき過ぎると女の子に嫌われるよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（・・ω・・）シヨボーン」

「ごめんごめん、ミシエルは例外だから！むしろ、えっと・・・・・・ミシエルならもつと激しくても構わないかなあって。ああでも優しくしてくれるのも好きだよ僕」

「いや、何の話だよ

ナニの話ですが何か？

閑話休題

「はあ、わけ分かんねえ。そこまで怒る約束なのかつーの」

「でもきつと、鳳さんにとっては大事な約束だったんだと思うよ。彼女、泣いてたんでしょ？」

「うつ．．．．．ならやっぱり俺の方が間違ってるって事になるのかな」

「本当にその約束をした時の事、ちゃんと思い出せないの？」

「多分小学校卒業する直前ぐらいだろ？そんな時は全然余裕無かったからなあ俺」

「何かあったの？」

「．．．．．その頃はドイツから戻って来たばかりでさ。ミシエ

ルの事で凹みまくって、それから絶対強くなってやるって我武者羅だった時期だから」

寝食も忘れ、血豆が潰れても竹刀を振っていたのをよく覚えている。なにせ千冬姉から雷を落とされるまで止めなかったのだから。

そういえば遮二無二自分を鍛えるのに夢中になり過ぎて、鈴や彼女の親御さんからも心配されたっけ。

「・・・・・・・・スマン」

「いや別にミシエルのせいじゃないって！どっちにしたって俺の責任なんだし」

「もしかして『酢豚を奢ってくれる』って意味合いは似てるんだけど別の言い方だったとか」

「あー、かしんないな。そんな気がしてきた」

しばし黙考。えーつと確か、あれは放課後の教室で、えつと、えゝゝゝゝゝゝゝゝと・・・・・・・・

「ああそつだ思い出した！『料理が上達したら、毎日私の酢豚を食べてくれる？』だ！」

「良かったね思い出せて・・・・・・・・で、それってどういう意味な

の？」

「え？えっとそれはだな」

再度首を捻って見解を絞り出す。

「俺は鈴がただ飯を食わせてくれるんだとばかり思ってたんだけど、ならそれぐらいであそこまで怒る訳ないだろうし」

「どうなんだろう、僕もそういう日本語独特の言い回しってあんまり詳しくないし。ミシエルは意味分かる」

シャルロットに話を振られたミシエルは何処か言い辛そうに口を引き締め、頭を搔く。

それから溜息をついてからようやく口を開いた。

「……もしかしてそれは、『毎日俺の味噌汁を作って下さい』的な意味合いだったのではないか？」

「それってどういう意味なの？」

「……要は日本流の遠回しなプロポーズだ。普通なら男の方から言う言葉の筈だな」

「へーっ、そうなんだ。日本って変わった言い方するんだね――」

——って、あれ、それって？」

少し遅れて言葉の意味が脳に沁み込んだシャルロットは、ゆっくりと一夏の方を見る。

一夏は、固まっていた。顔中冷や汗ダラダラ、落ち着かなさげにミシェルとシャルロットに視線を行ったり来たり。

「い、いや、冗談だろ？そんなの深読みし過ぎだって、あ、あはははははは………」

しかし、激昂した鈴が別れ際に見せたあの涙。あれは多分本当にシヨックの余り浮かんだ涙だったと今更ながら思う。

まさか、鈴は、本気でその約束を？それを自分はすっかり忘れてて、そのせいで彼女を泣かせた？

「……………最低だ、俺」

呻きながら文字通りの意味で一夏は頭を抱えた。その姿は神に懺悔する敬虔な信徒にも似ていた。

彼は本気で、鈴との約束を忘却していた事を悔いている。当たり前だ、自分は幼馴染の少女の心を深く傷つけてしまったのだから。それを悔わず、何を悔う。

「どうすりゃいいんだ一体……」

脳裏を過ぎるのは鈴と、そして彼女同様自分に想いを向けてくれていた篤の顔。

既に自分は篤の事が愛しくて愛しくてしょうがない。だけど鈴もこれ以上傷つけない。泣かせたくない。だけど2人の顔を上手く両立させる手立てなんて全く思い浮かばない。

いや、そもそもそんな2人の顔を立ててお咎め無し、なんて打算的な事を考える事自体間違っている。

「とにかく今日はもう遅いからさ、一晚じっくりどう答えるのか考えてから、明日になったら真っ先に謝りに行った方がいいと思うよ」

「……そうするわ。押しかけてゴメン」

ノロノロとした足取りで部屋から出ていく一夏の表情は、まるで幽鬼の様だった。

一夏が経ち去ってしばらくしてから、心配そうな表情でシャルロットは呟く。

「これ以上ややこしくならなきゃいいんだけど……」

「・・・・・・・・こればかりは、どうにもならん。当事者同士でケリをつけるべき事柄だからな」

1025室には最早一夏1人しか居ない。

全ての電気を消し、窓から射す月明かりしかない部屋の中、ベッドに横たわった一夏の眼差しはぼんやりとしか見えない天井を向いているが、彼の精神は1つ1つ過去を見つめ返していた。

中学時代、もう1人の友人と一緒に騒いでいた頃。あの約束を交わしてからその日々を、鈴は一体何を考えて過ごしていたのだろうか。一夏にはまったく分らない。

「・・・・・・・・」

ふと、無性に声が聞きたくなった。中学の入学式に知り合ってから、

鈴が転校してから卒業するまで一緒だった、定食屋の息子。恐らくは自分と鈴両方相手に最も長く接してきた赤髪の悪友。

勿論携帯に向こうの電話番号は登録してある。この時間なら、今頃バラエティ番組でも見てまだ起きてる筈。

「もしもし、弾か？」

『いよう一夏！何日ぶりの電話だよ teme！女だらけの学校の感想はどうだ！？』

五反田弾の能天気な大声が耳に突き刺さる。

『羨ましいよなあ。あれだろ、IS学園の女の子って可愛い子揃いってもっぱらの噂だぞ？つか替われ、今すぐ替われ。にしてもいきなり何で電話してきたんだよ。いや声聞けて嬉しいけど』

「あー、俺も久々に他の男の声が聞きたくなってさ。ほら、この学校って俺以外に1人しか男子がいないから」

『ああ例のファースト男性操縦者な。伝説の傭兵が年誤魔化して入ったんだっけ？』

「……………本人聞いたら多分泣くからそう言い方は止めてやってくれ」

割と本気でそう思う。

『それともアレか、また揉め事に首を突っ込んで暴れたりフラグ立てたりしたんだろ？』

「なわけねーよ！相手女の子ばかりなんだぞ！千冬姉に殺されるわ！」

『え、千冬さんも一緒なのか？』

「俺の担任。IS学園でいつの間にか教師やってたんだと」

『納得納得。なんつっても千冬さん『無敗の戦乙女』だもんな』

「それからさ、ついこないだんだけど鈴も転校してきて――

――」

そこまで言うってから黙り込んでしまう。鈴の泣き顔がフラッシュバックし、電話の向こうで弾が言っている内容も素通りしてしまう。

弾も急に無言になった友人に向けてしばらくは呼びかけていたが、その沈黙の長さに相手がただ言葉を区切った訳ではない事を悟り、軽さの抜けた声に切り替える。

『………何かあったのか？』

「――なあ、弾。俺と一緒に馬鹿をやってた時さ、弾から見て鈴

「ってどんな様子だったんだ？」

『鈴がどうしたんだ？』

「分からなくなってきたんだ。鈴が俺と一緒に遊んだりした時、本当に鈴は楽しんでくれたのか……。実は俺が気付かない所で、鈴を傷つけてたんじゃないかって」

『……。話してみるよ。アイツと何かあったんだろ』

弾と知り合う以前に鈴と交わした約束。自分はそれを勘違いして、そのせいで鈴を泣かせてしまった事。他の友人に指摘されるまで約束の本当の意味すら気付いてやれてなかった事。既に自分は別の少女と情を交わし、告白しようと決めていた事。

今度は弾が絶句する番だった。

『まさか唐変木の極みみたいな一夏が女に惚れた、だと！？オイオイオイオイまさか宇宙滅亡の前触れじゃないよな？』

「……。弾が本当は俺の事なんて思ってたのか今のでよく解ったよ」

電話の向こうで咳払いの音。

『とにかくだ。一夏は他の奴から見て鈴が自分と居た時はどんな感

じだったのか教えて欲しいんだな？」

「・・・・・・・・ああ」

『率直に言つて、俺の目から見ても鈴がお前と一緒に遊んだりしてる時は本当に心から楽しんだと思うぞ。鈴が自分なりに一夏にアピールしてたにもかかわらずお前がちつとも気付いてやれなくて、むしろ頓珍漢な答え返されたせいでお前をぶっ飛ばした時も含めてな』

「何だよそれ。でも今思い返すだけでも心当たりあり過ぎて胃が痛くなつてきそうだ・・・・・・・・」

『そう気付いてやれなかった事に今ようやく気付いてやっただけでも十分成長してるつて。お父さんは嬉しいぞうんうん』

「お前みたいな父親を持った覚えはない。そもそも親の顔なんて知らねーつての」

『・・・・・・・・すまん。ともかくだな、鈴が一夏の事が好きだったのはアイツの振る舞いからしてあの頃から丸分かりだったな。アピールされてる本人しかその事にさっぱり気付かないんだから、見てるこっちがぶん殴りたくなつたぐらいだぜ？』

「ゴメンナサイハンセイティマス」

というかそれってもしかして筈と一緒にだった頃もそんな感じだったりしたんだろうか。無性に筈にも土下座して謝りたくなってきた一夏であった。

『その癖クラス中の女子どころか他の学年だったり別の学校の女子にもフラグ立ててるし！覚えてるか、お前が剣道の大会に出た時学校中の女子がお前の応援に行ってたの』

「悪い、割と本気で腹切りたくなってきた……」

つまりその分鈴をやキモキさせ振り回してきたという事だ。ずっとあの約束を心に秘めていた彼女を。

「——っ」

知らず知らず唇を噛み締めていた。自分の事ばかりにかまけていた自分に、鈴へ何を言えるというのだ。

一夏が強くなろうと思ったのはただ守られるだけでなく、自分の力で大切な人達を守ってみせると決心したからだ。なのに、何という体たらく。

ただ力を手に擦るだけでは、大切な人達の心までは守れない。

鈴の想いに気付けなかった事自体が結果鈴を傷つけたのだとしたら、それは。

「ロクでもないにも程があるぞ俺・・・・・・・・」

『オイ、一夏、ナニ人鬱ってんだ』

「俺はさ、これ以上鈴を泣かせたくないんだ。だからって鈴との約束を受け入れると、今度は他の、俺から気持ちを伝えるって約束したもう1人の女の子を泣かせる事になっちまう」

『お前なんてNice boatされちまえ———とやりたい所だが、一応親友だから許してやろう。で、俺としてやはり長い付き合いの鈴を応援したい所だが、結局決めるのは一夏だ。だからお前が決めて、お前自身で決着をつける。当事者じゃないし恋人も居ない俺には、それぐらいしか言えねーや』

口調はいつも通りの段だった。けれど声そのものはとても真剣で、なのにとても温かった。

友人の言葉に針金で絞めつけられていたように締めつけられ、鬱屈しかけていた一夏の心が緩み、腹の底のしこりが僅かだが軽くなる。

こんな風に胸の内をぶちまけて意見を求めるのは、ある意味逃げの1つでしかないと一夏も分かつてはいる。それでもこればかりは毛色が違い過ぎて、黙って抱え続けるには一夏には難し過ぎた。

鈴、そして箒もこんな扱いかねる感情をずっと孕んで過ごしていたのだとすれば、それは尊敬に値すると切実に思う。

まったく、恋愛なんて自分には縁遠いものだと思っていたのに。

「とりあえず明日になったら鈴に真っ先に謝って——箒の事を、伝えようと思う」

『お前が殺されない事を祈ってるよ』

「まだ死ぬ予定はねーよ。だけど、箒とそれだけの事してきた以上、責任を取らなきゃ、さ。勿論それ以外にも理由はあるけど」

『……やれやれ、今度は鈴が俺に愚痴りに電話かけてくるんじゃないかこれ？』

弾の愚痴を最後に、通話は切れた。

——鳳鈴音にとって、織斑一夏とは何なのか。

小5の始めに転校してきてからの付き合いで同級生で幼馴染で家で経営してた中華料理屋の常連で一緒によく遊んだ男友達でからかわれたりした時は何時も止めに入ってくれた頼りになる男の子で結構強い剣道少年でだけど中学に入る前後からちよつと人が変わってもつと強くなる事に夢中になって人が困ってたりするとすぐに首を突っ込んでそのせいで意味無くトラブルに巻き込まれたり危険な目に合う上にその度に女の子にフラグ立てたりするもんだからそれが気に入らなくてそのくせその女の子達（鈴も含む）からのアプローチにはめっぽう鈍くて一体何人の女の子の枕を涙で濡らさせた事やらエトセトラエトセトラ。

だけどもあ、こういうのは先に惚れちゃった方の負けだというのは鈴もよく分かってる訳で。

そもそも彼女にとって教室でのあの『腕上げて毎日一夏の為に酢豚作ってあげる』宣言は、元々はお遊び半分——でも本気も半分——で一方的に結んだ約束に過ぎなかった。

その時の一夏はとにかく見ていらなかったのだ。日頃の能天気っぱさはなりを潜め続け、いつもいつも泣きそうな顔をしてたのだから。断片的に聞き出せた話によると、旅行先で知り合った友達を自分のせいで死なせかけたのに一言も謝らないまま日本に戻って来てしまったとか。それを当時の一夏はずっと後悔し続けていた。

そんな彼の姿を見たくなかったから——初恋の少年の笑顔が曇る所なんて見たくなかったから。

だから鈴は一夏にあの告白をしたのだ。今考えればもっとマシなやり方はなかったのかと言いたくなったりもしたけれど、後悔はしていない。少しでも彼の心労が誤魔化せればと、その時はそう思ったのだ。

その約束が鈴にとってかけがえのない誓いに変わっていったのは中学になってから。

そりゃあ一夏は小学生の頃からカッコ良かったし優しかったしスポーツも万能な方だから女子からの人気は高かったけど、一夏の人気が輪をかけて少女達の間を広まっていくのにそう時間はかからなかった。

とにかくこの年頃にもなると男女共々異性への興味が強くなり出す年代だけに一夏の評判が元他校の少女達に伝わるのも速かったし、一夏本人の男前っぷりがその頃からより強くなっていった点も否定できない。

更に一夏の持ち前の正義感から同じ学校の生徒が不良に絡まれてたりすれば即座に助けに入っちゃうお陰で評判は鰻登り。おまけに助けられる相手はほぼ毎回女の子だったりするもんだから一夏争奪戦参加者が更に追加。

水面下では少女達の熾烈な激戦が繰り広げられていたのであった。それに鈴や弾が何度巻き込まれた事やら。いやま、鈴の方から参加する事もしよっちゅうだったけど。

そんな一夏に群がる少女達の姿を見ている内に、小学生の頃の半ば友情と混合した淡い恋心は急速に1人の女としての感情に変化していった。

それはある意味独占欲の塊でもあった。顔や評判みたいな上っ面しか一夏を知らない癖にすり寄ってくる連中に私の一夏を渡してやるもんか、という怒り。

アンタ達は本当を一夏を知ってるの？何で一夏が剣を振ってるのか知ってるの？友達に謝罪の一言も言えないままにいる事をどれだけ一夏が悔やんできたのか知ってるの？アンタ達はそれを知った上でアイツを支えてやる気はあるの？

ドロドロとしたそんな淀みを抱えながらも、鈴は一夏の前では笑顔であり続けた。別にそれは演技でもなんでもなく、心から浮かぶ笑

顔だった。それと並行して、上辺しか一夏を見ないで近づいてくる輩をずっと遠ざけるのに身を削ってきた。彼には気付かれない様。

別れは唐突だった。いきなり両親が離婚する事になって、母親に引き取られた鈴は中国へと渡る事になった——最後まで一夏への慕情を言葉にしないまま。

何故ならあの夕陽の教室での約束は鈴の魂に刻まれ続けていたから。その記憶だけで、鈴は頑張れるから。

だけど分かっていた筈だ。織斑一夏という少年が肝心な所でとんでもないポ力をやらかすような相手である事は。特に女絡みでは尚更に。

本当、何都合のいい考えばかり思い浮かべてたんだろう？私がその約束を覚えてたって、相手が覚えてるとは限らないのに。

頭でそう理解は出来ても納得できないのが人間という物で、約束に秘めた乙女の想いを完膚なきまでに踏みにじってくれた一夏からは詫びの一言ぐらい向こうから言ってもらうまで許してやるもんかと鈴は心に決めた。

その一方で、これが長期戦になりそうな気配も鈴は何となくだが予感していた。だって一夏だし。

納得いかない事にはとことん頭を下げない性格な上に朴念仁なんだから鈴が怒っている本当の理由も……約束に込めた意味も

理解していない可能性が高い。非常に高い。

だから、

「本つつつつつ当に俺が悪かった！！！！」

引つ叩いた翌日、鈴が教室に来て早々2組の教室に乗り込んできた。一夏が鈴の机に頭を叩きつける位の勢いで頭を下げてきたものだから、思わず鈴は椅子ごとひっくり返りそうになったのであった。

「あー、本当にビックリした。一夏アンタねえ、あたしに頭下げに来たのかそれとも驚かせて心臓止めに來たのかどっちなのよ」

「驚かせたんなら悪かったけど、とにかく『鈴に謝ろう』って気持ちで一杯だったからなあ……………」

「ならもう良いわよ……………（ま、まったく、本当に昨日の今日で謝りに来るなんて。まさか誰かに吹き込まれたんじゃない）」

「ん？何か言った？」

「別に！」

自分達に集中する教室中からの視線から逃れるため、一夏を引き摺って辿り着いたのは校舎の屋上だった。授業直前なので人気は全く無い。

彼の手を引いて屋上に飛び込んだ時の配置から、入口に背を向ける形の一夏に鈴が向き直ると、彼は真面目な表情で真正面から視線で鈴を射抜く物だから、鈴の胸の下で刻まれる鼓動が一気に激しさを増してしまう。

それから一夏は、小柄な鈴からでも彼のうなじが見えてしまうくらい深く深く頭を下げた。

「もう1回言わせてくれ。本当に、悪かった。ずっと鈴は約束を覚えてくれてたのに」

「も、もう良いわよそれは。そこまで神妙な顔で謝られたら、これ以上文句のつけようが無いわよ」

そうか、と一夏は頭を上げ、今度も真面目な顔ではあるがどこか瞳を揺らがせ、言いだし辛そうにしばし口籠った後。

「あ、あのさ鈴——あの約束ってもしかして、『そういう意味』のつもりで鈴は言ったのか？」

破裂音すら聞こえそうな勢いで鈴の顔が瞬時に紅潮した。

「そ、それは、え、えええと、そのね、あたっあたしは違っ、いやいやいや違うくはないんだけど——！」

あーだの、うーだの、うにゃああああああっ！？だのしばらく喚き散らし。

「だ、だったらどうなのよ………？」

消え入りそうな声で、落ち着かなさげに自分の手を弄びながらも肯

定の意を示した。

対して一夏は本当に、本当に辛そうな表情を浮かべ、一旦唾を呑みこみ息を大きく吐き出してから。

鈴との約束への答えを、告げる。

「——」
「ゴメン」

えっ、と鈴は目を見開いた。一夏の言葉の意味が理解できないと表情が如実に今の鈴の内心を現していた。

一夏は爪が肉に食い込むほど拳を固く握りながら、何とか用意しておいた答えを吐き出していく。

「鈴があの頃からずっと俺の事をそう思ってくれた事は嬉しかったし、俺だって鈴の事は大切な相手だと思ってる——でもゴメン。悪いけど、鈴の想いには応えられない」

「なん、な………何で………?」

「——鈴以外にも応えてあげなきゃいけない子が居るんだ。変に固い癖に本当は甘えん坊で健気でさ、最初の頃が信じられないくらいいどんどんどんどんどんどん大胆になってくるし」

初めて2人きりで再会した時、涙交じりに本心を吐露してくれた箒の泣き顔。肌と肌を合わせた時の妖しい淫魔と無垢で従順な子犬が同居したような濡れた瞳。

結ばれる事への約束は鈴の方が先だったのかもしれない。だが先に抱いていた一夏への恋心を明確に、彼にも理解出来る形で示したのは箒が先だった。

「こんな言い方はおかしいかもしれないけど、あそこまでされちゃ責任取らないとな。俺も自分の方からアイツに応えようって、決めてたんだ。アイツも俺にとって大切な人だから」

だから鈴の気持ちには応えられないと、一夏は言った。

「勿論鈴の事は大切な――！？」

突然鈴が一夏の襟元に手を伸ばしてきた。余りにも唐突かつ予想外の行動に一夏は反応できず、更に鈴の細い足が一夏の足を刈る。

足元は石畳。下手に抵抗すると自分も鈴も危険であり事を悟り、敢えてそのまま地面に叩きつけられた。受け身は取ったので頭は打つてないし背中ダメージは軽減されたが若干呼吸が苦しい。

「鈴、何を」

「……………ざけないで」

仰向けになった一夏にマウントポジションを取った鈴が、掴んだままの彼の胸倉を引き寄せ、額同士がぶつかるのも気にせずキス一步手前の近さまで顔を近づけた。

一夏の視界一杯に広がる鈴の顔に浮かんでいるのは、絶望。悲痛、

憤怒、そして涙。

—— ああクソ、また鈴を泣かせちゃった。

「ふざけないで！あたしが、あたしがどれだけ、どんな思いでつ、
アンタと一緒に居たと思ってるのよ！アンタが居るから此処まで来
たのに！アンタが居たから、ここまでこれたのに！」

「鈴……」

「こんなの、こんな、これじゃああたしがば、ば、ば、馬鹿みたい
じゃないの！忘れられて、ずっと気付いてもらえなくて、ようやく、
ようやく気付いてもらえたと思ったのに……！」

熱い滴が一夏の頬に落ちた。その熱から一夏は目の前の少女の抱え
ていた激情がどれほどの物なのか、改めて理解し直す。

今この瞬間自分がどれだけ彼女を傷つけ、苦しめているのかも。

「………本当、俺って最低だな」

「ええそうね。アンタは男の中でも最低の大馬鹿野郎よ。今ここで
殺した方が世の中の為みたいな気がしてきたわ」

一転、極寒の空気すら感じさせる無表情を顔に張り付けた鈴は身体
を起こした時、第3者の存在に気付いた。

屋上の入口に黒のポニーテールが僅かに見え隠れしている。一夏の言っていたその相手が誰なのか、不意に鈴は悟った。

「そう、そうなの。彼女がそうなんだ」

「鈴？」

「ねえ一夏。確かに今のアンタは殺してやりたいくらい憎い存在だけどね——それでもまだ未練もあるの。あたしは、かなり諦めが悪い性質だから」

またも放つ気配は変わり、次に浮かんだのは強烈な負の感情が入り混じった泣き顔でも、極まり過ぎて冷え切ってしまった激情を覆い隠す無表情の仮面でもなく。

「あたしはね、代表候補生の地位もクラス代表の地位も自分の力でここまで奪い取ってきたの。だから、アンタの事も自分の力で奪い取ってやるわ」

一夏のよく知る、強気で勝気な猫みたいな笑顔だった。

「今度のクラス対抗戦、あたしと勝負してあたしが勝ったらアンタはアタシの恋人になってもらうわ!!」

1 - 10 : 決闘者 × 乱入者 × 突入者

1組代表：織斑一夏 VS 2組代表：鳳鈴音

—— クラス代表戦の第1試合は、まるで逃えたかのような因縁の組み合わせだった。

「ようやくこの時が来たわ………今度は、約束忘れてないでしようね一夏」

「ああ、今度はちゃんと覚えてるさ」

鈴の専用機<甲龍>は黒と紫というカラーリングの機体で、ミシエルのISとはまた別の意味で物々しいというか——悪役っぽい機体だな、などと口に出したら間違いなく鈴が怒るであろう感想を一夏は抱く。

彼女の得物は1対の巨大な刀身の青龍刀——刀身部分だけで鈴の上半

身よりも大きい―それ以外にはそれらしい得物は見当たらないが油断は出来ない。スパイク付きのアンロックユニットに仕込みがありそうな予感。

「女だからって手加減は無しよ。こつちも本気の本気でやらせてもらうからね!」

「分かってるよ、それに手加減なんて出来そうにないしな」

屋上での約束から数週間、それからも度々鈴とは顔を合わせたり見かけたりしている内に分かった事がある。

鈴は強い。普段の立ち振る舞いからも感じ取れる。転校するまで鈴は特に格闘技と化していなかったのは間違いないから、中国に渡つてからの1年余りでそれだけの技量を身に付けた事になる。

青龍刀を振り回す手さばきからかなりの技量の持ち主だと読み取れた。幾らISの筋力補助があるとはいえ、あれだけ巨大な得物を片手ずつ淀みなく扱うのは難しい筈だ。

「（だからって――ここで負けちゃカッコつかねえもんな）」

箒に自分から言ってしまったのだ。流石に此処で違えてしまえば、一夏としては男が廃る……。ああそこ、今更だるとか言つてやらない。

だから悪い、鈴。最後にそう詫びてから、＜雪片式型＞を握り直し中段に構えた。

「へえ、良い顔するじゃない」

言葉通り一夏が本気をだして自分と戦うつもりである事を鈴は感じ取った。

あんな顔をした一夏を鈴は何度か見た事がある。例えば剣道の試合の時。例えば鈴が中国人である事をからかいのネタにしようとしたクラスメイトから庇ってくれた時。例えば中学時代トラブルに巻き込まれた友達を助ける為にたった1人で十数人の不良グループを叩きのめした時。

そんな、彼に本気を出させるぐらい思われているあの少女……
・篠ノ之箒の事が、鈴は無性に羨ましくて、憎たらくて。

自分だって彼女に負けないぐらい一夏の事が好きで堪らないのに、

一夏は――

「（ああもう、今は戦いに集中集中！！）」

とにかくこの戦いに勝ってしまえば一夏は自分の物……。本当はそんな景品みたいな扱いしたくないけれど、それは一夏の自業自得。うん、そういう事にしておこう。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

試合開始のブザーが鳴り響いた瞬間、2人は同時に飛び出していた。

「くっ！」

両者とも接近戦を挑んだは良いが、鈴の方は一夏の動きが予想以上に速い事と一夏の取った構えに気付いて、咄嗟に青龍刀をかざす。

十中八九鈴は何か隠し玉を持っている。ならそれを出す前に倒せばいい、と一夏は考えた。彼女には悪いがこれもまた兵法の1つであり、『本気』である以上出し惜しみする必要もない。

身を低くし、左手は峰に添え刀を握る右手は弓引くように構え、上半身を大きく右へと捻り、そして呐喊。

裂帛の気合と共に思い切りく雪片式型>を突き出した。

切っ先は鈴が盾代わりにした青龍刀の『面』の部分に突き刺さる。両方の手が衝撃で痺れ、しかしそれでも一夏は後部スラスタ―翼を噴かして切っ先を押し込み、鈴は青龍刀を傾けてベクトルを斜め上へと方向転換させた。

結果、2人は交差し合ってからそれぞれ相手に向き直り、開始前とは位置が入れ替わる形になる。

一夏の全力の突きを受け止めた青龍刀の刀身には、ハッキリと見て取れる大きな亀裂が刻まれていた。

「剣持つと馬鹿みたいに強いのは相変わらずみたいね!」

「まだまだ、こんなもんじゃねえさ!」

「今度はこっちの番よ!」

両肩のアンロックユニット展開——<龍咆>という名の不可視の砲撃が連続で放たれる。

「一夏……」

ピットでミシエルや千冬達と共に試合をモニターで見ていた箒は心配そうにそう呟く。

画面の中では一夏が何度も回避機動を取り続けていた。鈴のISから放たれる謎の攻撃が度々一夏の近くで炸裂している。

勿論箒は一夏を応援していた。授業前にもかかわらず注目を浴びながら教室から逃げ出した2人を追いかけた彼女もまた、あの屋上での会話をきいていたのだ。

鈴は自分と一緒に。ずっと一夏を見ていて、ずっと一夏の傍に居て、ずっと一夏を想い続けて、そして一夏と望まぬ別れに引き裂かれて。本来一夏が勝負に負けたら鈴の物になる、という賭けは箒は断固拒否し鈴に詰め寄ってもおかしくない事柄である筈なのだが、何故か今日この日まで箒はそうしなかった。

だって、彼女は自分なのだ。もし自分が鈴の立場で、今の箒の立場に鈴が居たのなら、箒も彼女と同じ事をしたのかもしれない。

いや、もっと酷い事になっていたかもしれないと自分でそう思ってしまう。愛しさ余って憎さ百倍、もしかして鈴のみならず一夏に危害を加えようとしたかも……………

「（それに彼女もまた、一夏の鈍さに散々振り回されてきたみたいだから……………）」

一種の連帯感？というか、同じ苦勞を分かち合ってきた者同士、話

も合いそうな気がする。

そう、例えば初対面の時は散々一夏を罵倒して馬鹿にしていたくせに、いつの間にか何食わぬ顔で自分の隣で虎視眈々と一夏を狙いつつ応援に加わっているイギリスの代表候補生とか。

「しかし何だあの攻撃は・・・？」

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、＜ブルー・ティアーズ＞と同じ第3世代型兵器ですわ」

「『衝撃砲』で一番厄介な所は砲弾も砲身も肉眼で見えないから、事前に弾道や軌跡が把握しづらい点だね。どうも射角事態もほぼ制限がなさそうだし」

シャルロットの言葉通り、モニターの中では鈴の背後を取ったにもかかわらず、刃が届く前に吹き飛ばされる一夏の姿が。

「やっぱり一夏の＜白式＞の最大の弱点は射撃兵装が存在しない事だね。拡張領域も一杯だから後付武装でも補えないし、一夏自身の技量が凄くても限界があるよ」

「何を世迷い事を言っているデユノア妻。ならば刀1本で十分なほどの技量を身に付ければ良いまでの事。それが出来ないという事は

「一夏がまだまだ未熟な証だ」

「さ、流石文字通り刀1本で世界最強になった人の言う事は違いま
すね、あはははは……」

引き攣り笑いを貼りつけた山田先生の声はとても乾いていた。そう
いえばそうでしたね貴女、とこの場に居る全員同じ感想を浮かべる。
実際にそこまで上り詰めた最強の乙女の言葉はやはり桁が違った。

——それに最初に気付いたのはミシエルだった。

「む？………どうやら衝撃砲の攻撃を見切り始めたみたい
だぞ」

「ええっ、本当ですか!？」

右へ左へ上へ下へ前へ後ろへ。傍目にはひよいひよいと動いている
だけにも見えるが、その度に一夏の後方で起こる爆発が確かに衝撃
砲の攻撃を悉く回避しだしたのを示している。

着実に見えない砲撃を避けて避けて避けて鈴の懐に接近。打ち込ま
れる<雪片式型>の連撃。それを鈴は両手の青龍刀で弾く、受け流
す、受け止める。

しかし技量と経験が違った。ISに触れて1ヶ月程度しか経験が無い一夏だが、それを補って余る古流剣術の技術と不良相手の対人戦の経験がその身に刻まれているのだ。

対して鈴は1年で代表候補生にまで上り詰めるだけの才能とそれに比例するISの操縦経験はあっても、対人戦の経験と密度は一夏に及ばない。

故に、少しずつだが鈴は押されていく。得物の関係で手数が多い分シールド無効化攻撃を行わせる余裕は与えずに済んでいるが、このままでは時間の問題だ。

『ああもう、うっとおしい!』

斬撃を受け止めた衝撃で後退してみせた鈴が再度<龍咆>を展開した。一夏は鈴を見据えたまま真っ直ぐ突っ込み、そこへ鈴が砲撃を撃ち込む。

——その瞬間、一夏はほぼ直角に真横へと方向転換。一夏が直前まで居た軌道を通り過ぎていく衝撃波。

これで確信出来た。一夏は完全に『龍咆』の弾道と発射のタイミングすら見切っている。

「凄い、一体どうやって見えない攻撃を見切っているんでしょう?」

「大体はオルコットと戦った時と同じ要領だろうな。相手の些細な

仕草まで決して見逃さず、攻撃の際僅かに緊張するその瞬間の気配を読み取っているんだ」

「では見えない攻撃の軌道まで把握出来ているのはどういう原理なのですか？」

「一夏の機動をよく見てみる」

砲撃をかくぐつては一夏が斬りつけ、何とか猛攻を凌いだ鈴が距離を置いて仕切り直す。

時折、一夏の攻撃を完全に受け流せなかった鈴がバランスを崩し、一夏が鈴の横や背後に回り込む形になる。一見チャンスのように思えるが、一夏は敢えて見逃がすかのように精々一撃二撃加えては彼の方から距離を取って鈴の反撃から逃れてから、再度鈴と正面から相対し直す。

よく見てみれば、度々その一連の展開が繰り返されているのが分かった。

「常に鳳さんの視認範囲内に敢えて位置どる様にしている？」

「そういう事だ。恐らく鳳の＜龍咆＞は網膜の動きを読み取って照準を行う代物の様だが、ISの全方位視覚接続を用いれば一々目を向けずとも背後だろうが攻撃を行う事が可能だ。

——だが織斑はその照準システムを逆手に取って、逆に鳳が何処を狙っているのかを先読みしている。相手の『目』を見て、な」

「……つまり相手の肉眼の視界内に身を置き続ける事でワザと自分を目で追いつけるように仕向けて、尚且つ相手の目の動きを追いつける事で衝撃砲の照準を先読みしている？」

「正解だデユノア夫。照準の方法目の動きと照準が一致するからな——— どうやら鳳には攻撃を見切る以外にも別の効果を与えているように思えるが」

よくよく見てみると、鈴の顔には不利な状況への焦り以外にも照れてるような様子が浮かんでいる気がする。

『ど、どんだけ乙女の顔をジロジロ見つめるつもりよ！この馬鹿！朴念仁！女つたらし！こつち見んな！！』

『悪いがそいつは聞けないね！つか悪かったな馬鹿で！』

『うつさい！そ、そんな見つめられると落ち着かないじゃない！』

「ああなるほど、そういう事ですか」

目に見える位鈴の顔に血の気が集まっている理由をセシリアは悟る。だって自分も似たような事があったし。

ぶつちやけ見惚れそうになってしまっているのだ。想い人に凜々しい顔で穴が空く位熱い視線（セシリア&鈴視点）を送られてはそりや落ち着かないに決まっている。

「……………う、羨ましい」

「何か言った筈さん？」

「べ、別に何でもない！」

話している内容はどうにも甘酸っぱいが、試合の内容そのものはまさしく激戦と呼ぶに相応しい。

第2アリーナを割れるような歓声が包んでいた。観客の生徒達からしてみれば不可視の攻撃を悉く避けては刀1本で優位に攻め立てる一夏の技量も凄まじいし、それを凌ぎ続ける鈴の腕前も代表候補生に相応しいと認めざるを得なかった。

会場のテンションもたけなわ、鈴は一夏の動きに大分慣れてきたし、一夏の方も鈴の戦い方や癖をかなりのレベルで読めるようになってきている。

『——そろそろ、決めるぞ』

『上等！』

一夏は<雪片式型>を下段に構え、鈴は連結した青龍刀を手元で優雅に廻し続けて機動や間合いを読ませない。

急にアリーナを静寂が包んだ。遂に決着の時、一騎打ちの時。無粋

な雑音は不要。会場内に居る全ての観客が息を呑む。ミシエル達の居るピットにもまた重苦しい沈黙が漂う。

——誰かの手から、売店で売られていた飲み物の紙コップが滑り落ちた。

普通なら、少し離れれば殆ど聞こえない程度の軽い音。にもかかわらずそれは西部劇で決闘の合図に放り投げられたコインと同じ役割を果たす。

ステージの中央で相對していた一夏と鈴が同時に動く。<零落白夜> 起動。

『りりりりりりりりりんっ！！！』

『iiiiiiiiiiiiiiiiちかああああああああああっ！
！！』

一太刀の元に決着が約束された果たし合いは。

——突如アリーナの遮断シールドを貫きステージに爆炎を生み出した一条の光弾によって中断の憂き目となった。

<白式>のハイパーセンサーが警告するよりも早く、一夏の感覚は煙の中から放たれる冷たく無機質で、しかしどこか薄い殺気を鋭敏に感じ取っていた。

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

「一夏、早くピットに戻って！すぐに学園の先生達がやって来て事態の收拾に当たるわ！私達は邪魔になるだけだから速くこの場から離れるのよ！」

敵の正体は不明。異常事態につき不確定要素多数。闇雲に侵入者に立ち向かうよりは、鈴の意見がこの場合は正しいだろう。

「分かった、早く戻る——危ねえ！！」

さっきから感じる人間味の薄いさっきの矛先が鈴に向いたと感じるや否や一夏は鈴に飛びついた。直後、鈴が浮かんでいた空間を熱線が通り過ぎる。

一夏の腕の中に収められた鈴はIS越し故悲しい事に彼の鍛えられた肉体の感触やら体温やらは味わえなかったものの、本気モードの一夏の横顔を吐息がかかるぐらいの近さで拝む事になって胸の鼓動急上昇。

すぐに持ち前の負けん気が頭をもたげて、弱弱しくも抗議の声を上げる。

「ちょ、ちよつと馬鹿、離しなさいよ！」

「緊急事態だ！我慢しろ！」

「あうう」

一喝されて即座に沈黙。一夏の言う通りだしまあ嫌ではないし。うん、我慢しなきゃ我慢。

とりあえず離れないよう鈴からも自分の身体を一夏の胸に押し付けておいた。ISスーツ越しにピッタリ浮き上がる厚くはないが逞しさを感じさせる胸の隆起が顔に当たる。これも不可抗力。不可抗力ったら不可抗力。

「あのビーム兵器、セシリアのISよりも出力は上だな」

解析結果を独りごちる一夏——『敵』が姿を現す。

ミシエルのISと同じ全身装甲型ではあったが、まさしく兵器然とした武骨さ満点のミシエルのISとはまだ別方向に異形の機体であった。

全身にスラスターが搭載され、腕はまるでテナガザル宜しく不釣り合いなほど長い。頭部と両腕部に複数のセンサーレンズ並びにビーム砲口。

「お前、何者だよ—— つつても答えてくれるわけねえよな」

一夏の中では乱入してきた機体はとつくの昔に『敵』と認定されていた。アリーナの遮断シールドを突破してビームをこちら目掛けて問答無用でぶっ放してくる相手が友好的な存在な訳あるか。

『織斑君！鳳さん！今すぐアリーナから脱出して下さい！すぐに先生達がISで制圧に行きます』

「そうは言いますけどね山田先生。どうやら逃げ場は塞がれたみたいなんですけど。ほらアレ」

『—— つて、ええ！？遮断シールドがレベル4に設定！？しかも扉が全てロックされてる！？』

「いつの間にかピットの隔壁も閉じてるじゃない！」

「こうなったら先生達が来るまで俺達で食い止めます。いいな、鈴」

「え、ええ。それからさ、動けないからそろそろ話して欲しいんだけど……」

「ああ、悪い」

ようやく鈴を開放する一夏だったが、当の鈴の方は自分で言うておきながらどこか名残惜しそうに一夏の胸から離れた。

『織斑君！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしもの事があつたら——』

「こんな事になつてる時点で今更ですって！それよりも、来るぞ鈴！」

「分かつてる！向こうはやる気満々ね！」

突進してくる敵IS。闘牛士のようにそれを鮮やかに回避する一夏と鈴。

専用機コンビと侵入者の戦いが始まった。

精鋭揃いの3年生達が遮断シールドの解除を試みていると千冬から教えられても、そう簡単に落ち着ける人間はこの場には居なかった。

「あの、先生。僕とミシエルだったらここからアリーナに突入できると思います」

「ほ、本当ですよ!？」

「………隔壁相手でも効果的な装備を俺もシャルロットもISに載せてある。それを使えば、恐らくはカタパルトを封鎖してる隔壁も突破可能だ」

「——よし、なら行け」

千冬の決断は速かった。少しでも情報を集めようと機材に齧りついていた山田先生が驚くほどだ。

「織斑先生！？」

「知つての通り緊急事態だ。アリーナの遮断シールドを突破できるだけの火力を持った敵の矛先が観客席に向いてみる。事態の即時収拾を行う為にも、少しでも人手が必要だ。専用機持ちならば尚更な」

「ではお2人共、すぐに参りましょう」

「ちょっと待てオルコット。何勝手にお前が指揮を取っている。デユノア夫、教師としての私の権限で3年の精鋭が突入してくるまではお前が2人の指揮を取れ。軍隊経験もあるお前なら少しは指揮官としての教育も受けているだろう？」

「了解………行こう、時間が惜しい」

「分かつてる！」

「い、言われなくとも！」

ふと、ミシエルはピットを離れる前にある事に気がついて眉を顰めたが、今は悠著な事をしてられないのですぐにシャルロットとセシリアの後を追いかけた。

全速力でカタパルトの元まで辿り着く。相変わらず固く閉ざされたまま、微かに分厚い隔壁越しにステージで繰り広げられる戦闘音が届いてきていた。

カタパルトについた時点で3人とも各々のISを展開してある。

「で、お2人の策というのは？」

「これの事だよ」

ミシエルの右腕、シャルロットの左腕のシールドの表面装甲がパージされ、その下に隠されていたのはとびきり物騒な近接用兵装。

シャルロットが装備しているのは第二世代型最強と名高い69口径
パイルバンカー<灰色の鱗殻グレー・スケール>。

またの名を『盾殺し（シールド・ピアース）』とも呼ばれる一撃必殺を体現してみせ、リボルバー機構の搭載で連続打撃も可能という近接戦用兵装の極北。

ミシエルの右腕の装備も一応パイルバンカーらしい。らしい、とハッキリしないのは、ミシエルのそれが<灰色の鱗殻>からかなりかけ離れたデザインの得物だったからだ。

大砲の様に太い砲口から僅かに鋭利な先端が覗く鉄杭は<灰色の鱗殻>のそれより一回り太く、パイルバンカーというよりもむしろ寸詰まりな大口径の腕部装着型射撃兵装に思えてくる。それにリボルバー機構と対を成すオートマチック機構を搭載しており、砲身に沿う形でそれだけで十分鈍器に使える巨大な長方形のマガジンが取り付けられてあった。

新型の100口径電磁加速型徹甲爆裂射突型ブレード<ウルティマ

ラティオ>。

その意は――『最後の切り札』。

「……突入後は装甲の堅い俺が先頭、シャルロットが制圧射撃、セシリアは最後尾から支援射撃を頼む」

「了解！^{ですわ}」

「……シャルロット。打ち込む時は微妙にポイントをずらしながら撃ち込んで欲しい。一点に集中し過ぎると、突入できるだけの穴が開かない可能性がある」

「分かった。それじゃあ行くよ！」

「ああ……まずは夫婦の協同作業といこう」

実は意外とミシェルさんは冗談好きなのかしら？とセシリアはそう思った。

「そおおっ、れっ！！！」

一旦隔壁から距離を取ってから、一気に機体を加速させつつ大きく身体の捻りを最大限生かして見事な左ストレートをシャルロットが放つ。

拳が直撃する寸前、薬室内で火薬が撃発。砲声と呼ぶに相応しい炸裂音とほぼ同時、それを更に上回る衝撃音が空間に響き渡った。

「まだまだ行くよおっ!!!」

更に2発、3発。弾装内の弾を全弾使い切るまで殴る。殴る。殴る。建物の壁の繋ぎ目などが歪み緩むかと思えるほどの振動。一撃ごとに隔壁が削れ、罅が走り、脆くなっていく。

装填分が弾切れを起こしシャルロットが離れる。細いながらもかなりの範囲で亀裂が生じ、叩き込まれた部分部分がハッキリとひしやがっていた。

さあ、次はミシエルの番だ。砲身内エネルギーチャージ完了。安全装置解除。信管作動確認。

「俺から離れている……!!」

ミシエルの警告に従い慌ててセシリアは数mほどミシエルと破壊されかけの隔壁から距離を取った。シャルロットの方は言わずもがなさつさと離脱済みである。

先程のシャルロット同様、加速をつけて叩き込まれる拳。ミシエルの場合は低い姿勢から振り被った拳を上から下へ打ち下ろすロシアンフックスタイルで、複数刻まれた打撃痕の中心部、最も亀裂の線が集束した部分へと躊躇い無くブチ込んだ。

<灰色の鱗殻>の衝撃が乗用車の衝突なら<ウルティマラティオ>のそれは10トントラックの特攻だった。

反動の大部分をISが自動的に相殺してもハッキリと右腕に伝わる隔壁を砕く感触。杭そのものは隔壁を貫いても、ステージに突入できるような穴はまだ空かない。

——ここからが本番だ。

「——かつ飛べ」

次の瞬間、鉄杭内部の指向性爆薬が、隔壁内部へとその威力を一点集中されて解放する。

脆くなっていた隔壁がステージ側目がけ文字通り爆発した。エネルギーの一部はピット側へも向かい、そちら側へも破片混じりの爆風が駆け抜ける。その瞬間思わずセシリアが悲鳴を漏らしてしまった程だ。

秒速キロメートルクラスに加速された巨大な鉄杭と、装甲やシールドバリアーを突破してから炸裂する指向性爆薬のコンボ。それはIS相手ならば、食らえば間違いなく一撃で絶対防御発動どころか強

制解除にすら追いこむ威力を誇る。

使用済みの前半分が消失した鉄杭が機関部の後ろから弾き出され、マガジンから次弾が装填された。

再装填に縮めようの無い数秒がかかるが、実質弾の数だけ敵ISを撃破出来る、とまで言われているその威力こそ、『最後の切り札』の呼び名に相応しい。

「・・・・・・・・空いたぞ」

「こ、ここまで派手だと分かってるのでしたらもう一言注意してくれても良かったのではなくて!？」

「今はそれよりも!」

最初のミシエルの指示通り、隔壁に生じた直径数mの大穴からステージに飛び出す。

<シールド・オブ・アイギス>を2枚とも前面に展開したミシエルが先頭、両腕にアサルトライフルを構えたシャルロットが続き、その後ろにくスターライトmk?>を両手で保持したセシリアが遅れて突入。

3人の視界に飛び込んできた光景は、

「鈴……!!」

鈴に敵のビーム砲撃が直撃する、その瞬間だった。

1-11：決着／少女達の答え

——敵と数合やりあって気付いた事がある

「なあ鈴。もしかしてアイツ、機械なんじゃないか？」

「何言ってるの、ISは機械じゃないの」

「そういうんじゃないさ、あれってもしかして人が乗ってないんじゃないか？」

何となくだが確信秘めつつ一夏は告げた。

「……………どうしてそう思うの？」

「殺気つつーか、気配が薄過ぎる。自慢じゃねーけどそれなりに気配とかには敏感なんだよ俺」

「……………その割には屋上じゃ気付いてなかったみたいだけど
(ボソ)「」

「何か言ったか？」

「いえ別に。でも——無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かないそういう物だもの」

「それでも考慮はしておいた方がいいと思うぞ。あらゆる可能性を考慮すべきだし、それに……………」

「それに？」

「……………人が乗ってないなら容赦無く斬れる」

一夏の気配がより張りつめ、鋭く研ぎ澄まされるのをハイパーセンサーが無くとも鈴は感じ取れた。

今の一夏はまさに本気の本気モードだ。好きな異性だと分かっている、一夏の放つ険やかな空気は鈴の喉を乾かせ、背筋に冷や汗を流させるほど冷たく重い。

それでも意見の1つは言えてしまえる鈴の胆力も中々であった。

「で、でも容赦無くやれてもその攻撃が当たらなきゃ意味無いじゃない」

遠距離では腕部のビーム砲。接近すれば風車宜しく装甲に覆われた長い腕を振り回して体当たり。おまけにその状態からもビームを放ってくるのだから厄介極まりない。流石の一夏もそんな出鱈目な機

動から放たれるビームは斬り払えないでいる。

全身にスラスターを備えた見かけどおり、図体の割に機動力も高く鈴のく龍咆も殆ど当たらずじまい。仮に当たっても強固なシールドバリアーに阻まれ本体には届かずと踏んだり蹴ったりだ。

だが逆に言えばそれだけだった。反応速度は高いが、攻撃パターンが単調過ぎるのである。

千冬姉や兄弟子には遠く及ばない。慣れてきた今ならば、何とかなりそうな相手に思えてきた。

シールドエネルギーもちよつとだけだが余裕はある。一夏はく零落白夜の使用を最低限に抑えていたし、鈴のく甲龍くは燃費重視だ。それでも2人のシールドエネルギーの残量は今や半分前後。

「手はある。成功すれば、最低でも腕1本は持つてけると思う」

「そう、ならやりましょう。どうしたらいい？」

こういうのを『以心伝心』と呼ぶに違いない。鈴は一々議論もしないまま一夏の策に乗ってくれた。

ありがたくて、頼もしくて……。こんな少女を自分は泣かせたのかと胸中に沸いた自己嫌悪の感情を今は押さえ込む。

「衝撃砲を撃ちまくってアイツの注意を引いて欲しい。その間に俺

が突っ込む。アイツが機械なんだったら、またワンパターンに突っ込んでくる筈だ。そこを狙う」

「OK。それじゃあ早速いくわよ！」

鈴が衝撃砲を乱射。大雑把な照準だったが、回避行動を取らせればそれで構わない。注意が鈴からの攻撃に逸れたと見るや一夏は突撃する。

その行動を感知した敵は身体ごとセンサーレンズを一夏の方に向けると、スラスターの出力を上げて自らも一夏目指して加速した。

敵の右腕が大きく引かれ、一夏の頭部めがけ解き放たれた瞬間。

<零落白夜>を起動した一夏は、その刃を真っ直ぐ天へ向けて立てながら<雪片式型>を握る右手により一層力を込め、左手も鏢の部分をしっかりと押さえ固定した。

まず感じたのはシールドバリアーを切り裂く独特の感触。次いで試し切りで刃が骨に食い込んだ瞬間に似た硬質の手応え。

「（しまった！）」

手応えの意味を悟った瞬間、一夏は即座に自分の技量不足を悟った。

一夏が狙ったのは敵の前腕部からすぐ上の関節部分。シールドバリアーさえ無効化できれば後は<雪片式型>の切れ味と敵の攻撃の遠

心力で、比較的装甲が薄いであろう関節部を両断できると一夏は考えていた。

失敗した要因は、振り回される鉄拳の勢いが想像以上だった点と、押し当てる刃の角度が浅かったせいで両断する前に弾かれてしまった事。

<雪片式型>が一夏の手から離れ、一夏自身もまた別方向へ撥ね飛ばされる。背中から後方の壁に激突し衝撃で広がる煙に姿が見えなくなった。そこからやや離れた地面に弾かれた<雪片式型>が突き立つ。

鈴にはまるで地面に突き刺さった<雪片式型>が、一夏の墓標にも見えてしまった。

「一夏あつ!?!」

「生きてつぜ、何とかな……………」

開放回線で返ってきた一夏の口調はハッキリしていたが苦痛に歪んでいた。

敵の方かというと、一夏の目論みそのものは成功していた。右腕の関節部の半ば以上まで刃が食い込んだ上にそのまま腕を振り回したせいで、傷ついた部分が遠心力に耐え切れずそのまま裂けてダラんとぶら下がっている。断面からは火花が飛び散り、あれではもう使い物になるまい。

だがまだ片腕が残っている。剣を拾いに行くまで、間に合うか？

「——っ、一夏あ——!!」

その時、アリーナ中に響き渡る大声。

衝撃で動きが鈍くよたつく身体を押して土煙の中から抜け出る一夏・
・・・・・・・・現在の状況を理解した瞬間、その背筋が凍った。

ピットに居た筈の箒が息を切らせ、一夏が吹き飛ばされた側とは反対にある中継室でマイク片手で居る。その箒に、敵はセンサーレンズを向けてジッと見つめていたのだ。

「馬鹿野郎!!今すぐ逃げろ、箒——!!」

「えっ？」

呆けたのは一瞬——その一瞬が命取り。

敵に残る左腕に備えられた砲口が、ゆっくりと中継室へと向けられる。一夏は身体の痛みも忘れて地面に刺さった<雪片式型>に飛びついてから瞬時加速発動。

爆発。衝撃。絶対防御発動。鈴が覚えているのは目前で弾ける閃光が最後だった。一旦背中から遮断シールドに叩きつけられ、アンロツクユニットがガリガリと壁に擦れる音を立てながら鈴の身体は落下した。

鈴、と思わず敵の手前で動きを止めてさえしてしまった一夏が絶叫するのを阻止するかのように、またも爆発がアリーナに轟く。ただし今度はピットからだ。ステージとピットを隔てる隔壁が内側から爆砕されていた。

硝煙の中から飛び出してきたのは黒と赤、次いでオレンジ、最後に蒼の機体。

敵は新たな乱入者達にセンサーレンズを向け、最も近くに居る一夏を何故か無視して突入してきたミシエル達へと攻撃を仕掛ける。

「……………っ！バリアーは破壊した！今ならどんな攻撃も通る！やっちまえ、皆！！」

「心得た……………！！」

答えるミシエルの重々しい声が何とも頼もしい。

瞬時に距離を詰めた敵は戦闘に立つミシエルへと突き進み、爆発的な加速を乗せた左腕を振り回す。直撃すれば装甲車すらも粉碎しかない一撃。

——その剛腕がミシエルに触れる事はありません。くらファア

ル・レクイエム>が誇る全身装甲のはるか手前で、敵は空中に縫い止められていた。ミシエルと敵の間には宙に浮かぶ重厚な1対の盾<シールド・オブ・アイギス>のAICに動きを封じられた敵はまさしく良い的であった。2枚の盾の間から砲身が突き出される。

それは<ラファール・レクイエム>の腰部に搭載された折り畳み式ビーム砲<アグニ>の砲口だ。

「・・・・・・食らえ」

2条の光線が敵の両腕を根元から消滅させた。遮断シールドを貫く敵程ではなくても機体から直接エネルギーを供給される<アグニ>の威力もかなりの物だ。

今度こそ両肩ごと吹き飛ばされた腕部がビームの余波で爆発を起こす。まるでその爆風を逆利用するかのように爆風に流される事で、AICの効果範囲から敵は逃れ、距離を置こうとする。

「逃がしませんわよ！」

そこへセシリアが動く。<ブルー・ティアーズ>からビットを射出両腕をもがれた胴体や両脚部を同時にレーザーが撃ち抜き、更に破壊する。

それでも敵はまだ活動し続けていた。攻撃的な勢いでセンサーレン

ズを明滅させて生き残っているスラスターを使つて、この場から逃げ出そうとしている風にも見えた。

よろしい。ならそれすらも出来なくなるぐらい破壊するまでだ。

「これで終わりだよ！」

盾役のミシエルの頭上を飛び越え、得物に飛びかかる豹の如くシャルロット。

その左手には新たに炸薬の装填を完了したく灰色の鱗殻>。

反対側から先端が飛び出すほどの勢いで胴体中心部に鉄杭をぶち込まれる段になって、ようやく敵は活動を停止する。

「鈴……りiiiiいん！」

揃いも揃って撃墜された鈴の元へ駆けつける中、ミシエルはハイパーセンサーを広域索敵に設定して敵の増援が無いか警戒していた。

「……………む？」

雲の中に隠れていないか探っていると、ハイパーセンサーに補正された視力が雲の中に見え隠れする物体を発見……。だがレーダーそのものには引っかけついていない。ステルスか？

やがて未確認飛行物体は遠く彼方へ飛び去ってしまった。それを黙って見送るミシエルの方は、今自分が発見した物体の正体が理解できなくて、空を見上げたまま固まっていた。

何故なら彼が目撃したのは、

「……………人参？」

唐突に目を覚ました鈴は弾かれるようにベッドの上で身体を起こした。

それから全身に走った筋肉痛にひとしきり苦しんでから、自分が敵の放ったビームに自ら突っ込んだ事を思い出す。よく生きてたわね私。

「良かった、目が覚めたか」

女の声がすぐ隣でした。例の一夏のファースト幼馴染、篠ノ之箒がベッドの傍らでパイプ椅子に腰を下ろしている事に今更ながら気付く。

——まず最初に顔を見たかった相手ではなかった。

「一夏もついさっきまで此処に居たが、今は織斑教諭に呼び出されてこの場を離れている。すぐに戻ってくるだろう」

「……………顔に出てた？」

「何となくだがな。多分、私も同じ立場なら同じ事を考えたかもしれん」

そこまで言ってからおもむろに箒は立ち上がると、つむじが見える位深く頭を下げた。

「すまなかった。私の短慮な行動のせいであのような危険な真似をさせてしまった事を、詫びさせてほしい」

「あー、もう終わった事なんだし、別にそこまで気にしないでいいわよ。あたしだって身体が勝手に動いただけだし、絶対防御のお陰でこうして無事なんだから」

「それでも、すまなかったっ・・・・・・・・・・！」

このまま土下座まで敢行しかなない位恥じ入った様子の箒の姿に、鈴は溜息を漏らしてしまう。

そりゃのこのご自分から危険な場所に飛び込んできた事にはもう一言一言言ってやりたいけれど、必要以上にネチネチ攻め立てるような陰湿な真似は鈴は嫌いなのだ。

それに・・・・・・・・もしあの時あして庇わず彼女に何かあったのなら、一夏はととてもとても嘆き悲しむだろうから。

彼のそんな姿は見たくなかった。それが箒を庇った本当の理由。

「もう、頭上げたらどう？当事者であるあたしが言ってるんだからそれで話は終わり！良いわね？」

「・・・・・・・・分かった」

口ではそう言いつつも顔は罪悪感で一杯一杯な様子である。

何時までも箒にそんな辛気臭い顔をされてもつまらなかった鈴は、ふと目の前の少女がどういう立場の人間なのか思い出す。

今保健室には鈴と箒以外誰も居ない。いい機会だ。これまで箒と2人きりになった事はなかった。

「あのさあ、篠ノ之さん」

「箒で構わない」

「んじゃ私の事も鈴って呼んで。でさ、アンタも一夏が好きって事で良いのよね？」

返答は湯気まで漂う勢いで顔の紅潮。

「な、な、なななななっ！？」

「そこまで慌てなくてもいいじゃない。傍から見るとバレバレな

んだから」

「あうあうあうあう………」

どうやら灰色の脳細胞が熱暴走を起こして緊急停止状態の様だ。復旧までしばし待つ。

「ゴホン、んっ———そうだ、私は一夏の事が好きだ。愛している、と言い換えてもよい」

夕日を浴びてもそれと分かる規模の頬の赤みと熱は取れないままだった。それでも箒はしっかりと自分の本心を鈴に表明してみせた。鈴がどれだけ一夏に強い想いを抱いていたのかを屋上で覗き見てしまった以上、こうして本音で向き合わなければそれは鈴への侮辱も同然だ。

箒の告白に鈴は一瞬腰から下に掛けられた毛布を強く握りしめたが、すぐに手を緩めて乾いた笑みを浮かべる。

「あーあ、やっぱり一夏が言ったのはアンタの事だったのね」

「一夏が？」

「あれ、屋上で聞いてたんじゃないの？」

「あの時は鈴の声が大きかったからそつちは殆ど聞き取れたが、一夏の声の方は距離があつて大して聞き取れなくて、それで……」

「ふーん。あの時ね、一夏こつ言つてたのよ。『自分の方からアイツに応えようつて決めたんだ』つて」

「そうか」

目尻が下がつて唇が緩むのを堪え切れない。それからすぐに鈴の事を思い出して「す、すまん」と謝罪した。

鈴は頭を振る。

「この事でもう謝つたりしないで——情けなくなつちやうから」

「鈴……」

「こついうのつて一夏はとことん鈍いし鍛練バ力だから、まだ大丈夫だと思つただけどなあ。これならもつとさつさとストレートに告白しておけば……。でもそれでもあの馬鹿だったら気付かなかつたかもしれないわね」

後半の弦きには箒も同意せざるえない。一夏なら本当にやらかしかねなかつた。

「試合も中断になっちゃったし、これで約束も無効よね——」

「……なあ、鈴」

俯いていた鈴が顔を上げると、とても真面目な表情の箒と目が合った。

「——提案があるのだが」

箒の申し出に鈴の頭にも怒りと羞恥以外の理由で血の気が集まった。鈴からしてみれば本当に突拍子も無い内容だったからだ。

「あ、アンタはそれでいいの？それで満足なの！？」

「これで良いのだ。一夏の事だ、鈴の自身への想いを分かっているからこれまでと同じ通り振る舞えるほど一夏は器用ではない。アイ

ッもまた罪悪感に苦しむだろう、そのような姿は見たくない。鈴には借りがあるし、それに」

「それに？」

「……もし立場が違えば、私が鈴の立場だったかもしれないから、鈴の気持ちは痛い程理解出来る。そちらからしてみれば向けて欲しくない同情でしかないかもしれないが、それでも放っておけないんだ。鈴は、もう1人の私なのだから」

そこまで言うてから、箒は今度は疲れが滲み出る表情に切り替えた。

「それにだ。一夏の事だ、私とつ、つ、付き合う事になっても所構わず他の女を引き寄せるに違いないだろう」

「……全くもって否定できないわね」

溜息がシンクロ。何せ2人共腐るほどそんな展開を見てきたのだから。有り得過ぎて困る。非常に困る。

ちなみに最近では一夏を一方的に侮辱していた箒のイギリスの某代表候補生が良い例だ。

「鈴も一夏をずっと見ていたのだから分かるだろう？恐らくは私1人だけでは全てのそのような女狐達を追い払えないだろう。だから

――」

「だから私も巻き込もうってワケ？」

「……正直に言ってしまうとそういう事だ。そちらも本気で心の底から一夏の事を好いているのをこの目で確かめたからこそ頼みたい。この通りだ」

再び箒に頭を下げられ、しばし黙考する。打算塗れなのは提案した箒自身よく理解している。

実の所、箒の申し出た取引は鈴からしてみれば大歓迎も良い所だった。箒の言ってる事も痛いほど理解出来、同意も出来るし、自分だつてポツと出一夏の誘惑されるなんて真つ平御免であつた。

それに——自分も一夏の寵愛を受けれると言われてしまえば、突っぱねれる筈もない。

「でもアンタが良かったって一夏がそんなの認めてくれるかしら？」

「私達の愛する男がその程度の器量だと思つか？」

質問に質問で返し、2人の少女が睨み合う。

——そしてどちらともなくニヤリと笑った。

「乗ったわ、その提案！でも手加減はしないからね！」

「望む所だ！」

掌と掌を軽く叩きつけ合うパァン！という音が保健室に響く。

そのタイミングを見計らっていたかのように保健室の扉が開いた。
噂すれば影、たった今まで話題にされていた一夏当人の登場である。

「鈴！目が覚めたのか？大丈夫か？」

「へーきへーき。＜甲龍＞が絶対防御を発動させてくれたし、ピンピンしてるわよ」

「そっか……。本当に、鈴が無事で良かった」

安堵した様子で嬉しさと儚さが同居した心からの微笑は、恋する乙女には刺激的過ぎた。さっきまであれやこれやとそっち方面の会話を繰り広げていたから尚更に。

口籠りながらまた顔を赤くした鈴とは対照的に、そんな眩しい笑顔を向けられた鈴に箒は自分の立場を忘れて嫉妬してしまう。羨ましいのう妬ましいのう。

「箒、お願いだから次からあんな真似しないでくれよ。鈴まで危険に晒したんだし、俺だって心臓が止まるかと思ったんだぞ」

「う、わ、分かっている。先程も自分の浅はかな行動について鈴に謝罪していたところだ」

「そーそー、箒も謝ってくれたし、もう気にしてないわよ」

「・・・・・・お前ら、そんなに仲良かったっけ？」

何かあからさまに2人の距離が思いつきり近づいてる気がする。まあ女の子ってそういうもんなのかな、と特に深く考えない辺りが一夏が一夏である所以であった。

つまり女絡みにはとことん鈍い。最近はずに伴侶持ちの男友達のアドバイスによつて改善の兆しがあれど、それで簡単に治つてりやここまで箒も鈴も苦労しちやいないのである。

「ところで一夏、あの時の約束についてなんだけど」

「お、おう」

チラリと箒の方を見た。一夏視点では箒は屋上での鈴との賭けの事を知らない筈だ。彼女の居る前でその話題を口に出したら拙い。

しかし箒は一夏の視線に気づくと、

「安心しろ一夏。屋上での事については私も知っている」

「そうなのか！？でも、俺は………」

「それでだな、試合も無効になってしまった事だし、私も鈴と共に
お前との関係について相談したのだ。その結果——」

いきなり立ち上がった箒が一夏をベッドの方へ突き飛ばした。不意
を突かれて一夏はベッドの上に倒れ込む。鈴が寝ているの事に気付
いて慌てて両手で身体を支えた。

結果、鈴に覆い被さる一歩手前で何とか身体を支える事が出来た。
何故か悪戯っぽく笑っている鈴の顔との距離は10cmもない。

「何すんだよほうむぐつ」

一夏の抗議は鈴の方から押し当てられた唇に呑みこまれた。

唇を押しつけるだけのキスだが、いつの間にか鈴の両手が一夏の首
に廻されていて中々離せない。そもそもセカンド幼馴染の突然の行

動に、一夏の思考はフリーズ状態だ。そのくせに少女の唇の柔らかさと甘い匂いはとても強く感じてしまう

たっぷり10秒ほどかけてようやく鈴は唇を離した。息を止めていたのか少しだけ呼吸は荒く、顔の赤みが一層濃くなっている。

「……………り、りんむうつ!？」

今度は箒にも唇を奪われた。

単なる唇だけのキスではなく、濃厚に舌を絡め合う過激なキス。箒の腕もしっかり一夏の身体に廻りあつて、口腔内を蹂躪する箒の舌以外にも強く胸元に押し付けられる膨らみのお陰で一夏の脳はオーバーヒート。最早気絶しかねない勢いだ。

舌と舌にかかる銀色の橋を夕日に染めながら、鈴の横で一夏を押し倒す体勢から箒も離れる。その様子を一部始終見ていた鈴は何処か不満そうというか、羨ましがだった。

「あ、あたしもそうすれば良かった」

「ふふ、コツは要るが、1度したら癖になるぞ?」

「お、お、お前らいきなり何するんだよ!？」

「これが我らの答えだ。相談の結果、一夏には私と鈴、両方と付き合ってもらうぞ。もちろん男女の関係としてな」

どうしてそうなった。2人の顔を信じられない思いで交互に見るが、
箒も鈴も微笑んでいても冗談のつもりではなさそうだ。

「それともあたし達じゃ不満？」

「そんな訳ねえだろ！そりゃ2人共スツゲー可愛いし、俺の事をと
ても大事に想ってくれてるのは分かってるけど・・・・・・・・2人は、
それで良いのか？」

「良いのだ、それで。私も、鈴も、お前の事を本気で何年間も想い
続けてきたのは紛れもない事実なのだからな。こうすれば私も鈴も
どちらかが泣かずに済む」

「それとも何？アタシ達2人じゃ不満ってワケ？」

「そ、そという訳じゃ・・・・・・・・」

「ええい、それでも男が一夏！この私達おなこが選んだ男なのだからずつ
とお前への想いを抱き続けてくれた女子おなこの2人ぐらい受け入れてみ
せろ！」

「む、無茶苦茶だろそれ！」

「ならかくなる上は！」

箒がズボンに手をかけたので一夏は我に返って抵抗する。

「手伝え鈴！こうなれば私達の良さをコイツの身体に刻みこんでやるぞ！」

「い、いきなりそこまでやつちゃうの？」

「コイツも健全な男子である事はとくに確認済みだ！これまでの私との睦み事を忘れたとは言わせんぞー夏！」

「ちょ、ま、待て箒！鈴も手を離せ、場所考える場所を！」

「わ、私が居ない間にそんな事までしてたのアンタ達！」

「人の話を聞けー！」

わーわーぎゃーぎゃー

「————楽しそうですわねえ？わたくしも混ぜて頂きますこと？」

ピタリ、と3人は凍りついた。

なんだか扉の方から不穏な気配が。見ちゃダメだ見ちゃダメだ見ちゃダメだ見ちゃダメだ見ちゃダメだ見ちゃダメだ（ry

「うふ、うふふふふふふふ」

笑うという行為は本来攻撃的な以下略。

激しく不吉なジャキツ！という音が聞こえたので仕方なく3人は扉の方を見る。

案の定、そこにはハイライトの消えた目で乾いた笑い声を漏らし続けるセシリアの姿。右腕には部分展開されたIS&愛用のレーザーライフルが。あ、こっち向いた。

「ホワイトサンダーですわー！」

「いやそれはキャラが違うだろう……」

廊下側で隠れるように様子を窺っていたミシエルの眩きも届かない。修羅場に変化した保険室内の様子を傍目にしつつ、シャルロットはミシエルにこう聞いた。

「つまり、箒と鳳さんで一夏を半分こって事？」

「……………そういう事なんだろうな」

「——うん、一夏死んじゃえばいいと思うよ？」

満面の笑みでそう言いきった妻の姿に、ミシエルは決して浮気はすまいと固く誓うのであった。

——浮気する気もなければ出来るような顔じゃない、と思いつつ。

2 - 1 : ボーイズトーク / 銀の嵐・序章 (前書き)

感想への返答：

タグにもある通り、一夏の恋人はあくまで幼馴染井（笑）限定でそれ以上増やす予定は全くありません。

・・・ホントだよ!？

2 - 1 : ボーイズトーク / 銀の嵐・序章

「――で？」

「『で？』って、何がだよ？」

「とぼけるなって。鈴とファースト幼馴染の事だよ。人にわざわざ相談の電話までよこしときながら、ほったらかしか？」

中学時代からの友人である五反田弾の自室にお邪魔していた一夏は、アーケード仕様のコントローラーに手を置いたまま固まった。

画面の中で一夏の操るキャラが動きを止め、対照的にここぞとばかりに必殺コンボ発動の弾。一気に体力ゲージが底を尽いて弾の勝利。勝ち誇った様子で隣の友人の方を向いた弾であったが、何故かさっきまでとは打って変わって冷や汗ダラダラ顔色も悪くして彫像と化した一夏の様子に彼もまた動きを止めた。

「い、一夏？すみません、コイツ向こう（学園）の方で何かあったんですか？」

赤い長髪にヘッドバンドと軽い見た目に似合わないかしこまった様子で振り向いた先には、2人の対戦を観戦しながらゲームの順番待ちをしていたミシエルの姿。

学園内唯一の男友達である一夏に日本の庶民の料理を御馳走云々と誘われてホイホイここまで付いてきたのである。

「……………別に同い年なんだ、敬語とかは必要ない」

「いやあでもやっぱミシエルさん有名人ですし。それにこう、丁寧に対応しなきゃオーラをひしひしと感じがしましてねハイ」

それって遠回しに頭文字にヤの付く自営業辺りの危険な人間に見えるって事じゃなからうか。

本人には悪気は無さそうなので何も言わないでおくが、内心ちよつと傷つきつつ、

「……………本人達の話し合いの結果、2人同時に一夏と付き合い事になったそうだ」

「……………もう1回お願いします」

「……………篠ノ之と鳳の方から2人同時に一夏の恋人にしてもらう事で決着が付いた、と言った」

「マジですか」

「……………本気と書いてマジだ」

意外とネタの分かる人らしいがそれはともかく、今思いつき聞き捨てならない事を聞かされましたよ？

「えーっと、ちなみにそのファースト幼馴染はどういった女の子で？」

引き攣った笑みでの弾の問いかけに、ミシエルはズボンのポケットから折り畳み式の携帯を取り出した。しかしミシエルの手が大きいものだから、まるでマツチ箱か100円ライター並みに小さく見えてくるから不思議である。

ポチポチとボタンを操作して画像データを表示。親指も手のサイズに比例して太いせいで他のボタンまで押しそうになるのはご愛嬌。

ミシエルが見せた携帯の画面には、弾の記憶より少しだけ成長した鈴以外にも金髪の少女、そして黒髪のポニーテールにキリッとした美貌の少女の画像が。

「……………この真ん中が俺の嫁で、その右隣がその篠ノ之箒だ」

「……………」

錆ついたカラクリ人形の様にゆっくりと再び一夏の方を向く弾。

そして以前固まったままの一夏に飛びついてその首を掴みあげた。

「ええいこのモテスリムが！言うに事かいて二股かよ二股！それもスツゲー美少女でおまけにその子も公認！？ふざけんのも大概にしろ！」

「うげっ、ちょ、テメエ弾そっちがふざけんな！いきなり何しやがる！？」

「うるさい！今は黙ってブツ飛ばさせろ！散々事ある毎に女子にフラグ立てちゃ悉くスルーどころかブツた斬ってたくせに、自分がモテてる事に気付いた途端二股だあ！？鈴や篠ノ之つて子が許しても俺が許さん！罰として俺にも学園の女の子紹介しろ！」

「最後のが本音だる絶対！仕方ないだろ２人だけで勝手に決めちゃってたし！いや嬉しかったけどさあ！！」

「やっぱり死ねお前！気付かずにへし折って来た女の子のフラグの分だけ刺されりやいいんだ！ってストップストップ本気で間接極めるのは反則！」

「どうやらすぐに決着がつきそうだ。強さの追求に余念が無い分地力が違い過ぎる。」

「……トイレを借りさせてもらっても構わないか？」

「この家のトイレなら確か階段降りて右の奥にあった筈だけど」

「ギブギブギブマジで痛いって、アッー！」

コキヤッと聞こえた気がしたけどミシエルのログには何も無い。そう何も無い。パタッ、って助けを求めて伸ばされた手があえなく落ちたような音も気のせいだきつと。

ベッドからのっそりと立ち上がったミシエルがドアノブを掴む。

——よりも早く、反対側から勢いよく蹴り開けられた。蹴り開けたと分かったのは、開けた本人が細く健康的な裸足を上げた体勢で立っていたからだ。

弾と同じ色合いの紅い髪のアフな格好の少女が1人。

「お兄！さつきからお昼出来たって言ってるじゃん！さつさと食べる——」

ようやく少女は気付く。目の前に立ち塞がる、とても恐ろしげな風貌の男の存在に。

見上げなければならない程の背丈に服の上からでも分かる筋骨隆々とした肉体。とても険しい顔立ちを一層際立たせる顔を横切る巨大な傷。どつかで見た様な気もするけれど、それよりも兄の部屋から突如現れた取つても怖い見た目の外人の姿にそんな記憶など少女の脳裏からすっ飛んでしまい——

出した結論：殺し屋か殺人犯。

「い、いやあああああああつ！？殺される犯される！！？
誰か——っ！！！」

「うおおおおおいつ！？お客さんに何言っただ妹よおおおお
っ！？」

反射的に絶叫しながら元来た道を逃げようとする少女。

だがパニックになっていたせいか足を絡ませてしまい、バランスを崩しながら進む先は階段。このままでは危ない。

咄嗟にミシエルは大きく踏み出しながら少女の腕を掴むと自分と位置を入れ替わった。少女の身体は弾の部屋の方へ逆戻りし、ミシエルの方はというと。

階段から足を踏み外し、そのまま前のめりの体勢で一瞬宙に浮く。

「え？」

「あ……………」

どすっ　ばきっ　がたっ　がっ　どすんっ
ばきゃっ！！

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいっ！！！」

「気にするな、身体が頑丈な事ぐらいしか取り柄が無いのでな・・・
・・・むしろ　家の壁に穴を空けてしまつて本当に申し訳ない」

「いえいえ元はといえば私が悪いんですし！」

弾の妹である五反田蘭のうろたえっぷりは被害者であるミシエルか
らして哀れになってくるぐらい酷かった。

ちなみに壁に穴が開いたというのはミシエルが階段から転げ落ちた際、義足の方の足が壁に当たって突き破ってしまったのである。

「もう、お兄の馬鹿！何でお客さんが来てる事言ってくれなかったのよ！」

「い、言ってなかったか？そりゃ悪かった、あはははは……」

場所は移って現在地は弾の実家が経営する食堂の店内である。3人の前には出来たてはやはやの弾の祖父手製の定食。

「一夏さん達は先食べてて下さいね。私、ちょっと着替えてきますから」

「………ああ」

あからさまに元気の無い様子の一夏に心配と疑問を半々に抱きつつも蘭は足早に立ち去る。

「……いただきます」と手を合わせて唱和しつつ食事開始。一夏と弾は店の売れ残りのカボチャ煮定食だが、ミシエルは外国のお客様という事で五反田食堂名物業火野菜炒め定食だ。

濃いめの味付けながら野菜のシャキシャキ感と自然本来の甘みがバランスよく調和し、ご飯が進む。

相変わらず一夏が漂わせる空気は重く、せつかくの料理も箸が進んでないのを見かねた弾が口の中の物を呑みこんでから問いかけた。

「何でそこまでしょぼくてんだよ、ええ？本当に学園で何かあったのかよ？話してみるよ。何か？付き合いだして早々2人と喧嘩でもしたのかよ」

「喧嘩とかしてないさ。むしろ前以上に仲良くやってるぐらいだつて。朝はよく一緒に食事を取るし、2人して手作り弁当とかも作って来てくれるし、放課後も剣やISの特訓も付き合ってくれるし、夜だって——ゲフンゲフン」

「お兄さんちよつと夜の所具体的に教えてもらいたいなー？」

「誰が言うか！とにかくさ、箒も鈴も積極的で俺も嬉しいよ？2人もお互い仲良くなれてるみたいだし、2人に不満なんてちつとも無いんだよ」

たださ、そう呟いて一夏は箸を置く。

「何ていうのか、アレなんだよな。散々覚悟してまで告白しようと思っただけなのに自分のかかっている間に解決してました、って実際にあったらさ——割り切れないんだよ。置いてけぼりにされた感じで」

「……つまり肩透かしを食らったせいで決心した分の感情

の行き場が無い、という事か」

「そうなんだよ。そりゃ俺が皆に言われた通り鈍いせいですっと2人の気持ちに気付かないままだったのが元々の原因なのは分かっているし、サッサと自分の気持ちにケジメをつけて告白しなかったのも悪いんだけど・・・だからって2人に文句付ける訳にもいかないだろ？だってあんなに幸せそうにしてくれるんだからさ」

「・・・確かに」

学園での様子をよく知るミシェルだけに同意せざるを得ない。クラス対抗戦以降、あの2人の笑顔を見る機会が大幅に増えていた。

どちらも本当に、心から幸せそうな笑顔を浮かべていた。

「他にもさ、ずっと2人をヤキモキさせて、泣かせまでした俺なんかが2人と付き合っていたのかって想いもあるんだよな。『本当に俺は2人に相応しい男なのかな』って、最近よく思うんだよ」

「あーそれ分かる。つか絶対その2人以外にも山ほど女泣かせてるって絶対。どんだけ向こうからの告白とかアプローチに気付かないまま大ボケかましてきたのか、分かってんのかお前？」

「だから今は反省してるって！」

弾の発言に勢い良く立ち上がった一夏の側頭部にお玉直撃。弾の祖父、厳は食事のマナーには厳しいのだ。

一夏復活までしばし待ってから会話再開。

「……………恋愛事には大層な口を聞ける立場にないし、最後はやはり当事者同士で話し合って解決すべき事柄だとは思うが……………もうしばらくこのまま様子を見たらどうだ？下手に自分の感情に決着をつけようとして、藪蛇を出す訳にもいかないだろう」

「……………そうするよ。どっちにしたって箒や鈴と付き合つのに不満なんてこれっぽっちもないし、むしろ俺にはどっちかだけでも勿体なさ過ぎる位だもんな」

「問題はな一夏。お前の事だ、二股かけてるにもかかわらず更に他の女の子達を無意識の内にホイホイ引き寄せかねないって点だな。またどれだけ自覚なしに惚れさせちまう事やら」

「只でさえ恋人が2人も居るのに他に女作るとかどれだけ鬼畜なんだよ俺！？俺は箒と鈴だけで満足してるっての！」

「「あゝ」」

「へ？どうかし——」

振り向いた一夏は、わなわなと震える蘭と目が合う。胸の内を吐き出すのに夢中で接近に気付かなかつたらしい。

先程までのラフな格好から年頃の少女らしい可愛さあふれるフリルの多いワンピース姿に変貌していた蘭だったが、その瞳に浮かぶ涙

が似つかわしくない。

「嘘、ですよネ？……まさか鈴さんと、しかも他の女の人とも二股で恋人同士……？」

「ら、蘭？」

「一夏さんの、一夏さんの——馬鹿あああああああ
あああああつ！！」

「へぶはっ！？」

右手一閃。思いつき張り飛ばされて顔が変な角度を向いた一夏の首から不吉な音が鳴り響くのも気にせず、蘭は食堂から飛び出してしまった。

「な、何故に？」

「やっぱりお前は変わっちゃいねえよ、このキングオブニブチン」

「デメエ一夏この野郎！よくも可愛い孫を泣かせやがったな！？」

「ちょ、待つて爺さんそれ焼けた鉄鍋ー！」

弾の溜息厨房からの怒声。

調理器具飛び交う危険地帯と化した食堂の中、ミシエルはといえば。

「・・・・・・・・美味い」

テーブルの下にその大きな身体を押し込んで緊急避難しつつ、しっかりと確保しておいた自分の分の業火野菜炒めを噛み締めるのであった。

あれからなんやかんやあって、ミシエルが妻の待つ自室へ戻って来たのは6時過ぎであった。

「お帰りミシエル。日本のビストロってどんな感じだった？」

「・・・・・・風情があったし料理も中々だった。今度はシャルロットも一緒に行くか？」

「うん、行く！楽しみだなあ、ミシエルと外でお食事」

「その前にまずは箸の使い方を覚えないと・・・・・・な？」

「いざって時はミシエルに食べさせて貰うからね？」

「・・・・・・それも悪くないな」

などと談笑していると、不意にミシエルの携帯が鳴った。画面を見てみると意外な相手だったのだほんの少し眉を顰める。

「誰からのの？」

「・・・・・・クラリツサからだ」

クラリツサ・ハルフォーフ——ドイツ軍所属の国家IS操縦者であり特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の副隊長を務めている女性だ。

ミシエルも一応フランス軍属でもある。IS学園に入学する1年ほど前からフランス軍からの要請とミシエル本人の希望もあって特例で入隊し、訓練を受け、専用ISの開発の関係からドイツ軍とも数回合同で軍事演習を行ったりもした。

クラリツサとはそれ以来の個人的な知り合いだ。お互い日本の文化に詳しい―ミシエルは元日本人だし、クラリツサの方は少女漫画から知った偏った知識ではあったが―事から馬が合ったのである。

シャルロットの方も軍には入隊はしていないものの、デュノア社側からの参加者としてミシエルと共に演習に参加していたのでクラリツサとも面識があった。

もちろんミシエルとクラリツサはそういう関係には至っていない。単に性別と国境を越えた純然たる友人関係である。これ重要。

『ミシエル・デュノア大尉ですね』

ミシエルのフランス軍での階級は大尉。入隊して1年余りでこの階級はありえないレベルだが、軍がミシエルを引き留めておくために破格の待遇を提示してきた為にこうなった。

「……………シャルロットも居る。聞かせて構わないか？」

『構いません。いえ、むしろ彼女にもお聞かせ願いませんか？彼女のお力も借りる事になりますので』

専用回線を通じて、記憶と変わらぬ透き通った水晶の様に冷たくも凜とした声がスピーカーから発せられる。

「クラリツサさん、どうかしたんですか？」

「——明日にでも分かる事ですが、我らが黒ウサギ部隊の隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐がIS学園1年1組に転校してきます。そう、貴方がたお2人のクラスにです」

「ラウラがここに転校してくるの!？」

2人の脳裏に蘇るは銀の少女の姿。部隊内で最も幼い見た目でありながら黒ウサギ部隊指揮官に君臨するに相応しい強さを誇る、眼帯姿の猛者だ。

『そうです。ひいては今回このように隊長に無断でお2人に連絡したのは———お願いがあるのです』

「お願い、ですか？」

『お2人もご存じの通り隊長は気難しい方で、出発前もIS学園の事を『ISをファクションか何かと勘違いした素人の集まり以下』などと断じておられました。それ故現地ではIS学園の生徒達との衝突は必然と考えられます』

「・・・・・・・・確かに、な」

ラウラ・ボーディツヒという少女を現すならば孤高の狼少女、もしくは人慣れしない血統書付きの猫、と言った感じが。

少しでも打ち解けれさえ出来ればちょっと天然気味の可愛い少女なのだけ。

『本国がIS学園への派遣に許可を出したのは隊長1人のみ。我々には非常お~~~~~に残念な事に、通信での情報提供もしくは要請された物資の提供などでしか隊長への手助けを行えません。』

なのでミシエル大尉と奥方には、主に隊長の学生生活におけるサポートをお願いしたいのです！もちろん、我々部隊員からの要請である事は伏せて、ですが・・・・・・・・・・』

なんかもう血を吐きそうな位苦渋の決断といった感じの声であった。

そういえば副隊長含めた黒ウサギ部隊の人間って全員隊長溺愛してたっけなあ、と思ひ出す2人。

「・・・・・・・・分かった。出来る限りのフォローはしよう」

『是非ともお願いします！それからもう1つ頼みがあるのですが』

「何ですか？」

『日本の学校といえば臨海学校！体育祭！文化祭！修学旅行！その他諸々様々な学校行事が行われる！そうでしたね、ミシエル大尉！』

「あ、ああ……………」

いきなりテンション急上昇なクラリッサの声に流石のミシエルもちよつと声が退ける。

『我ら黒ウサギ部隊にはそれら隊長の晴れ舞台の全記録を未来永劫伝えるという義務があるのです！しかし我々が出向けない以上現地の協力者であるお2人に頼むほかありません！』

「えっと、つまりラウラの学園での生活とか行事とかの様子を撮影して送って欲しいって事？」

『その通り！値段はそちらの言い値で構いません！流石に機密情報までは取引できませんが、何なら夫婦生活をより満たす為の精力剤といった品々もお送り致します』

「そんな物必要ありませんよ！今だけでも十分激しい位なのにもっと凄くなったら僕壊れちゃうよぉ……」

「……………すまん。次からはもう少し抑えよう」

『変わらず円満な様子で何よりです』

シャルロット自爆。真っ赤な顔から湯気を立ち上らせる彼女は置いて、

「・・・・・・・・写真の方も出来る限りの事はしよう」

『ありがとうございます！それではくシユヴァルツェア・ツヴァイク>のプライベート・チャネルの番号をお教えしますのでそちらをご利用下さい！』

ISのコア・ネットワークは音声のみならず画像のやり取りやリアルタイムでの映像通信も可能である。元が宇宙空間での作業に用いる事が前提の代物だっただけあり、機外などでの作業状況を逐一仲間に報告する為だ。

でも軍におけるISのプライベート・チャネルって緊急通信暗号用の回線だった筈だからコレも一応機密事項だった気が。いいのかそれ。

『日本ではそういう時こう言うそうです。』こまケえ事は良いんだよ』と』

「そうか・・・・・・・・」

『それでは失礼。交信、アウト』

切れた電話片手にミシェルはすぐ隣のシャルロットと顔を見合わせた。

「・・・・・・・・どうしたものか」

「ラウラが転校してくるのかぁ・・・・・・・・クラリツサさんも言ってたけど大丈夫かな？あの子って中々人を寄せ付けない所があるもんね」

「そうだな・・・・・・・・とにかく本人がこの学校に慣れてくれるまで支えよう。幸い織斑先生も居るからいざという時のストッパーになってくれるだろう」

「確か織斑先生ってドイツ軍でもしばらく教えてたんだっけ？」

「・・・・・・・・ああ。ラウラはその時の教え子だったらしい。恩人とも言っていたな。その割に一夏の事は大分嫌っていたが」

この時期にラウラが転校してくる理由を推測するとすれば幾つか予想は出来る。

ドイツ製第3世代型ISの稼働データ取りと宣伝、ラウラの目を通して分析される他国のISの評価データ、世界に2人しか居ない男性IS操縦者の調査、そして――

「・・・・・・・・どちらにしても、しばらくは忙しくなりそうだ」

何より。

思い込んだら一直線なあの少女が、恩師の偉業を台無しにした存在を放っておく筈が無い。

——ミシエルの懸念は的中する。

「・・・・・・・・いきなり何しやがる」

翌日の月曜日。ラウラの転校初日。

クラス中が啞然として見守る中、一瞬の内に3つの出来事が起こった。

「フン、良い目をしているな」

一夏の元まで近づいた銀の少女が一夏に平手打ちを見舞い、それを一夏が受け止め、同時にミシエルが少女の振るった腕を掴む。

左目を眼帯で覆われているにもかかわらず、片方だけのラウラの眼光は誰の双眼よりも鋭くギラついていた。

「だが私は認めない。今ここで宣言しよう。教官の栄光を奪った貴様を、必ず完膚なきまでに叩きのめしてやるう」

「・・・・・・・・言いたい事は分かるけどな。だからってハイそうですかってアツサリやられてみせると思うなよ？」

交わされ合う宣戦布告。

こりゃ予想以上に面倒な事になりそうだと、ミシエルは頭を抱えた。

2 - 2 : 結構気にしてるんです / ランチタイム

——人は見た目によらないものである。

第2グラウンドから見える空を見上げながら一夏はしみじみとそう思った。

「強いな、山田先生」

「……………こう言うては何だが、本当に、意外だった」

元代表候補生とは千冬姉の談だになるほど、単独で現役代表候補生であるセシリアと鈴を追い詰めている辺り、千冬姉が言うだけあった。

——勝手に壁に突っ込んで気絶したり生徒にからかわれて振り回されたりISの操縦をミスって生徒達に突っ込んできたり（ミシエルが発動させたAICのお陰で双方被害なし）してきた人と同一人物とは思えない、冷静沈着な戦いぶりである。

「あ、終わったみたい」

シャルロットが声に出した通り、山田先生の牽制射撃に2人が誘導させられて固まった所でグレネードが炸裂しジ・エンド。

教師の面目躍如といった見事な戦いぶりであった。自分もアレぐらい落ち着いて戦えるようにならなきゃな、と一夏は決心を新たにする。

対するセシリアと鈴の方はそっちが悪いだのいいやアンタが下手くそわーわーぎゃーぎゃーと互いに責任をなすりつけ合いながら下りてくる。

いやまあぶっちゃけ一夏以外にも観戦してた皆からしてみればどっちもどっちじゃね？ってな感想なのだが。

と思ってたら地面に着地するなり情けない顔で鈴が一夏の元へ駆け寄ってきた。

「いちかあ、負けちゃった〜……………」

「いやそんな泣きそうにならんでも。相手は皆に教える先生なだけあるんだし、山田先生もそれ相応の実力を持ってたって事なんだろ。見た目によらないけど」

「最後のは余計ですよ織斑君！」

抗議の声を上げる山田先生を無視して、何と鈴は一夏に抱きついた。というか、＜甲龍＞を展開したまんまなので体格と自重差のせいで一夏は押し倒される格好になる。

周囲で上がる歓声。目を剥く筈。目の光が消えるセシリア。苦笑するシャルロット。ちよっとだけ^{まなじり}眦を持ち上げるミシエル。相変わら

ず冷たい視線のラウラ。眉間を押さえる千冬。

一番驚いたのは一夏である。

「な、何すんだいきなり!？」

「なによ、傷心の彼女を慰めるだけの甲斐性ぐらい発揮したらどう？」

「だからって押し倒す意味がわかんねーって!つか場所考える場所!今授業中!でもって皆見てるから!」

「だからよ。こういう時こそ出来る限りアンタはアタシの物なんだってアピールしとかないとねー」

「ええいそれぐらいで十分だろう鈴!ISを展開したままでは一夏が苦しいだろうが!というか羨ましいぞ!それにお前だけではなくて『私達』だ私達!」

「いい加減にせんかこのトライアングラーども!」

一夏にのしかかる鈴を引き剥がそうとしている筈にもまとめて出席簿一閃。周囲の女生徒+αには腕の残像しか見えない程速く鋭い、見事な3連打であつた。

ちなみにそのすぐ近くでは、

「許せませんは許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ許せませんわ（ry）」

「いけませんオルコットさん！安全装置解除して向けちゃダメー
でーすー！」

「うん、やっぱり一夏死んだ方が良いと思うよ?」

「本人達の問題なんだからシャルロットもく灰色の鱗殻>はしまつておいてくれ……」

「ふ、鳳さんなんて羨ましい……」

「なんて大胆な。っていうかやっぱりあの噂本当だったんだ」

「2股で三角関係で篠ノ之さんと鳳さんで織斑君を共有……………」

「毎夜3人でお楽しみとか？」

「とにかくハッキリしてるのは――」

「 2 人に先越された or z」

天誅ですわー殿中ですよー落ち着け話せば分かるお兄ちゃんそこどいて殺せない2人がオツケーなら私もーええいどいつもこいつもい

い加減にせんか！！！！

そんな感じでしょっぱなからカオスな授業風景に、1人ラウラはやはりこの学園は生温いにも程があると再確認するのであった。

……生温いというよりは無茶苦茶である、といった方が正しい気がしないでもない。

事態の収拾までしばらくかり、時間が無駄になった分テキパキと授業再開。

今日は実機を使った実戦訓練である。専用機持ちをリーダーにグループを作り、1つの班につき1機のISが宛がわれる事になった。

各自専用機持ちの指示に従い実習を開始し始めたのだが――
2つのグループだけ重苦しい沈黙の空気を漂わせていた。ミシエルとラウラの班である。

ラウラの場合は本人の放つ冷たく人を寄せ付けないオーラのせいで、ミシエルの方は単に彼の顔が怖くて班員になった少女達が勝手に怯

えてしまっている為である。

彼が歩き回る度に聞こえてくる合金製の義足のたてる特徴的な足音がまた拍車をかけていた。

「……………ならまずは」

「「「「ひいつ!!?」「」「」

普通に指示された通りに進めようとしたただけなのにそれだけで悲鳴を漏らされた。もう慣れたけど、ちよつとだけ泣きなくなった。

別に取って食うつもりなんてこれつつつつつぱつちもないのに、やはり世の中顔で世界は回るのだ。何という格差社会。恨むぞこんな顔に生まれ変わらせた神様。シャルロットに出会わせてくれたのには感謝するけど。

「……………順番に装着と起動、歩行まで進めていく事にする。誰か、最初にやってみたい人は居るか……………?」

「ね、ねえ、美紀から最初にやってみない?」

「いやいやここは里子からどうかしら?」

「いえいえここはアリサから」

「いやいやここは——」

「どうせなら先に――」

思いつきり最初の犠牲者（？）の役目を押しつけ合う少女達。見事な友情に今度こそ涙が出そうになった。だから君達は俺の事どう思ってるんだ一体。もうこれいじめのレベルじゃね？

そんな感じでミシエルの内心は涙がちよちよぎれそうな、その時だった。

「なら私が行ってみるよ」

「「「「「どうぞどうぞ――え？」「」「」「」

自ら生贄に進み出たのはとても小柄なでゆるゆるとした雰囲気少女。ミシエルとの身長差は何と50cmオーバー。近づかれると顎を引かなければ視界にも入らない。

前に一夏とかと話してるのを見た覚えがある。名前は、確か。

「のほほんさん、で、良かったか………？」

「おー、デュノア君にも呼ばれちゃったー。じゃあ名字だとシャルシャルと被っちゃうからミー君って呼ぶねー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれれー？どうしてミー君泣いてるのー？」

「・・・・・・・・・・気にしないでくれ・・・・・・・・これは、ただの嬉し涙だから・・・・・・・・」

苦節15年、これまで散々人間核弾頭だの伝説の傭兵だの歴戦の戦士だの扱いされてきたミシエルにとって、のほほんさん（仮）の純粹無垢な雰囲気と接し方は彼に琴線に強く触れたのである。

感動し過ぎて先にシャルロットと出会ってなければプロポーズしてたかも、と考えちゃった辺り、これまでのミシエルの追い詰められっぷりが伺えるだろう。

「泣かなくても大丈夫だよ？ほらいいこいいこ」

自分よりも遥かに小柄な少女に慰められながら頭を撫でられる、というのはとても新鮮な体験だった。

人懐っこい子犬にじゃれつかれているような錯覚を思えて、ミシエルも反射的にのほほんさんの頭を撫でてみる。あははーくすぐったいーとのほほんさんが笑う。周囲は彼女の頭が握り潰されないかとヒヤヒヤしていたが。

うん、激しく癒される。出来る事ならもっとうしていたい。が今は授業中である。先生に怒られる前に進めようと思っていたら、

「むー……………」

「あー、しゃるしゃるだー」

別の所で教えてた筈の妻が脹れっ面ですぐ隣に居ました。明らかに怒っている。というよりも、拗ねている。

黙って旦那を睨むシャルロット。よく見てみると微妙に頭を傾けて頭頂部をミシエルの方に向けているような姿勢をしており、ミシエルは彼女が何をして欲しいのかすぐに悟った。

ぽんっ

「……………すまない。別に浮気とかそついうつもりじゃなくてだな……………」

「もう、それぐらい分かってるよ。だけど僕だって嫉妬ぐらいするんだからね?」

「……………心得ておく」

「わははー、ミー君としゃるしゃるらぶらぶだー」

シャルロットもまたミシエルに頭を撫でられながら、彼女の方から彼の胸板に顔を埋めた。

その様子を見ていた少女達の抱いた感想は『美女と野獣』で統一されていた。ついでにミシエルの逞しい身体に挟まれて大きく形を変えているシャルロットの双丘にも目が行ってしまう。

何アレ私の頭よりおつきくない？ISスーツ着てて何で揺れるのよ。篝さんクラスいやいや山田先生レベル！？ええいフランスの乳は化物かつ！？

自分の胸元を見下ろした。何人かは世の中の不平等を呪った。やっぱり男か男のお陰なのか。グギギ。

「だから貴様らも早く進めんか！デュノア妻、お前は別の班の人間だろうが、さつさと戻れ！」

すばしこーん

「いきなり転校生に引つ叩かれそうになったあ!？」

鈴の素っ頓狂な声が屋上に響き渡った。

現在昼休み。昼食を取るべく一夏とミシェル、箒と鈴とおまけにセシリア（ひどいですわー!）は各々弁当を持って屋上にやってきていた。

なお、毎日ミシェルと昼食を共にしている筈のシャルロットだが、今日は珍しく一緒ではない。

「そうですね。まあ流石一夏さんというべきですが、あっさり防いでみせてはいましたが」

「向こうは一夏を知っているような口ぶりだったが………」
夏の方は彼女と初対面なのだろう?。」

「ああ。でも何となくだけど、見当はついてる。それより早く飯に

しようぜ？俺腹へっちゃってさ」

「む、それもそうだな。では食べるとしようか。ほら一夏、お前の分だ」

「しっかり味わって食べなきゃ許さないんだから！」

「分かってるって。サンキューな、2人共」

箒が差し出した弁当箱と鈴が取りだしたタッパを普通に受け取る一夏。

それを見ていたセシリアの頬が引き攣った。

「………箒さん、鳳さん。今渡した物は何でしょうか？」

「何って、今日の一夏の昼食だが？」

箒の弁当箱の中身は鮭の塩焼きに鳥の空揚げ、こんにゃくとゴボウのトウガラシ炒め、ほうれん草の胡麻和えといった色とりどりの見事な手作り弁当であった。

鈴の方はタッパいっぱい酢豚。中々のインパクトである。

「ミシエルとセシリアは何食うんだ？2人も自分で作って持ってきたみたいけど」

「・・・・・・・・俺のはこれだ」

ミシエルが取りだしたのは全長30cmはあろうかという太いフランスパンを使ったサンドイッチ。レタス・スモークハム・キュウリ・スライスチーズを挟んで粒マスタード入りマヨネーズを塗った豪快な一品だ。

それを強面なミシエルが大口上げて齧り付く姿がまたよく似合う。彼を皮切りに一夏達も食べ始める。

「おおんまいんまい！特にこの唐揚げが良いな！生姜に醤油に後は・・・・・・・・何だろこの隠し味。覚えはあるんだけどな」

「ふふつ、答えはおろしニンニクだ。それと予めコショウも少しだけ混ぜてある。そんなに喜んでもらえて嬉しいぞ一夏」

「私の酢豚も忘れないでよね？」

「分かってるって。どれどれ——お、こっちも美味い！いやー、2人共腕上げたなあ。こりゃ俺もつかうかしてらんないな」

バクバクと勢い良く2人分の昼食を食べ進める一夏を如何にも幸せそうに見つめる少女2人。

その片割れの視線がふと弁当箱の唐揚げを捉えた。

「ねえ一夏。私も唐揚げ味見させてもらっていい？」

「ん？構わないぞ。ほらあーん」

一夏は唐揚げを一口大に箸で切ると、左手を添えて鈴に差し出した。鈴の方はほんの一瞬固まりはしたものの、すぐに再起動して唐揚げを箸の先端ごと口を含む。その顔はちよつとだけ赤い。

「うん、美味しっ」

「だろ？」

満面の笑みを鈴も浮かべた。一夏もそれに同意するが、褒められている筈の方はほんのちよつとだけ不機嫌そうだった。

ちなみにそうだったのは一夏が鳥の餌付けよろしく手ずから唐揚げを鈴の口に運んでからである。

セシリア？とつくの昔に黒いオーラを放ちだしていますが何か。

筈のそんな様子を見て取った鈴はおもむろに小悪魔的な笑みを浮かべ、一夏に提案する。

「一夏、アンタン所からで良いから筈にも私の作った酢豚、試食し

てもらってくれない？」

「んなあつ！？べ、別にそこまでしてもらわなくても私は構わ――」

「それもそうだな。ほらお前も食ってみろよ箒。美味しいぞー」

即座に次の展開が読めてしまった箒は急激に顔に血の気を集めつつ止めようとしたが、時すでに遅し。

気が付けば、鈴の時同様一夏の差し出した箸がすぐ目の前にあった。違いは摘ままれてあるのが唐揚げではなく衣に甘辛いあんがしっかりと絡まった酢豚である事ぐらいである。

しばらく迷う筈であったが、やがて覚悟を決め、そっと唇を近づけ・
・・・・

酢豚を口に含む。噛みしめた途端沁み出る肉汁と火の通った身の適度な歯応え、衣の感触とあんの風味が混然しつとも調和していて成程、確かに美味しい。

「うむ、中々のお手前で」

「あつたりまえよー、えへへ」

和気藹藹と食事を進める正三角形な一夏達、すぐ横でセシリアが無言でレーザーライフルを展開しようとしていた。それをミシエルが

必死になって止めていた。

そんな感じで局所的な嵐が発生しつつもそれぞれの腹は膨らんでいき、次第に食事中の雑談が増え始める。

今日の話題は主に銀の転校生について。

「あら、ボーデヴィツヒさんとミシエルさんはお知り合いですか？」

「ああ、最初にあつたのは半年ほど前か………フランス軍とドイツ軍の合同演習の際にな」

「ミシエルは軍隊にも所属していたとは初耳だ。もしやシャルロットもそうなのか？」

「………いや、シャルロットは単に実家の会社の所属だ。俺の場合は、会社と軍の両方に所属という扱いになっている」

「そもそも専用機持つてるような人間って大概ISを開発してる企業か軍の所属だしね。ちなみに私の場合は軍だけど」

鈴の場合一夏がIS学園に入学したと知ったや否や軍の責任者を脅して無理やり手続きさせたのはいい思い出である。

セシリアの場合は<ブルー・ティアーズ>を開発した企業の所属で、むしろ一夏の様に所属がハッキリしていない人間の方が珍しいのだ。

「……………誤解の内容に言っておくが、ラウラはただ単に軍隊以外の世界を知らないせいで身内以外の人間になれていないだけであって、本当は少し抜けているが良い奴なんだ」

「いきなり人の顔を張り飛ばそうとするのにか？」

それを言われてはフォローのしようが無い。そこへ一夏が話を逸らそうと試みる。

「で、でもミシエルが軍人って確かに似合ってるよなうん！」

「似合ってるどころかドツボ過ぎて学生だって忘れちゃいそうよ」

「……………悪かったな」

「軍隊の方からはあちらからスカウトされましたの？」

「……………きっかけはそんな所だ。元々は広告塔を頼まれたんだが、専門の訓練に関しては自分から希望した」

「なるほど、IS操縦者はいざという時どんな状況に置いてもISが使えない場合であっても状況を打破できるよう、専門の訓練を受けなければなりませんものね。軍に教えを請うのは理に適った事で

すわ」

これはISが広まって以後の世界各国で言える話なのだが、先進国における軍隊の兵員は急減の一途を歩んでいた。

戦闘機や戦車などが一気に時代遅れになったが為にそれらを運用する為の人員を大幅に軍が削減したのが主な理由の1つだが、女尊男卑一気に広まったという背景もまた理由の1つである。将来の軍隊を担う若者達の入隊が一気に減少してしまったのだ。

近年女性への門戸も格段に広くなったとはいえ、基本軍隊は男性社会——にもかかわらず『男より女の方が強い』という風潮故か、入隊する男の数は減少の一途を辿り、女の入隊数の方は少しづつ増加しつつあり、軍隊内の男女比が逆転するのも遠い話ではないと言われていた。

そこで慌てたのは古株の軍人達。彼らは軍まで女性に乗っ取られるのを防ぎたい。だけど入ってくる男の数は年々減ってゆくばかり。

——そこに世界初の男性IS操縦者となったミシエルの登場である。

10代半ばの若さでありながら男臭さに満ち溢れ、尚且つ流星の如く現れた男性の希望の星たる彼を軍が放っておく筈もなく。

「…………入隊して1年ちよつとで15歳の若造が大尉というのもおかしい話だが、少しお願いしたらGINにまで体験入隊出来たのは予想外だったな」

GINとはフランス国家憲兵隊治安介入部隊、つまり対テロ特殊部隊である。

そこまで軍隊に詳しくない一夏達は首を捻っていたが、一応軍属である鈴も同じような反応してちゃダメな気がするのだが…………

「そういう事は彼女も軍人なのか。確かにそれっぽい感じだったけど」

「階級は少佐…………立派な部隊の指揮官だ」

「上に立つ者がいきなり人の顔を張り飛ばしていいとは思えんがな」

だからそれは言わないでって！

「そういえばミシエルのISってドイツやイギリスからの技術協力もあって完成したって前に言ってたっけ。その関係もあるのか？」

「…………その通りだ。俺のISに組み込まれている技術の内、イギリスからはBT兵器のデータ、ドイツからはAICのデータが用いられてある」

「そう考えると贅沢な機体よね。数機分の第3世代機の技術が組み込んである訳なんだから」

「・・・・・・それはともかく、ラウラの友人としても、一夏の友人としても、2人共仲良くしてもらいたいとは思っているのだが・・・・」

「いや、俺は別に構わないんだけど向こうにあそこまで喧嘩腰にされちゃあさ——って何で睨むんだよ2人共」

何故か筈と鈴から冷たい目を向けられて戸惑う一夏。

「別に。ただ私達は憂慮しているだけだ」

「そうそう。一夏の事だから例え最初は仲が悪くったって相手が女の子なら最終的には惚れさせちゃいそうなもの」

「な訳ねえって!」

「どうだか!」

だってすぐそこにセシリアという先例が居るではないか。まったく、せっかく晴れて恋人同士になれたというのにこの男はまだ自分のフラグ立て能力に自覚が足りないのか。

「こうなったら私達の仲をそのラウラってのに見せつけて入る余地

が無いって事を今の内にしつかり覚えさせときましょ！」

「うむ、良い案だ！彼女以外にも他の女子達にも一夏が誰の物なのか思い知らせるのにも丁度良い。ぜひそうしよう」

「頼むから俺を置いて勝手に決めないでくれそういうの……」

むぎゅーと左右から2人の恋人に抱きつかれながら、一夏は嬉しいやら悲しいやら疲れるやらと悲喜こもごもな表情で力無くそう呟く事しか出来なかった。

だってこうなった時の彼女達に敵わない事は、嫌というほど身に沁みていたから。

「むきー！何で一々わたくしの前でそんな事をなさいますの！？当てつけないね当てつけないですわね！？」

「だからって事あるごとに嫉妬に駆られてISを展開するのは勘弁してくれ……………」

ストッパー役お疲れ様です。

2-3:銃声の記憶

銃声と共に鮮血が肉片と共に飛び散った。

人が目の前で死ぬその光景に、一夏の思考は停止する。高々10代始めの子供が、人の命を奪われる様を見せられて思考を維持できる筈が無い。

それがたとえ相手が自分を誘拐しようとした者であっても。

「走れ一夏！走れえええええええええええつ！！！」

自分の呼ぶ声が聞こえる。このドイツに来てから出来た異国の友達の声。同じホテルに泊っていたのがきっかけ。

ミシエル・デュノア、同年には全然思えない、千冬姉以上に老けた顔の子。そんな彼が、拳銃を構えて必死な形相でこっちに向かって叫んでいる。

彼が何を言いたいのかは一夏は頭では理解していた。ミシエルは一夏に今すぐ逃げると言っている。

なのに身体が言う事を聞いてくれない。まるで全身を石膏で塗り固められたみたいに腕も足も動かないまま。

誘拐犯の仲間が一夏のすぐ傍のワゴン車から出てきて一夏を車内に引きずり込もうと手を伸ばす。ミシエルは銃口をずらし車に向けて撃ち込む。

鉄柱をハンマーで殴りつけた様な銃声は、一夏がテレビで聞いた事のある映画やドラマの銃声から遠くかけ離れていた。その銃声と3mと離れていない車体に撃ち込まれる銃弾の着弾音が、一夏の身体を精神との乖離から復帰させた。

「あ、あわ、うわわわわわわわ!!?」

友人の元へ、駆け出す。

己の手足がまともに動いてくれているのかもその時の一夏には覚えが無かった。ただ必死に手足を動かして、誘拐犯の元から逃げ出そうとした。

一夏がミシエルの元へ近づいてくる。男達の魔の手から逃れてきた友人が横を通り過ぎるのを確認してから、ミシエルは弾の切れた拳銃を持ったまま後を追おうと背を向ける。

一際強烈な銃声。

後ろで聞こえたまるで爆発音みたいな銃声に、本能的に一夏は足を止めてしまう。撃たれたのは、一夏ではない。

ミシエルのが撃たれたのだった。地面に倒れる音に振り向くと、友人が倒れていた。彼の右足、膝から下がズタズタに引き裂かれ、骨の破片まで見え隠れしている。今にも千切れてしまいそうな有り様だ。

車から降りた誘拐犯の仲間が、銃口から硝煙たなびくショットガンを構えながら一夏の元へ近づいてくる。街中での凶行に、既に周囲の人々は悲鳴を上げながら散り散りに何処かへ逃げ去ってしまったている。助けてくれそうな人はいない。そもそも誰が銃を持った相手にそう簡単に立ち向かえる気になるものか。

「うつ・・・ひつ、うつうつうつ・・・」

悲鳴を押し殺しながら、最早2度と歩けるかも怪しいミシエルの身体を一夏は引っ張っていこうと試みた。

見た目通り、彼は一夏よりずっと重い。本格的に鍛練というものから遠のいていた一夏の腕力では持ち上げるところか、脇の下に入れた手がすっぱ抜けないうるだけにでも一杯一杯だった。

それでも見捨てられられない——自分を助けに来てくれた友達を、誰が見捨てられるものか。

ただど今の一夏に出来たのは、手近な街路樹の陰に怪我した友人を引っ張り込む事だけ。焦りと恐怖心に支配された子供の一夏にはそれだけで限界だった。

その間にも足からの出血は一向に収まる気配が無い。剣道をやって
いた頃簡単な応急処置の仕方は習ったけれど、誘拐されかけ人が殺
され友人が撃たれるという異常な状況下が一夏からそれすらも行え
るだけの冷静さを奪っていた。

ざり、とすぐ目の前で足音がする。

顔を上げると、あのショットガンを持った誘拐犯の仲間がミシエルの
足元に立っていて、またも恐怖で動けなくなつた一夏を捉えようと
手を伸ばし……。無防備な胴体に45口径弾が突き刺さる。

「にげ……。ろ……。」

今やミシエルの顔色は酷く蒼ざめ顔中を冷や汗が覆い、呼吸も非常
に荒い。大量出血のせいでショック症状すら呈しながらも――
彼は一夏を逃がそうとしていた。

引き摺られている間に震える手で再装填は出来ても最早拳銃を持ち
上げる事すら出来ず、それでも地面に横たわりながらも銃口を未だ
動かない誘拐犯の車へと向ける。

その時、3人目の男が車内から姿を見せた。ミシエルは撃とうとす
るも、最早重い引き金を引き絞るだけの力も血と共に喪失してしま
っていたのだ。

男は所持していたライフルの引き金を躊躇い無く引いた。

今度はミシエルの顔面が真っ赤に染まった。一夏は全く気付かなかったが、別にライフル弾がミシエルの顔面に直撃した訳ではなく、ミシエルの手前の固い地面で跳ね返った跳弾が鼻先を掠めただけだった。

それでも威力は十分で、銃弾はミシエルの顔の肉を一直線に抉り、掠めた衝撃でとつくに限界寸前だったミシエルの意識は容易く刈り取られる。

その時の一夏には、今度こそミシエルが殺されたようにしか見えなかった。もうピクリとも微動だにしない。

そんなミシエルの姿に今度こそ思考を放棄して凍りついてしまった一夏を、3人目の誘拐犯が穀物の詰まった袋でも運ぶかのようにあっさり抱え上げて車の元へ運んでしまう。

その間中、一夏の目はずっと動かないミシエルを捉えて続いていた。車の中に放り込まれる。周囲から聞こえる一夏には理解できないドイツ語の悲鳴。誘拐犯もドイツ語で運転手に指示を出す。

遠ざかってしまった血塗れの友人へと、一夏は手を伸ばした。

縋るかのように。許しを請うかのように。

——扉が閉まり、もうその手は決して届かないまま、一夏の視界は暗転する。

そして一夏は目を覚ます。

何度も見てきた過去の悪夢。それはIS学園に入学してから初めて見る、久々の物だった。

「……………やっぱ、アイツのせいかな」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。かつての姉の教え子。彼女の存在が3年前のドイツでの事件を呼び起こさせた。

勿論あの時の事を忘れた事なんて片時たりともない。あの事件があったからこそ、今の一夏が居る。

もしただ自分が誘拐されただけで他に傷ついた人間が居なかったら、きっと自分は今も安穩と過ごす事だけを考える、無気力な人間で居ただろう。

一夏の身体は寝汗でベタベタだった。シャワーでさっぱりしたい所だが、どうせ朝の鍛練でまた汗をかくんだしそれを終えるまでグツと我慢。

ベッドから降りようと後ろ手を突いたその時である。

ふにつ

「あれ？」

とても柔らかいものに指先が触れた。すべすべしつとりとした指触り、幾ら触っても飽きがこなさそうな弾力と柔らかさを兼ね備えたその感触には何だか覚えがあるような、無いような。

とりあえず、シーツや毛布の類ではないのは確定的である。

無言で一夏はゆっくりと首を回してその物体の正体を見た。その物体は肌色だった。その物体は呼吸をしていた。その物体は、貧乳だった。

「だれがひんにゆうにゃのよー……………むにゃむにゃ」

凄え、むにゃむにゃなんて寝言初めて聞いたとどうでもいい感想をまず抱いてしまう。

ツインテールを解き、裸身を晒して幸せそうに眠る鈴の姿に昨夜の事を一夏はすぐに思いだした。というか、こればかりは忘れちゃいけない。忘れたら本当に鈴と、それから箒にも殺されかねない。

ちなみに先程一夏が無造作に手を置いてしまったのは鈴の胸元である。ゴメン、想わず箒と比べちゃいました。揉み応えは箒の方がよっぽど上です。

これまた鈴に言ったら消滅させられそうな感想であった。

「でも鈴も……………凄かったな」

こうして肉体関係を持って分かった事が1つ。

それは女の子の身体というのはいわば楽器みたいなものである、という事だ。

触る場所、そして触り方によって彼女達の漏らす艶やかな音色は千差万別に奏でられる。鈴のそれはまるで甘えてくる小猫みたいで、ついつい夢中になってしまった。箒の場合は子犬だった。

「これで本当に逃げられなくなっちまったなー」

今度こそ名実ともに一夏は同時に箒と鈴の恋人となった。

此処まで来てしまつてはもう四の五のは言つてられない。誰が何と言おうと周囲から何と言われようと、2人分の責任を取つてみせると一夏は固く決めた。そもそも2人の方から、先にそう望んでくれたのだ。これでいい加減応えてみせなければ、それこそ男じゃない。それにしても一昨夜は箒で昨夜は鈴。入学した頃はこんな関係になるなんてこれっぽっちも想像していなかった。弾辺りに言ったら嫉妬と妬みで殺されるかも。

千冬姉は……どうしよう。今から遺書でも書いとくべきか？ 割と洒落にならないから悩む。

でもどちらも泣かせたくないからといって両方を選ぶ事自体おかしいんだから殺されても仕方ないか。

「とにかくトレーニング終わってから片付けっか」

汚れたシーツの後始末に散乱する使用済みティッシュの処理。今日のトレーニングは早めに終わらせた方が良さそうだ。

まだ夢の中の鈴をそのままに、一夏は部屋を出た。時刻は6時前。廊下はまだ無人だ。あと1時間もすれば目覚めた女生徒達で寮内はそれはそれは賑やかになるのだ。

向かった先はグラウンド。空を見るからに、今日も今日とてカラッと晴れた1日になりそうな気配。風に乗って僅かに潮の香りが鼻をくすぐる。

その日は、先客が居た。それも2人。

「む、貴様か」

「・・・・・・おはよう一夏」

トレーニングウェア姿のミシェルに軍人らしい黒のアーミーパンツにオリブドラブのランニングシャツといった格好のラウラだった。

途端に形成されだす張りつめた空気。1人早くも溜息を吐きにくくなったミシェルを余所に、一夏とラウラは無言で睨み合いながらも準備運動を始める。

全身の筋肉をほぐし終わると、これまた同じタイミングでグラウンドを走り始める。1周5kmという長さを誇るIS学園のグラウンドは、ジョギングのコースに最適だ。流石に学園の敷地1周は距離が長過ぎる。

『最初』は黙々と3人一塊りになって、程々の速さで走り続けた。そう、『最初は』、である。

その状態が変化したのは1km程走った頃か。身体が十分に温まってきた一夏はほんの少し走るスピードを上げた。必然、少しだけ一夏が2人の前に出る事になる。

それに気付いたラウラの眉根が僅かに寄せられ、片目が細められる。まるでうっとおしい蚊か蠅が鼻先を飛び回っているかのような不快な視線を一夏の背中に向けた。

ラウラもスピードを上げた。一夏よりも更にほんの少しだけ上の速さで、今度はラウラが一夏の前に出る。

一夏の横を通り過ぎる際、それと分かるぐらいの大きさを鼻を鳴らしながら。

「フン」

「（ムカツ）」

こう見えて結構喧嘩っ早い一夏の導火線に点火させるにはそれだけで十分だった。

一夏がラウラを追い抜く。それをまたラウラが追い抜く。一夏が追い抜く。ラウラが抜いて一夏が抜き返す。

そんなこんなを繰り返してる内に2人が全力疾走に移行するのはあつという間だった。

「ぬおおおおおおおおおおお！」

「はあああああああああああ！」

瞬く間に遠ざかっていく大小の背中。

それを見送る事しか出来ないミシェルは、今度こそ溜息を大きく吐き出しながらも1人変わらぬ速度でジョギングを続行するのであった。

で、どうなったかというと。

「か、勝ったのは、はあ、私の、ふう、方だ！」

「ぜえ、いいや、ひい、絶対、はあつ、俺の方が速かった、ふうう」

「………とりあえず歩かないと余計に疲れるぞ」

残り4kmを徒競走で走破した代償に2人揃って激しく息を切らして動けずに居る。流石に体力に自信があっても、それだけの距離を100m走ばりの速度で走り通すのは少々無茶だったらしい。

まあ自業自得である。息が整うまで待つ事しばし、

「貴様、『刃物』の扱いに覚えがあるそうだな」

「……………だつたらなんだよ」

「丁度良い。これで私の相手をしろ」

ラウラが一夏に放りあげたのは訓練に使われる硬質ゴム製の切れないナイフだ。つまりナイフ戦の相手をしろという事か。

どちらかといえば一夏が得意なのは『刀』の扱いなのだが、剣術を嗜む一貫で短刀や小太刀の扱いもそれなり以上に鍛えこんである。

「貴様に素人相手にしか通じないような単なる子供騙しの小手先の技などではなく、本物の刃物の扱い方というものを教えてやろう」

「上等だ。1000年かけて鍛えられてきた日本剣術がどんなもんか、身体で教えてやんよ」

「……………怪我はさせるなよ怪我は」

この分だと単なるナイフファイトどころか何でもありのガチンコ格闘戦が勃発しそうで激しく不安だった。でもってミシエルの予想は正しい。

最早頭痛に襲われたしたミシエルを横目に、どちらからともなく2人は相手に飛びかかった。

「・・・・・・・・そんな感じで青タン打撲痕蚯蚓腫れだらけな訳だ」

「まったく、何事かと心配させたかと思えばそんな事とは」

「にゃー」

「……2人を止めるのも大変だったぞ。朝連に運動部の人間がやってくる時間になっても続けようとしていたからな。引き剥がすのに、苦労した」

「ふにゃー」

相当『いい』のを何発も食らった一夏の口元や目元は赤黒く腫れ、僅かに血すら滲ませていた。ISスーツに着替えて箒達もようやく気付いたのだが、腕や脇腹などにも幾条の細長い蚯蚓腫れが走っていた。

しかし本人はケロッとした顔で、

「心配しなくても大丈夫だって。千冬姉や土方さんの扱きに比べりゃ軽い軽い」

「うみゃー」

今挙げた2人は一夏にとって色んな意味で容赦無い2大筆頭である。前者はよく知っているからともかく後者がどういった人物か知らない箒は首を捻っていたが。

現在午後の自由時間。毎週土曜日は午後から自由時間とされる上アリーナが完全解放される為、他の生徒達に漏れずいつもの面子でISの特訓にやって来たのだった。

「……関節は大丈夫なのか？途中からナイフ放り投げてサブミッション合戦になっていた気がするんだが」

「ちょっとだけ痛むけど平気だよ。一応これが終わったら湿布とかも貼っとくつもりだし」

「はにゃー」

「——で、先程から一夏さんに纏わりついてにゃんにゃん盛っているその雌猫は何でしょうか？」

誰もが見惚れそうな美しい微笑でセシリアが聞いた……。その額にブツとい青筋が浮かんでいなければ、の話だが。

「と、とりあえずお願いだから離れてくれな鈴！ISが展開できないしな！な！？」

「ふにゃー？」

「一夏の言う通りだぞ鈴……。気持ちは分かるがな、うん」

「にゃにゃー」

「……落ち着けセシリア。落ち着いて、そのライフルを下ろすんだ。オーケイ？」

「あら何を仰いますのミシエルさん。私は落ち着いていますわよええこれ以上無い位。一夏さんに傷1つつける事無く雌猫だけを撃ち抜ける程度には!」

「ダメだよセシリアさん、狙うなら一夏の方を狙って!」

「うおい何でシャルロットも変な方向に煽るかな!?」

「2股とか男の風上にも置けないと思うなあ。何それ、僕への当てつけ?」

「いや何かもうごめんなさい」

全員が落ち着くまでしばらくお待ち下さい。

「一夏も分かっているとと思うけど、〈白式〉の最大の弱点は射撃武器が存在しない事だね」

「やっぱそつだよなあ、はあ」

冷静になったシャルロットの指摘に一夏は肩を落とす。

「一夏とく白式>の相性が良いのも大きいが、一夏の類稀なる技量のお陰で補われてはいるもののやはりその点が大きいかな」

「そうですね、そもそも刀1本であそこまで戦える事の方がおかしいですわ。それだけ一夏さんの技量が並外れている証拠ですけれど」

「でもやっぱり限界はあるんだよね。ミシエルやシャルロットみたいにバカス力撃たれ続けると守るか逃げるしか出来なくなるし」

仲間内で模擬戦を重ねた結果、現在の勝率トップはミシエルですぐ下にシャルロットと一夏が続く。一夏は2人に黒星をつけられていた。

それ以降は鈴とセシリアがどっこいどっこいで最下位は筈だが、これは彼女がただ1人専用機を持たないのが大きな原因である。

ミシエルとシャルロットのISは、その膨大な拡張領域に収められた多数の兵装を生かした柔軟な戦術と継続火力が特徴だ。特にミシエルの場合はシャルロットのIS以上に過激な物が揃っているし、接近されてもAICという最強の盾がある。シールド無効化という最強の『矛』もこればかりは敵わない。

次々武器を交換しての絶え間無い射撃が可能な為、弾丸を弾ける一夏といえどその処理能力を上回っては遠距離から一方的に捌られる

のが落ちだった。一夏が捌ける弾幕の量はいいとこセシリアレベルが限界である（普通ならそれさえもかなり驚異的なのだが）。

「せめて投げナイフ的な武器が欲しいんだよな。あれなら土方さんにも教わったから。でも武器追加したくても俺のISだと拡張領域がもう一杯だし」

「やっぱりそれが最大のネックよね……………」

「……………どうせならその場で仲間の銃を借りて使ってみるのはどうだ？」

所有者が使用許可を出せば他の人間でも使えるようになる。非効率なので最後の手段とも言えるが、他に手段は思い浮かばない。

「とにかくまずは実際に使ってみて身体で覚えるのが1番手っ取り早い……………」

そう言ってミシェルが展開したのは複合型アサルトライフル<ケルベロス>。ブルパップ型のライフルの銃身下部にマガジン装填式のセミオートカノンを装着し、更に2つ並んだ砲口の下から銃剣を生やした、『3つ首犬』の名の通り3種類の武器としての機能を持つ兵装だ。

「……………まずはこれを撃ってみろ。モードはライフルでセミ

オートに設定してある」

「分かった。でもく白式>ってFCS（射撃管制装置）も積んでないんだよな」

「ならとにかく撃って弾道の癖を読み取りながら自分の勘で修正していくしかないな……」

「じゃあ行くぞ」

やや離れた位置に表示されたターゲットに向け、一夏はライフルを構えた。

「もっと脇を締めて、左手はカノン砲のマガジンに添える感じで引きつけるしたようにした方が安定しやすい……片目じゃなく、両目でサイトを覗きこめ。片目では遠近感が偏って逆に照準がずれる。引き金はゆっくりと、切れそうな紐をそつと引っ張るような感じで絞るんだ」

言われた通りに構えを修正しながら、こんな感じかなと考えた一夏は少しづつ心無し慎重に指を曲げた。

耳元で響いた火薬の炸裂音は、記憶の中の銃声よりも強烈だった。IS用の銃器は歩兵の持つ拳銃や長物よりもより大口徑で、炸薬量も多いからだ。

ターゲットには一夏が狙った中心部よりも斜め上に着弾した事を知

らせていた。続けざまにマガジンに装填されている分が切れるまで射撃を続ける。

「うん、良い感じだね。FCSの補助も無しに初めて撃った割にはまあまあ纏まったと思うよ」

「……音の割に意外と反動が無いんだな。ちょっとビックリしたよ」

「射撃の反動は大体はISが自動的に相殺してくれるからね。サイズの割に意外と狙いやすいもんよ」

「……ま、何事も慣れだがな。正しい構えを身体で覚えて、数をこなしてけばもっと速く、もっと正確に撃てるようになる」

「そうそう、『本物』を撃ち慣れてるだけあってミシエルなんて凄いだから！」

「そう聞かされてはこの目で確かめさせてもらわなくては気が済みませんわね」

セシリアに煽られ、今度はミシエルが装填し直したくセルベロス>を構えて前に出る。

横並びに複数のターゲットが展開された。と同時にフルオートかと思えるような単発連射で端から端に薙ぎ払う。

ターゲット1つにつき撃ち込んだのは1発。全弾、ほぼ真ん中に命

中していた。おー、と一夏達の感嘆の声が上がる。

「・・・・・・ターゲット毎に狙うよりも、標的を順番になぞって照準が重なった瞬間に撃つのがコツだ」

最初に銃器の扱いを仕込んでくれた某武器商人の護衛のリーダーで元デルタフォース（アメリカ陸軍特殊部隊）上がりな傭兵のありがたい教えである。

その時、急にアリーナがざわめきだした。視線を感じる。敵意と戦意を孕んだ視線が。

ドイツの第3世代機、＜シュヴァルツエア・レーゲン＞を身に纏ったラウラ・ボーデヴィツヒ。

片方だけの赤い瞳が一夏を射抜いて離さない。よく見てみると、新雪のように真っ白な二の腕に幾条かの蚯蚓腫れや青い痣が残っているのに気づいただろう。

「——おい」

「・・・・・・なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。なら話は早い。今朝の続きだ」

「――私と、戦え」

「夏の答えは、

「……………いいぜ。今度こそ決着をつけてやる」

2 - 4 : ガールズトーク

いいぜ、決着をつけてやる――

その瞬間。一夏とラウラ、双方が浮かべる表情はとても似通ったものに変貌していた。

すなわち、獲物を前にした獣の浮かべる凶暴な笑み。

「お、おい一夏!？」

「皆は下がっててくれ。巻き込まれないようにな」

一夏の右手には既に展開された<雪片式型>が握られている。ラウラも似たようなもので、身の丈ほどもある大型のレールカノンを右肩に載せ、真っ直ぐ一夏に向けていた。

周囲に広がる緊迫した雰囲気、他にアリーナに居る生徒達が睨み合う2人の方を一斉に見た。明らかに危険な空気にどうすればいいのか分からず、顔を見合わせて不安げに立ち尽くしている。

……そんな周囲の様子を見て、溜息を吐きつつ動く存在が1人だけ居た。

「・・・・・・・・ストップだ、2人共」

「ミシエル？」

「何のつもりだ、ミシエル・デュノア」

「・・・・・・・・時と場所を考える。この場に居る全員がISを持っている訳じゃないんだ。巻き添えを食って何かあったらどうする。ラウラも軍人なら、コラテラル・ダメージ（付随的被害）を考慮したらどうだ」

「む・・・・・・・・」

一瞬だけ自分達の間割り込んできたミシエルを強く睨んだラウラだったが、ふんと鼻を鳴らすとISの装着を解除する。

「ふん、今日は退こう。また次の機会に決着をつけさせてもらっぞ」

「俺は何時でも良いぜ」

言い返した一夏に何処か満足げな獏犬の笑みを向けて、ラウラは立ち去る。

バトる気満々な友人の様子に、2度目の溜息を漏らしながらミシエルは振り向くとおもむろに一夏の額にデコピンをお見舞いした。

バチン！という空気が破裂したような炸裂音は最早デコピンのレベルじゃない気がするが。いきなりの友人の暴挙に不意を突かれた一夏は悶絶中。

「……………一夏も、あっさり挑発に乗るんじゃない。周囲の事も考えて行動するべきだ」

「め、面目ない。それにしてもあー痛え」

「当たり前だ……………痛くしたんだから、な」

男同士のやり取りを見ている内に調子を取り戻した少女達も口々に喋り出す。

「何を考えているのだまったく。そう簡単に刀を抜いてやり合おうとしてどうするのだ」

「そーよ一夏。アンタってばしばらく見ない内にまた喧嘩っ早くないっつてない？」

「しかし相手も相手ですわ。転校してからこの方一夏さんを敵視してばかりで、何を考えていますのやら」

「うーん、やっぱりそう簡単には直らないかあ……………」

1人シャルロットだけが、ラウラの事を心配そうに気遣うのだった。

アリーナでの訓練が終わった後。

箒と鈴は千冬に呼び出しを受けて寮長室に引きずり込まれていた。早くも険やかな気配を放って仁王立ちしている千冬の姿に箒の額には冷や汗が浮かび、鈴に至ってはカチンコチンに固まってしまっている。

それだけ2人にとって今の千冬は恐ろしいのだ。なにせ目の前にあらせられるは世界最強の乙女である。

それ以前に一夏の姉というだけで本能レベルで頭が上がらない。というか、2人にとってはそっちの方が重要だった。

「貴様ら2人を呼びだした理由は理解できているな？」

「……一夏の事、ですね」

重々しい雰囲気纏って千冬は頷きを返す。

四角いテーブルを挟んで向かい合い、千冬はそのテーブルに両肘を突いて組んだ手で口元を隠す格好の一方彼女に真正面から見据えられる筈と鈴はとても肩身が狭そうだ。

何だか雰囲気は往年の刑事ドラマの取り調べっぽくなってきた。一夏がこの場に居れば後は古いスタンドライトとカツ丼さえあれば完璧だな、などと考えたに違いない。でもって姉に内心を読み取られて引つ叩かれる所までが容易に筈と鈴には想像出来た。

「何か余計な事を考えてないか？」

「……いいいいえ別に!？」

何時の間に読心術スキルなんて身に付けたんだろうこの人。『千冬さんなら仕方ない』の一言で片づけれそうな辺りがまた恐ろしい。

「単刀直入に聞くぞ——貴様ら2人、既に一夏とは肉体関係に至っていると見て間違いないな？」

「ち、ちちちちちふゆひゃん!？」

「にやにやにやにや、はにやー!？」

直球ド真ん中な発言に箒と鈴の言語機能がエラーを起こす。

何を今更、と言いたげに首を振りながら千冬は椅子の背に身体を預けた。

「2日連続で一夏の部屋から出されたシートに残された血痕・精液その他諸々の痕跡を見れば誰でも理解できるに決まっているだろうが」

「「あうあうあうあうあうあうあう」

熱病患者の様に真つ赤な顔でうわ言を繰り返すようになってしまった2人の様子に千冬は大きく息を吐き出した。

千冬の顔からは不純異性交遊に対する怒りなどは感じられず、むしろ安堵の念さえ見え隠れしているのだが、パニックした2人はまだ気付いていない。

「落ち着かんか2人共。別に取って食おうなどとは考えていない。

ただお前達の口から直接確認したいだけだ」

落ち着いた物腰の千冬の言葉に、少しづつ箒と鈴の思考能力が回復していく。

やがてチラチラとお互いを見交わしてから、どもりつつも口を開いた。

「そ、その通りです……我々2人共、一夏とは恋人同士です」

「あ、あの、あのですね千冬さん、一夏が悪いんじゃないんですよ？一夏は本当は箒の方を選ぼうとしたのに私が割り込んだんじゃないんです！というか、とにかく一夏と箒は悪くないんです！」

「何を言う鈴。そちらも一緒に構わないと決めたのは私の方だ。鈴も一夏も悪くはないぞ」

「私が聞きたいのは別にそういう事ではない。さっきも言っただろう、私はただ『確認がしたいだけ』だと。勿論、教師として色々と風紀を乱している事にも注意しなければならぬ立場なのも分かっているがな」

千冬は何処からともなく急須と人数分の湯呑みを取り出すと、順繰りに緑茶を注いでいった。

緊張の余り喉が渴いていた箒と鈴は、差し出された熱いお茶をあり

がたく頂く事にした。渋みの中に隠れるのかな甘みが硬化しかけていた心を解してくれる。

2人がホツと安堵の吐息を漏らした所で千冬は続ける。

「どちらかといえば、今回お前達を呼んだのは教師としてではなくあの鈍いにもほどがあるあの馬鹿の姉として話を聞きたかったからだ。箒は実際にその現場に出くわしたからまだ分かっていたとはいえ、まさか鈴まであの朴念仁が捕まえてしまったのを信じかねてな」

IS学園で再会する以前から既に箒と鈴が一夏に抱いていた想いはとつくの昔に千冬も気付いていた。正確には気付いていないのは想いを向けられていた一夏本人だけであり周囲には丸分かりだったりしたのだが。

当初の学生寮の部屋の組み合わせで弟と箒が同室になったのに関しては、完全に単なる偶然だった。

本来もう1人の男性であるミシエルと同じ部屋にしてしかるべき筈だったのだが、その辺りは出来る限り自国の代表候補生兼男性IS操縦者に対し他の女子からの干渉を押さえたいフランス政府（&当人達）の強い要請を受け、夫婦揃って同じ部屋にされた経緯がある。

千冬が組み合わせに反対しなかったのは弟の相手が自分の友人の妹で幼馴染同士だったから、というのもある。弟への悪戯心も少しはあったし、弟を好いてくれている友人の妹への餞別、なんて考えもあったのは否定できない。

元よりその組み合わせは一夏の入学によって色々と学園の運営が混乱してしまい、一夏と箒の同居はそれが収束し学生寮の部屋の調整が完了するまでの一時的なものだというのはその時点で判明していた。

だから千冬はこうも考えてしまっていたのだ——それが自分の最大の誤算と気付かないまま。

あの弟の事だ、たかが数週間同居したって箒には悪いが、彼女の気持ちに気付く事はないだろう、と。

箒自身、千冬から見ると中々自分の感情を表に出さず怒って誤魔化すタイプのままだと思い込んでいたせいもある。

……まさか1週間ぐらいで色々段階をすつとばす関係に至るとは思ってもよらなかった。

げに恐ろしきは思春期の性のへ目覚めである。弟か、それとも幼馴染の方からなのかは千冬には分からなかったが、この分だとどうやらきっかけは箒の方かららしい。

そもその発端がどこぞのバカップル通り越した熱々夫婦のイチヤイチヤに当てられたと知ったら頭を抱えるだろう。

実際そうだった。

「きっかけは、ですね——」

一夏と再会した初っ端から胸を揉まれ、それから日頃デユノア夫妻のアレなスキンシップとか夫婦漫才とか見ている内に羨ましくてムクムクと衝動に駆られて結果自分から一夏に迫ったという一連の経緯を聞いて、千冬は頭痛に襲われた。

これは果たして誰の責任なのやら。ラッキースケベに定評のある弟なのか、場を弁えずベツタリしているデユノア夫婦なのか、暴走して肉体関係を迫った篤なのか、そもそも一夏と篤を同室になったのを放置した自分が悪いのか。

多分全てが原因だな、などと責任感に肩を落としてつつ今度は鈴の方を見る。次は貴様の番だ、と目が口ほどに言っていた。

「わ、私の方は——」

一夏との再会から約束に関するやり取り、一夏の告白と賭けとその結果までを順番に説明する鈴。時折篤も加わって2人纏めて一夏の恋人になるまでの経緯を説明し終える。

「で、ずっと傍に居ながら自分達の気持ちに気付こうとしなかったその代償の代わりに2人纏めて自分達の面倒を見ると弟に迫ったと、そういう事だな」

「「は、はい」」

「……何と言えば良いのやら。半ば無理やり責任を取らされた弟を哀れむべきなのか、無理やり責任を取らせた貴様らに怒れはいいのか、そんな手段を取らせるまで女を追い詰めておきながら言われるまで気付こうとしなかったあの馬鹿をぶん殴るべきなのか、よく分からんぞ」

「で、ですから私が！」

「ううん私が！」

「やかましい。経緯は分かった。それがどうあれ、3人で上手くやっていけるのも見ていれば分かる。だが周囲からの目を考える。今はまだ落ち着いているし学園内での問題で済んでいるが、今後はどうするつもりだ？特に凰、お前は中国の代表候補生だろうが。もし国に戻される事になった場合はどうするつもりだ貴様は？」

一夏と鈴の関係が世界に広まれば、下手をすると国際問題に発展しかねない。

本人達にそんな思惑は無くとも、中国以外の国からしてみれば状況だけなら『世界に2人しか存在しない男性IS操縦者の片割れを中

国が女を使つて誘惑した』ように見えてもおかしくないのだ。

既に同じ所属国の相手と結婚しているミシェルと違い所属国があやふやな一夏は、最悪彼を巡つて第3次世界大戦も勃発しかねない立場にある。今の一夏はそれだけの重要人物なのだ。

ちなみに箒の場合は、本人は嫌がるだろうが今度ばかりは『あの篠ノ之束の実の妹である事が大きなメリットだ。織斑一夏の恋人（の1人）が彼女となると世界認定の『天災』たる箒の姉を刺激しかねないのだから、下手に手を出す訳にもいなくなる（逆に束の反応を見ようと敢えて手を出してくる可能性も無くはないが）。

「その時は、その」

「……まあ無理に答えなくても今は構わない。お前の場合はその可能性がある事だけでも肝に銘じておけ。弟が原因で戦争が始められても迷惑だからな」

「はい、分かりました……………」

鋭い眼差しで告げられた千冬の指摘に、哀れになるぐらい鈴の雰囲気気が暗くなってしまった。ツインテールもいつもよりしょんぼりと元気が無く、隣の箒が心配そうにそんな鈴の様子を見ている。

「……………そもそも私も責められてしかるべきなのです。せっかく一夏が自分から決心してくれたというのに、それを踏みにじるような決定を下したのはこの私なのですから」

こちらも肩を落として申し訳なさ一杯の表情を見せたが、それを千冬は鼻で笑ってみせた。

「ふん、アイツがもつとしつかりと女からの好意を自覚しないからこういう事になったんだ。いい薬になっただろうし、本気で嫌がってる訳でもないんだから気にするな」

「しかし！」

「だから一夏は筈の事を選ぶって心に決めてたのに、そこに割り込んできた私が悪いんだってば！」

「お前もだ、凰。揃いも揃って自分の責任にしようとするんじゃない。限度を超えると茶番にしか見えなくなるぞ」

千冬は自分の分の湯呑みから一口啜ってから表情を切り替えた。大人の顔から1人の姉へ。鋭利な雰囲気と顔立ちが緩み、僅かだが千冬の口元には笑みが浮かぶ。

「だが2人一緒というのは斜め上の展開だったが、私としてはお前達が一夏と結ばれて嬉しいと思っているよ」

いきなりコロツと変わった千冬の様子に2人はついていけず戸惑う。むしろ千冬の方が心外そうに眉を動かした。

「何だその顔は？祝福したのがそんなに意外か？」

「えっとその、もう少しアレコレ怒られるかなーなんて思っちゃったりしてたんですけど・・・・・・・・」

「確かに言いたい事は他にも色々あったが、お前達2人が一夏と結ばれてくれて喜んでいるのは紛れもない事実だぞ？昔からお前達2人があの馬鹿相手にやきもきしているのをずっと見てきたからな。それがついに実つたとなれば祝福したくもなるさ」

「しかし、流石に2人一緒となると認められないのも覚悟していましたが・・・・・・・・」

「私がそんなに小さい器の人間だとも思っていたのか？それは心外だな」

「そ、そんなつもりはありません！」

「あのなあ、こう見えても私はお前達を応援していたんだぞ？教師からの呼び出しも忘れてシケこまれては流石に看過できないが、節度を弁えさえすれば見逃してやっても構わないと考えているし」

悪戯っぽい微笑みに気を取られ、箒と鈴は空返事しか返せない。

何というか、2人にとっての織斑千冬像は鬼軍曹並みに厳しいけど実はススコンな姉御肌な存在だというイメージが強いせいで、こんな風に恋愛話を楽しむ姿はとても意外だった。

「さっきも言ったかもしれないが、一夏の相手がお前達であって私は安心しているんだ。お前達なら安心してアイツを任せられるし、お前達も一夏の事をきつと守ってくれると信じられるからな」

「それはやはり、一夏がISを動かせる事と関係が？」

「その通りだ。知つての通りこの学園には世界中から留学生がやって来ている。こんな事は言いたくないが、もし国の命令を受けた他の生徒共が一夏目当てに色仕掛けを仕掛けてきた場合の対処に頭を悩ませていた所だ」

教師の仕事がある以上四六時中弟を見張っておく訳にもいかないのである。

例えば転校してきたばかりのラウラだってドイツ製第3世代型ISのデータ取り以外にも軍の上層部から一夏の籠絡を命ぜられている可能性だってあるのだ。幸いにもラウラの性格からしてそちらを実行する可能性はかなり低そうだが、油断は出来ない。

その点で言えば箒と鈴、2人の場合はまず間違いなくその可能性は無い——2人が本気で一夏を愛しているのを、千冬はずっと前から知っていたから。

誰かからの命令で一夏を籠絡しようとする振る舞える程、2人が器用な性格の持ち主でない事もよく分かっている。

そして一夏に打算を抱えてすり寄ってくるような他の女を、この2

人が一夏に近づかせる筈が無い。彼女達なら一夏を裏切らない。そういう意味で、千冬は2人が信頼できると言ったのだ。

どこぞの馬の骨とも分らないポツと出の女が相手だったら『弟はやらん』などと言ってやる所なのだが、この2人なら任せてもいい。千冬はそう思う。

それにもう2人は一夏とイく所まで行ってしまったんだし、そこまで深い関係になっているのに妨害するなんて野暮な真似をする気はなく。

「一夏の事を頼むぞ。女に対してはまだまだ鈍いままだろうからな。お前達が睨みを効かせておいてくれれば大いに助かる」

「勿論です！そのような矢から、一夏には指1本触れさせません！」

「それぐらい当たったり前よ！いざって時はぶった切ってからたんまり衝撃砲をお見舞いしてやるわ！」

「殺すなよ？どの手の者か尋問しなければならんだからな」

もし他にこの光景を見ている人間が居れば背筋に寒気の1つでも感じた事だろう。それぐらい怖い笑みを3人は浮かべている。

「……今後一夏に近づく女は命がけになりそうだ。

「で、1つ聞きたいんだが」

「何でしょうか千冬さん」

箒と鈴はもう1口お茶を口に含む。

「一夏に抱かれた時はどんな感じだったんだ？」

そして同時に噴いた。予めその反応を予期していた千冬はひよいとお茶の毒霧攻撃を回避。

「な、ななななな!？」

「にやにやにやにやうにやー!？」

「そこまで慌てなくてもいいだろう? 弟の夜の『性』活を気にして何が悪い」

「だ、だ、だからってですねえ!？」

「にや、にや、にやにいきなり聞くんですにやー!？」

「何ってナニだが? それに私もまだ処女なんでな、後学の為に『経験者』に体験談を聞いておこうと思っただけさ」

そんな事あっさりカミングアウトしちゃって良いんですかと突っ込

みたいけど、更にカオスになりそうで突っ込めない。

やっぱり一夏の姉なだけあるわこの人、と今更ながら感じてしまふ。
どうしてこうあつさり言にくい事を素で聞いてくるかなあ！？

ここまでサバサバ振る舞われるといつそ清々しい。

「それでやはり痛いのか？最後に一夏と風呂に入っただのは小学生ぐらいの頃に一緒に入ってたきりなんだが、アイツの×××はどれくらい成長して——」

「そ、それは、普段はこれぐらいなんですが、おつきになった時はこれぐらいの大きさまで……」

「で、ですね、一夏が入っちゃった時はこう、（ぴー）で（ぴー）で（ぴーぴーぴー）な感じで——」

「……成長したなアイツも。おつとそうだ、篠ノ之には渡す物があつたんだつた」

千冬がテーブルに置いて箒の方に差し出したのはファンシーなウサギの模様が縫いこまれた風呂敷包み。

「東からだ。お前にぜひ受け取って欲しいそうだ」

「姉さんから、ですか……」

行方不明の姉からの贈り物と聞かされて嫌な予感に開けたくない思いが半分、怖いもの見たさが半分。

しばし悩んだ後、中身を見てみる事にする。入っていたのは何だかメカメカしい四角い箱。ゴクリと唾を呑みこんでから、意を決して蓋を開けてみる。

「これは……………」

「…………あの馬鹿め」

「えーっと、これって」

「『『赤飯、だな（よね）』』」

何で知ってるんだ、と筈は世界の何処かに居る姉をぶん殴りたくなつた。

ここ最近のシャルロットの日課は、食事の時間に食堂に居るであらうラウラの姿を探す事だった。

彼女が転校してきてからは最低でも1日に1回、ラウラと食事を共にするようにしている。

大概彼女は食事を1人で取っている。食堂が混雑している時は逆に人で埋まっていない空間を探すのがコツだ。未だ彼女に自分とミシエル以外の友人が出来ていない証左なので少し悲しくなるが。

「今日も来たのか。ミシエルの事は放っておいていいのか？」

「そのミシエル方頼まれてるんだよ。ずっと1人だけで食べる食事

なんてつまらないでしょ？」

今日のラウラの夕食はハンバーグステーキセット。付け合わせのロールパンにバターを塗りつけるラウラを見ながら、昼間の事を思い出してシャルロットは言った。

「——ねえラウラ。何時まで一夏の事を目の敵にし続けるの？ 織斑先生との事を気にしてるんだったら、あの原因は一夏を誘拐しようとした人達が悪いんであって一夏自身が悪いんじゃないんだよ？」

第2回モンド・グロッソにおける一夏誘拐事件に関しては当事者の1人であるミシェルから聞かされた程度の事しかシャルロットは知らない。

しかしそれを抜きにしても、ラウラと知り合った当初から彼女が孕んでいた一夏への憎悪は何処からどう見ても逆恨み以外にしか思えなかった。

だからそれを何とかしたい。ラウラも一夏や彼を取り巻く少女達と仲良くして欲しい。だって、どちらもシャルロットとミシェルにとってかけがえの無い友人だから。

だが、ラウラの返答は意外な物だった。

「何を言っている。これまではともかく、今の私は織斑一夏に対しそのような敵愾心など持つてはいないぞ？」

「へっ？」

予想外の言葉にしばし思考が停止する。それに気付いた風もなくラウラは続ける。

「確かにあの男は教官の偉業を阻んでくれた許されざる存在だ。そのような教官の手を煩わせるような軟弱者を認めるつもりは無かった——実際に会うまではな」

「そ、そう」

「奴はこの学園に居るこれまでの日々をぬくぬくと過ごしてきたISをファクションが何かかと勘違いしているような程度の低い連中とは違う。自分達の学んでいる事が『暴力』と『戦争』に関わる物事であると理解し、尚且つひたすら自分の力を磨く事に余念の無い男だ。強いて言えば、ミシエルに近い人間だな」

ラウラの言う通り、一夏もミシエルも日々トレーニングを怠らず戦いに必要なら自分でやれる範囲で何だつてする人間だとシャルロットも思ってしまう。

「そして何より戦いの技術を『実戦』に用いるのに躊躇いが無い。拳を交えて分かったが、あの男は習得した戦闘技術を実際に『暴力』として用いた事が多々あるのだろっ。そうやって実戦に自らの身を置いてより己を研ぎ澄ませてきたに違いない」

ドンピシャである。そこまで言っつてパンを噛み千切りながら、アリーナで一夏と交わしたのと同じ獲物を前にした獣のように凶暴な笑みをラウラは浮かべる。

「このような平和ボケした国で教官以外にそのような人間に出会えるとは思っていなかったが……上命令でこんな所に編入されたかいもあるというものだ」

ここまで来ると、シャルロットにもラウラの内心が分かってきた。

つまり彼女は自分と同じだけの力量を持つ強者に出会えて嬉しいのである。まるでミシエルが教えてくれた漫画に出てくる強さを極める為に誰彼構わず戦いを吹っ掛ける武闘家だ。

こう言うのを何て言うんだっけ？ああそうだ、バトルジャンキーだ。

どっちかっていうとミシエルも似たり寄ったりな気がする。一夏も決闘申し込まれた時あっさりと売られた喧嘩買っちゃってたしなあ。

「ああ、楽しみだなあ。早くあの男と戦ってみたいものだ」

恍惚と、まるで遊園地に行くのを楽しみにしている子供みたいに楽しそうな声で呟いたラウラに、シャルロットは冷や汗を流した。

果たしてこれで良いのか、悪いのやら。

2 - 5 : B l a c k v s W h i t e : 1 s t R o u n d

ようやくこの時が来た。

長かった、と思う。意外と早かった、気もする。

アリーナの中心部、10m程の距離を置いて睨み合う白と黒の機影。外気に曝け出される互いの瞳は、相手を捉えて離さない。動かない。

「遂にこの時が来たな」

「ああ……待ち侘びたぜ」

「ふん、それはこちらのセリフだ」

決闘の立会人として集められたのは常に一夏と行動を共にしているミシエル達に加え、織斑千冬と山田先生もまた相対し合う2人を静かに見つめている。

一夏は<雪片式型>を下段に構え俊足の踏み込みを何時でも発動できるよう足に力を溜めこむ。それだけで一夏の放つ気配はその手に握る刃もかくやな鋭さを孕んでいた。

ラウラは両腕からプラズマ手刀を展開。飛び道具を有しながら敢えて一夏の得意―というよりもISの都合上それしか出来ない―である接近戦で相手をしてやろう、という無言の挑発が滲み出ている。

「――織斑一夏、参るぜ」

「何処からでもかかってこい。このラウラ・ボーデヴィツヒ、逃げも隠れもしないぞ」

それだけで十分。同時、2人の口元を微笑みが過ぎった。

――笑みとは本来攻撃的なものであり、獣が牙を剥く行為が原点である。

「いぞー!」

「尋常に!」

「勝負!」!」「」

白と黒の弾丸が激突した。

――観客達の会話――

「えらいノリノリですわねあのお2人は・・・・・・・・」

「っていうか一夏はともかく、相手の方もあんな口上何処で知ったのかしら？」

「・・・・・・・・（多分クラリツサさんだろうなあ）」↑心当たりがあるけど実は間違ってる人

「・・・・・・・・」↑教官の生まれ故郷について詳しいからとしょっちゅう話を聞かれた&海外独特の日本の勘違いっぷりに耐えかねて知ってる範囲で侍とか武士道とか色々語ってしまった奴

一瞬の交錯。それだけで2人は相手の技量を悟り直す。

「（いっぺん生身で戦って分かってたけど!）」

「（1度拳を交えて理解していたつもりだが）」

「（やっぱリコイツ（この男）、できる!）」

擦れ違ってからすぐさま反転し、互いに相手へと斬り込む。

ラウラのプラズマ手刀は超音波で主力戦車の装甲すら溶断するが、代わりに<雪片式型>の様な実体刀を受け止めて防御する事は出来ない。それは一夏の方も同じ条件なの弾いたり受け止めたりしようとしてもそのまますり抜けてしまうのだ。

そもそも普通は大抵の金属相手だと触れた途端に蒸発させられるのだが、<雪片式型>に限ってはどんな素材に出来ているのか焦げ跡1つつかないのである。

なので2人は相手の攻撃を受けるのではなく避ける事に専念する。

一夏の剣捌きが緩急織り交ぜた一陣の風なら、ラウラの2刀流は竜巻の如く激しさ。プラズマ手刀そのものに重さはほぼ存在しない為身体の動きが鈍る事はない。それを生かした連続攻撃。

負けじと一夏も怒涛の斬撃を繰り出す。突き、そこから刀を傾け斬り払い、決して大振りにせずコンパクトな斬撃で隙を作らない。攻撃の手を緩めない。

ラウラがバックステップで距離を取ろうとした。そうはさせまいと一夏は大きく踏み込み、シールドごとラウラも貫かんとする勢いで

裂帛の突きを――

「っ、ヤベエっ！」

逆に自分からラウラから距離を取った。まだ完全に重心を前に載せる直前だったから間に合ったが、もしあのまま突っ込んでいたら、

「フン、やはり停止結界に気付いていたか」

「ああ、しっかりとミシエルから話は聞いてたからな」

ラウラは右手を突き出して悠然と仁王立ちしていた。

AIC、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。ラウラは『停止結界』と呼んでいるらしいそれは、対象を任意に停止させられるという無敵の盾。

ミシエルのISには<シールド・オブ・アイギス>としてビットに搭載されている存在だが、ラウラの場合は<シュヴァルツエア・レーゲン>の腕部に内蔵されている。

まずは敵を知る事が戦いの基本中の基本。この日の為にラウラをよく知るミシエルから話を聞いておいた。

「お前の停止結界の弱点も聞いてるぜ？エネルギー兵器や操縦者が

反応し切れない攻撃には効果が無いんだってな」

「それがどうした？こちらも貴様のISの弱点は聞かせてもらっているぞ。貴様のISには、その刀1本しか武装が無い事だとな！」

アリーナで宣戦布告されたあの日、一夏に向けてきたのと同じ大型のレールカノンがラウラの右肩に展開される。

「吹き飛ばし！」

チャージ、発射、着弾。避けた一夏の背後から衝撃波が砂交じりの追いかけてきた。連射速度は遅いが、その見た目に相応しい威力を持っているようだ。

「逃げ回るだけか？ならば精々無様に這いずり回れ！」

「ご生憎様、やられっ放しは嫌いなんだよ！」

弾幕を張るタイプでなければなにかなる。

アリーナの壁沿いに砲撃から逃げ続けていた一夏は方向転換し、真正面からラウラへの元へ飛んだ。

それを逃すラウラではない。真っ直ぐ一夏へレールカノンを照準し――発射。直撃コースだとラウラは確信する。

だが当たらなかった。砲口から大口径の砲弾が飛び出すと同時に、斜め前へと軌道変更。瞬きする間よりも速く飛来した砲弾がすぐ横を通過し、衝撃波に＜白式＞装甲が震えた。

「うおおおおおおおおおおおっ！！」

「小癪な！」

ラウラは更に砲弾を連射。機動予測に加え照準を微妙に下へ向け、直撃狙いから地面への着弾による破片効果と衝撃波で一夏の足を止めようと試みる。

一夏は止まらない。しっかりと砲口の向きと発射のタイミングを見定めた一夏は、踏み込みを加速させる事で着弾の効果範囲外へと逃れ続ける。

既にラウラとの相対距離は＜雪片式型＞の射程までISを用いた踏み込み3回分。瞬時加速を使えば最早零に等しい近さ。これならきつと、一太刀は入れれる筈。

ちよつと待て、と一夏の本能が囁いた。ラウラの顔を見る、ここまです近づかれて慌てている相手が浮かべる表情か？

思い出せ、ラウラの＜シユヴァルツェア・レーゲン＞の基本兵装はAICにプラズマ手刀、レールカノンに――

「甘いな」

両肩部と腰部パーツにも搭載された3対6個の誘導式ワイヤーブレードが広がるように飛び出した。包み込むような軌道を描いて一夏に襲いかかる。

横は塞がれた。後退すればレールカノンの餌食。逆に前に突撃？向こうは迎撃する気満々だ。

「舐めんなあつ！」

一夏は今度こそ跳んだ。扇状に広がるワイヤーブレードの間、ラウラの頭上を空中で一回転しながら飛び越える。直後、一夏の立っていた地点に6個のワイヤーブレードが次々突き刺さった。

ラウラの背後に着地。気配を頼りにく雪片式型の切っ先を反転させると左脇から通して強引に後方へと突き出した。更に並行して大きく身を屈め頭の位置を低くする。

振り返りざまに一夏の首を撥ねる勢いで振り抜かれたプラズマ手刀が一夏の頭部から数cm上を通り過ぎ、実体刀の刃はラウラのISの肩部パーツに一筋の浅い傷跡を刻むに止まった。

すぐさま構えを戻しながら敵と向き合い直す。2人の顔に張り付いているのは、やはり不敵かつ愉しげでさえある獰猛な微笑だった。

「期待通りの強さで嬉しいぞ、織斑一夏」

「そつちも思つた通り結構強いじゃねえか」

「だが——勝つのは俺／私だ!!」

再び接近戦に持ち込む。一夏の振るう刃はより鋭さを増し、ラウラの攻勢はより激しさを増す。生半可な者ではもはや目で追いきれない程の攻撃が交錯し合い、徐々に徐々に相手のシールドをに被害を与え出していた。

一夏の一撃の威力の差をラウラは手数で補う。今の状況はどちらかといえば一夏にとってありがたい状況であつた。これだけ激しくやり合つていれば停止結界を発動させる余裕もないからだ。

しかしここでラウラはプラズマ手刀以外にもワイヤーブレードも接近戦に用い始める。途端に一夏の攻撃の激しさよりもラウラの手数の方が上回るようになった。攻勢に出るよりも回避に専念せざるを得なくなる。

「だーっ、うっとおしいなそれ!そんな武器あるんなら俺にも1つよこせ!」

「欲しいのならばくれてやろう。1つだけと言わず全部貰っていき！」

「そいつは勘弁！」

ワイヤーブレードは個々がまるで空中でのたうち回る蛇のように複雑な機動で一夏に食らいつかんとしてくる。とにかく厄介なのは一旦弾いてもラウラの命を受けてすぐに別の方向から襲いかかってくる点だ。

チクショウ、よくまあ1度にこれだけの数をこんなに上手く操作できるもんだ。こっちは刀しか得物が無いってのによ！本当に羨ましいぞ！

しかもこうして距離を取れば、

「ほら撃ってきやがった！」

回避先を塞ぐように先回りしてくるワイヤーブレード達に足止めされた所で、今度はレールカノンの砲弾が一夏に牙を剥いた。目前に着弾、砲弾が爆発を起こし衝撃波に一夏は吹き飛ばされ、シールドエネルギーを一気に消費する。

両手足を使った四つん這いの体勢で着地する一夏。動きを止めたその瞬間をラウラが見逃す訳もなく、次弾に対ISアーマー用特殊徹甲弾を装填。今の状態なら直撃すれば一撃で勝敗は決する。

針で突き刺されるような一点に集中されたラウラの殺気を感じる。それが風船のように膨れ上がった。回避は間に合わない。だが、唯一の武器で魂でもある刀はこの手に握ったまま。

なら選ぶ手段は決まっている。

レールカノンの砲口から噴き出す強烈なマズルフラッシュ。

不安定な体勢から一夏は刀を下から上へ振り抜いた。その瞬間、両手を強烈な衝撃が襲う。一瞬後一夏の斜め後ろで砲弾が地面にめり込む。

セシリア戦で見せた弾丸切りを一夏は見事に成功してみせたのだ。正確にはく雪片式型>に当てて弾いたのだが結果は変わらない。直撃を免れた一夏は体勢を立て直す。

しかし代償もあった。

「（マズイ、衝撃で腕が――）」

セシリアの時のレーザーとは違い、今回受け止めたのは超音速の大口径砲弾。比較的重い砲弾を超音速で撃ち出されて生じるその威力

は戦車すらも正面から撃破出来てしまうのである。

そんな砲撃をISの手助けがあるとはいえ刀1本腕2本で受け止める方が無茶なのだ。砂の上に立てた木の棒と同じで、物が当たれば棒は折れなくても土台が破壊されてしまうのと同じ原理だった。

電撃でも浴びた様な腕の痺れと鈍痛が一夏の両手から肘までを支配している。大して徹甲弾を受け止めた筈の<雪片式型>には刃こぼれの1つも見受けられない。本気で何で作られているのか気になってきた。

「（あんな砲撃もう1回か2回弾くので精一杯だ。せめて腕が回復するまで時間を稼がねえと！）」

「どうした、もう1度その曲芸を見せてみる！」

ワイヤーブレードと砲撃の多重奏はより激しさを増す。ラウラの攻撃は巧みで、ワイヤーブレードで逃げ道を塞ぎ気を取られればレールカノンが飛んでくる。着弾の衝撃波に動きが鈍ればワイヤーブレードが絡みつくこうとしてくる。

動きを止めるな。動け。動け。動け。動け。動いて足掻いて逃げ続ける。

……いや、それだけじゃダメだ。このままずっと逃げたら追い込まれて負ける。攻めろ！

「（相手の空気を読み取れ。虚を突くんだ）」

狙い目は砲撃の瞬間だ。威力は高いが連射は利かないのは身を以って知った。1発目を避ければ勝機はある。

狙いは砲撃の引き金を引くその瞬間。それは気配で分かる。何度か回避していく内に砲撃する瞬間のタイミングも覚えた。このまま近づけずにジリ貧のままよりは短期決戦に持ち込んだ方が良いだろう。降り注ぐ雨の様に飛んできたワイヤーブレードを回避。地面に着地し、一瞬動きが止まる。

——そうだらウラ、お前ならこれで十分だろ？

鋭さを増す気配。それが最高潮に達した瞬間、一夏は前方へ身を投げた。予想通り放たれた砲弾は僅かに一夏から外れ遙か後方へ消える。瞬時加速発動。世界が遅くなる。

身体を僅かに捻じり、半身になって居合いの型を取ると峰側の刀身の根元に左手を添えて鞘に見立てる。

握力が完全に戻っていないが、<零落白夜>を展開した状態で高速抜刀による切れ味に瞬時加速の速度を上乗せして刃を押しつけるようにして斬れば、間違い無く絶対防御を発動させれる——それが一夏の狙いだ。

勝負は一瞬。絶対に外せない。

「――見えているぞ」

『金色』の瞳と目が合った。

いつの間にか外されていたラウラの左目を覆う眼帯の下、そこに隠れていた月の様に黄金色の光を秘めた瞳がしっかりと一夏を見据えていたのだ。

そう、特別なのはISだけじゃない。ラウラ本人も特別なのを一夏は失念していたのである。

<ヴォーダン・オージェ>。ナノマシンを用いた疑似的なハイパーセンサー。ミシエルの話では常日頃から着けているあの黒い眼帯はリミッター代わりだという。

超高速で真っ直ぐ向かってくる白の弾丸と化した一夏の動きをラウラは完全に把握し、余裕すら漂わせる緩慢な動作―そう一夏からは見えた―で右腕をゆつくりと持ち上げる。不可視の筈の停止結界、そのありとあらゆる物体を空中に縫い止めてしまうエネルギーが右の掌に集まっていく様子が、何故か一夏には感じ取れた。

もう方向転換は間に合わない。左右どちらへ方向を転じても加速が付き過ぎて停止結界の範囲内に飛び込んでしまうだろう。さっきみたいにならなくても、しっかり動きを読まれているんだから絶対に捕まる。

[illegible]

「はあああああああつ！！！」

一夏は投げた。

匙ではなく、＜雪片式型＞を。鞘から刀を抜くまでを居合い同様に、ただし握る手を途中で離す。

結果、全長が1 m半を超える<雪片式型>は切っ先の方をラウラの方に向けて一直線に突き進む。

「小癩なあッ！」

投じられた刀は停止結界に絡め取られラウラには届かなかった。すぐに無手となった一夏の姿を探す。

停止結果を完璧に発動させる為に刀に意識を集中させたのが仇となった。一夏は投擲するとすぐ身を低くしたまま足を止めず、ラウラの意識がく雪片式型>に奪われたその隙を突いて彼女の背後に回り込んでいた。

ラウラが気が付いた時には一夏の両腕は彼女の臍の下をガツシリ捉えていた。腰を出来る限り落としながら後ろから抱きついたので一

夏の顔はISスーツの食い込み激しいラウラの小さなお尻に埋める格好になっているのだが、その時一夏の顔に浮かんだ笑みはその感触を楽しんでの物ではない。

ようやくラウラに一矢報いれる事への、歡喜の笑みだ。

箒の道場に通っていた頃は剣術以外にも無手でも対応出来る様古武術も仕込まれてきたし、誘拐されてからは千冬姉から、加えて山籠りでは稲葉先生や兄弟子からも一緒に習いに訪れていた少女と共に鍛えてもらいました。

更に戦い方の幅を広めようと他の格闘技にも手を出し、不良相手に『テスト』を繰り返す事で実戦に足るレベルまで技を磨いた。この組み技もその1つ。

「どうおりゃあああああ!!!」

そのまま豪快に後方へとぶっこ抜く。ラウラの視界が一瞬で反転、そして後頭部から背中へ突き抜ける衝撃。鍛えられたラウラが反応できない程の高速バックドロップである。

まさかIS同士の戦闘でこんなプロレスの大技が見られるとは思わず啞然となる観客を余所に、ホールドを解くと高々天に伸ばされたラウラの足が地面に落ちるよりも速く今度は右腕を取り、手首と肘を捻じり上げる。

おまけとばかりに関節を極められた腕の根元、右肩を一夏は思い切り踏みつけた。元より腕の3倍の力を持つとされる脚力をISで強

化した上に、踵という人体でも特に硬い骨をそれだけの力で叩きつけるのだ。まともに入れば絶対防御すら発動してもおかしくない。

右肩を踏みつけられる直前、ラウラは自由だった左腕で右肩を庇った。足と肩の間に左腕を割り込ませ、前腕の装甲で踏みつけを防ぐ。装甲が小さくひしゃげ左肘から先が軋み、吸収しきれなかった衝撃が身体を揺さぶった事でねじ曲げられた右腕が悲鳴を上げた。

だが耐える。この程度、訓練で散々してきた痛みだ。肉体の痛みよりも精神の痛みの方が1万倍強烈で苦しい事をラウラは身を以って味わってきた。だから耐えられる。

「私の上から、どけえ！！」

荒々しく足を振り上げ、無防備な一夏の背中を蹴った。思わずバランスを崩してどいてしまう。足を下ろす反動と腹筋を生かして地面から跳ね起きる。

一夏が後ろ回し蹴りを放つ。それをラウラは地面に這いつくばるようにして避けると同時に、その体勢から前後反転して一夏の軸足を払う。足払いというよりは草を刈り取る鎌の様に鋭い変則的な下段回し蹴りだった。

今度は一夏の方が背中から倒れ、ラウラが馬乗りになった。マウントポジションから殴る。殴りまくる。一夏も両腕でガード。金属の拳と装甲が何度もぶつかり合って耳障りな音色を奏でる。

「貴様は、いい加減、私に、やられろっ！」

「誰が、あつさりつ、負けを、認められつか！」

[illegible][illegible]

ラウラの拳を一夏が両方とも受け止め、また殴られまいとそのまま離さない。ラウラが一夏にのしかかる体勢のまま、2人はアリーナ
の中心で睨み合う。

拳はお互い封じられた。しかし武器を失おうとも、拳を封じられようとまだ手段はある。

人間の頭も、十分鈍器に相応しい固さを誇っているのである。

「一夏あああああああああああああああああああああ
ああ!!！」

「ラウラあああああああああああああああああああああああ
あああ！！！」

2人は大きくのけ反って、ほぼ同時に額を相手に叩き込んだ。

ぐわあゝゝゝん……と、誰も聞いた事もない奇妙な打

撃音が空間に響き渡り。

観客が目の当たりにした光景は、額同士が激突した体勢のまま固まつた二人の姿だった。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

5秒経過。動かない。10秒経過。未だ硬直したまま。

やがてどういふ事なのか最初に思い至つた千冬は、やれやれと額に

手を当てながらこう宣言した。

「——終了だ。山田先生、グラウンドに入れるようにして下さい」

「えっと、どういう事ですか……?」

「あの馬鹿ども、2人揃って気絶しています」

「ええええっ!? あっ、本当です!」

ISから送られてくる2人のバイタルが表示された手元の端末を見ながら素っ頓狂な声を上げた山田先生を放って、観客の一部は額をぶつけ合った体勢のまま気絶している2人を黙って見つめ続ける。具体的には箒と鈴とセシリア。

何故かといえば、仲良く意識を失っている一夏とラウラの姿勢が理由である。

「何をしている! 早く目覚めんか一夏!」

「近過ぎよバカー! さっさと起きろー!」

近い。近過ぎる。額と額が完全に密着状態のまま器用に固まっているせいで一夏とラウラの顔は鼻と鼻がしっかり触れ合う位の近さなのである。

顔と顔の距離が近過ぎて、少し離れてしまえば何かもうラウラが一夏を押し倒して唇を奪っているようにしか見えない。マジでキスする5秒前通り越して5mm前ってなものである。どちらかが少しでも身じろぎすれば確実に唇が触れ合うだろう。

そしてこんな時に限ってそれが現実になるのがお約束ってもんである。

「んっ・・・・・・・・」

ラウラが、目を閉じたまま悩ましげな声を漏らした。意識が覚醒しかけなのかほんの僅かに無意識に身体を揺らし。

絶妙なバランスで触れ合っていた額の位置がずれ、化粧つ気が無いにもかかわらず桃のように瑞々しい小さな唇が一夏の口元に触れた。

「な」

「え」

「あ」

「む？」

時が凍る。少女達も凍る。ラウラの意識が完全に覚醒する。ぶちぶ

ちぶつちん、と何かが切れる音をミシエルとシャルロットは確かに聞いた。

文字通り人間兵器として育ってきた少女の視界にまず飛び込んできたのは目を閉じたにつくき男の顔のどアップであつた。

「な、何をするだあー!？」

「はぼつく!？」

顔面にめり込む手加減なしの右ストレート。面白いように地面と平行に飛んでいく一夏の身体。

強制覚醒させられた0・1秒後に今度は永眠させられそうになった一夏は状況が掴めないまま、拳を振り抜いた体勢からして頬の激痛の下手人であろうラウラに抗議をしようとして、

「のわあ!!?」

横合いから飛んできた衝撃砲とレーザーをかるうじて回避。そつちの方を見たら鬼神が3名ばかり居られましたよ？

約1名は自前の機体が無い代わりに真剣を構えている。一体何処から出した。

「分かっている、分かっているのだ。今は単なる事故なのだと・・
・！」

「でもねえ、だからって納得いかないのよ。目の前でそういう事さ
れちゃうとさあ！」

「恨めしいですわ妬めしいですわどうしてわたくしばかりあんな
ポツと出にまで唇を許しているのにどうして私だけ（ry」

「何だかよく分からないけど、不幸だー！」

砲撃爆発悲痛な悲鳴。

「——ねえ、どうする？」

「・・・・・とりあえず、止めに入るぞ」

「やつぱり。だと思ったよ、はあ」

大きな溜息を吐きながら専用のISを展開するデュノア夫婦の背中
は、諦観と心労が滲み出ていたという。

——織斑一夏VSラウラ・ボーデヴィツヒ・第1回対戦成績：両者ノックアウトによる引き分け

2 - 6 : 家庭の事情 / タッグマッチに向けて的一幕

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

翌朝の食堂。朝食を取りに来た一夏とラウラは丁度鉢合わせした。

結局昨日の戦いは両者痛み分けという事になったらしいが、その瞬間の記憶が無い2人からしてみれば納得いかないやら気が済まないやら。

・・・・・・・・だったのだが、ラウラは一夏とキス(?)をしてしまった事から、一夏は(本人には)身に覚えの無い事で箒と鈴とおまけにセシリアに追っかけ回されたお陰でその場ではうやむやになってしまった。

無言で見つめ合う。どう声をかけるべきかどう反応すべきか、今の一夏には思い浮かばない。食堂まで一緒に行動を共にしていたミシエルが『早くどうにかしろ』と目で言っている気がした。

先に動いたのはラウラの方だ。おもむろに距離を詰めると、そつと一夏の制服の端を掴む。小さな手だな、などと一夏は考えてしまう。

彼女は片方だけの紅い瞳でたっぷり一夏を見つめてからこう言った。

「私の『初めて』を奪った責任………取ってくれるんだろうな？」

その瞬間。周囲の音が消えたと後にミシエルは述懐している。

一夏にその記憶は無い。何故ならラウラの言葉の意味を理解した瞬間、意識が飛んでしまっていたからである。

たつぷり十数秒後、背筋に浴びせられる禍々しい気配の集中砲火によつてようやく一夏は我に帰る。とてもぎこちない動きで気配の先を見る。すぐに見なきやよかったと後悔。

手の中の強化プラスチック製の箸と粉碎している箸と鈴に鉄製のフオークをグニャグニャにへし曲げているセシリアがそこには居た。3人をシャルロットが慌てて収めようとしているが効果無し。一夏としては箸と鈴なら分かるけどセシリアまでそこまで怒る辺りが理解できない——やっぱり一夏は女性関係に関してはまだまだ問題点が多そうだ。

さて、ここで動いたのは朝っぱらから面倒は御免なミシエルである。このままじゃ埒が明かないし食堂で暴れられては朝食が取れなくなつてしまいかねない。

「………なあラウラ。その言い方、誰から教えてもらった？」

「クラリッサからだ。日本では男に唇を奪われたらこう言うのだと教えてもらったのだ」

やっぱりあの人が原因か、とミシェルは文字通り頭を抱えた。

「……だからなラウラ、そういった事はもう少し、こつ、上手い表現が思いつかないが……とにかく少し重過ぎる意味合いに取られかねないから、別の言い方にした方が良さぞ」

「そうなのか？だがクラリツサが嘘を言うとは思えんのだが」

「意味は間違っていないんだよね意味は。だからもう少し言うタイミングを考えようねって事なんじゃないかな」

「とりあえず俺はそのクラリツサって人に文句を言ってやりたいよ・
・・・・」

局部的混乱も収まり朝食タイム。フランス人のシャルロットはクロワッサン、ラウラはドイツ人らしくソーセージにライ麦入りパンとお国柄のハッキリした献立である。

その点で言えば大盛りご飯に味噌汁、生卵に塩鮭に焼海苔と純和風な朝食セットを頼んだミシェルは少し変わっているのかもしれないが、まあ好みは人それぞれである。これで納豆があれば完璧なのだがキスの時シャルロットに不快な思いをさせたくないで泣く泣く外してもらった。贅沢な悩みである。

今日の朝食は上のやり取りから分かる通り、いつもの面子にラウラが追加されていた。最初に比べ一夏達に向けられていた敵意混じりのラウラの気配が少し緩んでいる。1度ぶつかり合って心境が変化したのだろうか。

一夏も何となくラウラをもう受け入れてしまっている感じだが、ラウラが同席していて面白くないのは一夏の恋人達＋1だ。鈴と箒とセシリアはしきりに色々言いたげな視線を一夏とラウラに送っている。

それに気付きながらもあえて無視してラウラは続けた。

「昨日はあ……あのような不本意な決着となったが、今度こそ私が勝つ。首を洗って待っている」

「それはこっちのセリフ。次こそ絶対勝ってやる。学年別トーナメントも近いし、いい機会だから決着はそれでつけようぜ」

「そういえば一夏、その事なのだが――」

丁度良いとばかりに筭が話に加わり、昨日の決闘後知らされた内容を告げる。

簡単に説明すると、今回の学年別トーナメントはルールを変更してタッグマッチにするのでサッサと組む相手を見つけておけとの事。最後まで決まらない時は抽選で決めるそう。

一夏は決闘と3人に追いかけて回されたのに疲れてぶっ倒れていたのを知りそびれていたのだった。

「1対1でやれないのは残念だがまあいい。貴様が組んだ相手もろとも叩きのめすまでだ」

コップになみなみと注がれていた牛乳を一飲みしてから自信満々に言い放つラウラであったが、

「そんな事言うのは構わないけど、口の周り牛乳まみれじゃカッコつかないぞ」

「むう、う、うるさい！」

「ダメだよラウラ、制服で牛乳拭いたら染みになっちゃうよ」

顔を赤くして制服の袖で拭い取ろうとしたラウラを隣に座っていたシャルロットが止めると、テーブルのスタンドに重ねて置いてある紙ナプキンを抜き取るとラウラの口元に手を伸ばした。

甲斐甲斐しく優しい手つきで口の周りの汚れを取っていくその様子は何処か手慣れていた。それに釣られたかのように妻とは反対側に収まっていたミシエルも、

「……寝癖も付いているな。ラウラも女の子ならば、もう少し髪型に気を使うべきだ」

「寝癖程度で死にはせん。私としてはいい加減お前位ミシエルの長さまで刈り落としたいのだが、クラリツサ達に強く止められていてな」

ミシエルの髪型はクルーカットより若干長い程度。髪型もまたミシエルが軍人か傭兵か何かに間違えられやすい一因なのかもしれない。

「それはちょっとやり過ぎではないか………?」

「いやあ、流石に女の子でその髪型は問題あると思うわよ？」

これには一夏絡みでラウラを良く思わない篤や鈴も同じ女としては止めざるをえない。もったいないではないか、自分達でも羨ましいと思ってしまう位綺麗な髪なのに。

「……………ほら、動くな」

「むう、くすぐりたいぞ。だがやはりミシエルに髪を梳いてもらうのは気持ちが良いな」

ミシエルの手櫛がラウラの髪を丁寧に整えていく。何度も擦りむけて固く太くなった指でありながら手つきはとても繊細で、指の間から銀そのものの糸にしたような美しい髪がこぼれ落ちる。

目を細めてミシエルに触られるがままで居るラウラの様子は、まるで猫のようだ。思わず一夏達まで口元を緩めてしまう。

「ミシエルさん、何だか手慣れていらっしやいますわね」

「……………シャルロット相手にこうしてやる時も多いからな」

「合同演習の時にラウラ達と一緒にご飯とか食べる時もよくしてあげたりしてたしね。ラウラってば髪とかオシャレとか無頓着過ぎるんだもん」

演習時の高速機動の際に髪型が乱れても指摘されるまでほったらかしなんだとか。その度に部隊の部下達だったリミシエルやシャルロットに整えてもらっていたりする。

「それにしても、そうしてるのを見るとなんか親子みたいね。ちつとも似てないけど」

「あー確かにそれっぽいな。シャルロットもどっちゃって言うって母性溢れてるし、ミシエルも頑固親父って雰囲気だし」

そう言われてきょとした表情を浮かべたのはラウラ。

「……本物の親子というのはこんな事をするのか？私は優秀な遺伝子を元に人工子宮から生み出されてからこの方、教官達に育てられてきたからそういった『家族』についてはよく知らないのだが」

一気に空気が凍りついた。食事の場であつさとそんな過去を何でもない様に――実際ラウラは特に考えて言っただけでもない――告白されて、「へえそれで」と流せるような一夏達ではなく、揃いも揃って非常に気まずそうな顔で視線を巡らせている。

ラウラの出生を大体は本人から聞かされていたデュノア夫妻はいきなり爆発した地雷にどうしようといった様子でこちらも互いの顔を見合わせてから、話題転換を試みる。

「そ、そういえば一夏のお父さんはお母さんはどんな人？一夏や織斑先生ってどっち似なのかな？」

「――俺と千冬姉、捨て子だから」

どうやら逃げた先もトラップ地帯だったようだ。更に重苦しさをが増す空気。今度は聞かれた一夏の方が空気の入れ替えを行おうと、

「り、鈴の家の中華料理屋にはいつも世話になったっけな！また鈴の親御さん、店とか再開するのか？楽しみんだけど俺」

「・・・・・・ウチ、離婚したから」

踏み込んだ先は脱出不可能な底無し沼だったらしい。どんどん場の空気がダウナー的な方向に悪化していつている。

次に裏返った声で発言を試みたのは箒である。

「ま、前から気になっていたのだが、セシリアの御実家は名のある名家だと聞き及んでいるがどの程度のものなのだ？」

「え、ええ箒さんの仰る通り、オルコット家はイギリスに数多く存在する貴族の中でも名門中の名門ですわ！特に私の母は殿方の権力が大きかった時代から自ら企業などを運営しオルコット家の発展に

尽力した偉大な方でしたのよ」

「そうか、1度お会いしてみたいものだな」

「ええわたくしもそう思いますわ……数年前の列車事故で、母も父も亡くなってしまいましたから」

残念、後半が余計だった。更にドツボに嵌っていく場の空気。今やその重さはマリアナ海溝の水圧並みの圧力である。幾らなんでも家族問題が1ヶ所に集中し過ぎじゃなかるうか。

ミシエルはふと思う。

類は友を呼ぶとか言うけれど、もしかしてこういうのもそういうのに含まれるんだろうか。エスプリが利き過ぎだろう、と突っ込む他無い。

結局、いつそ質量さえも得てしまいそうな位重苦しい雰囲気は払拭されるには再度一夏が話題転換にチャレンジして成功するまでかかった。その時の一夏の声もどこか、引き攣ってはいたのだが。

「箒や鈴はもう組む相手決まったのか？」

「ああ、昨日の内にな。特に別のクラスの相手と組むのも禁止されていなかったなので私は鈴と組む事にしたぞ」

剣道で全国制覇の経験ありの箒と代表候補生で専用機持ちの鈴。接近戦にやや偏ってはいるが中々良い組み合わせだと一夏は分析する。

「今度は負けないんだから、覚悟しときなさいよ一夏！」

「鈴の言う通りだ。全く最近ときたらボーデヴィツヒばかりに夢中になりおって、今度のトーナメントでその性根を叩きのめしてやるぞ！」

「そうだそうだー！そんなに他の女が気になるかー！！」

「別にそんなつもりはないんだけどなあ……」

恋人達は恋人を他の女に盗られたと思ってご立腹の様です。

勿論一夏にそんな感情は毛ほど持つじゃない。ラウラに対して抱いているのは云わば実力者同士のシンパシーとライバル心であり、高みを目指す者同士性別なんて関係無いと考えている。多分ラウラも似たようなものだろう。

さて、実はもし箒と鈴がまだ組んでないようだったらどつちかと組むつもりだった（その点で2人は大きなチャンスを逃したと言えなくもない）一夏は他に誰と組もうかと頭を悩ませる。やはり気心が

知れてどんな戦い方なのかお互いよく知っていて、尚且つ実力者であればもつと良い。

そんな相手は他にも目の前にいてくれた。

「でしたら一夏さん、このわたくしなどは肩に並べて共に戦うに相応しい相手だと思いますg」

「ミシエルとシャルロットは？やっぱり夫婦だから一緒に出るのか？何ならどっちか俺と一緒に組まね？」

すぐ隣で盛大にずっとける音が響いたが、こっちの方が気になるので質問を優先する事にする。

「それなんだけどね——今回、僕はラウラと組もうと思ってるんだ」

「それはありがたい。私もこの学園内で組むに足る人間が居るとしたらミシエルかシャルロットのどちらかだと考えていた所だ」

「（むしろ僕達以外ラウラと組んでくれそうな人が居なさそうからなんだけどね……）」

多分ミシエルかシャルロットが居なければ最後まで取り残されて抽選に廻されてたと思う。だって授業とかで必要な時以外ラウラと接してる相手は自分達ぐらいだし。

せめてもつとラウラが丸くなってくれれば友達が出来そうなのに、とシャルロットは痛切に願う。

「んじゃミシエルは俺と一緒に組もうぜ。模擬戦とかでもしよつちゆう一緒だから丁度良いし」

「・・・・・・・・俺は構わないが、良いのか？」

「何が？」

「ま、またわたくしだけこんな目に・・・・・・・・」

1人テーブルを涙で濡らすセシリアであった。

「——でも結局皆で特訓とかやるのは変わらないんだよなあ」
「……別に良いんじゃないか？お互いの手の内をよく知っているのに変わりはないからな」

放課後のアリーナである。ミシエルの言ってる事も尤もなので一夏はその事に関して深くは考えない事にしたのだが、

「で、どうしてアンタも何食わぬ顔して加わってんのよ！？」

「私はシャルロットと組むのだ。仲間と共に訓練をして何が悪い？」

鈴の抗議に対し至極まっとうなラウラの返事であったが、だからといってあっさり納得できないのが人情つてものである。

「一夏もなんか言ってやりなさいよ！」

「いや別に？ミシエルも言ってたけど手の内が分かるのはお互いさまなんだし」

「それとも陰でコソコソやらなくては勝てないのか？数しか能の無い国だけある、器が知れるな」

「にやんですってえー！？」

「はいはい鈴落ち着いて。ラウラも煽っちゃダメだよー」

ふとアリーナを見回した一夏は金色が1つしかない事に気付く。

「あれ、セシリアは？」

「セシリアならば共にペアを組んでくれる相手を探す為に今日の特訓は休むとの事だ。申し込みの締め切りも近いからな」

「あちゃあ、セシリアだけハブらせるとか、悪い事しちまったな」

今更過ぎる言葉である。

とにかく、今日は学年ベートーナメントでのペアごとに分かれて特訓を行う事にする

「でさ、単刀直入に言ってこん中じゃどっちが強いと思う？」

「……やはりシャルロットとラウラだろうな」

「やっぱり？ラウラが強いのは身に沁みてるけどシャルロットもかなり巧いもんな」

「……当たり前だ。俺の嫁だぞ」

「はいはい分かってるって」

遠・中・近、どの距離でもそれぞれ対応出来る兵装を手足の様に使いこなす上に停止結界という切り札を持つラウラもさる事ながら、シャルロットもまたかなりの実力者である事は周知の事実である。

特筆すべきなのはその器用さだ。専用機<ラファール・リヴァイヴ・カスタム？>の特徴である大容量の拡張領域に収めた大量の武器をラビット・スイッチ高速切替でもって最大限生かし切ってみせるその器用さは驚異的で、ミシエルほど圧倒的かつ暴虐ではないものの攻撃密度も高い。

攻めは退き、退いては攻める戦い方は本人曰く『砂漠の逃げ水』という攻防一体の手堅くもいやらしい戦法であり、一夏も得意の接近戦に持ち込めなかったり、時にはその接近戦で押されたりと翻弄されっ放しにされたものだ。

一夏としては『砂漠の逃げ水』は相手のリズムをずらして攻め手を崩す『打ち拍子』と、逆にリズムを合わせて相手を自分の意に誘導する『当て拍子』を彼女なりに組み合わせた技術だと読んでいる。流石代表候補生の看板は伊達じゃない。

「武装が<雪片式型>しかない<白式>ではシャルロットの戦い方には対応し難いからな……やはり主に俺がシャルロットの相手をすべきだろう」

「俺もそう思う。流石にショットガンとか連射されると散弾は全部斬り落とせないし」

「・・・・・・・・避けるんじゃないくて斬り落とすのが前提なのか」

最近ではセシリアのビット一斉射撃も回避するよりも全弾刀で迎撃してしまおうし、そろそろ一夏も常人からかけ離れて行ってる気がしないでもない。

「・・・・・・・・だが、いい加減ラウラも一夏の動きや戦い方に慣れている筈だ。昨日は意表を突いて格闘戦に持ち込んだお陰で良い所までいっていたが、流石に次も通じるかは分からないぞ」

「そっちは考えてあるんだよ。ミシエルがシャルロットと一緒にやなきゃやれない手だけだな」

そして一夏はミシエルに耳打ちした。

2 - 7 : 八者四様

試合の組み合わせを行うシステムが不具合を起こし、当日になって昔ながらの手作りくじで決められた結果。

一夏とミシエルのコンビ、そしてラウラとシャルロットのペアは2回戦にぶつかる事になった。

箒と鈴、セシリアはBブロック。セシリアがペアを組んだ相手は――のほほんさんこと布仏本音。でものほほんさんの方がしつくりくるのでそれで通す事にする。

「最初に戦う人達には悪いけど、意外と早く決着をつける事になりそうだな」

「・・・・・・油断するなよ？」

「勿論分かってるって。相手が誰だろうと手加減はしないさ」

お願いだから手加減してー！？と誰かが悲鳴を上げた気がした。最初の対戦相手の少女達かもしれない。

向こうからしてみればあの織斑千冬の弟であり銃弾を撃ち落とすような剣鬼の弟弟子おとつとでしと人間火薬庫のタッグが相手となれば泣きたくなる。すみません、不戦敗していいですか？

「でもセシリアがのほほんさんとかあ．．．．．意外っちゃ意外だな。何時の間に仲良くなったんだろ」

「．．．．．まああのほほんさんならしかたないな。誰からも好かれてそうだし」

「そうだよな。なんてったってのほほんさんだもん」

「．．．．．で、彼女の強さは如何ほどだと思う？」

「——俺にも予想つかないや」

「．．．．．同感だ。ただ、一緒に班で実習を行った時は中々良い筋だったから意外とやるかもしれないぞ」

「っと、丁度セシリアとのほほんさんが戦うみたいだぞ」

モニターにアリーナの様子が映し出され、セシリアとのほほんさんが名前も顔も知らない別のクラスの少女達との試合が今開始された。

のほほんさんは<ラファール・リヴァイヴ>、相手の女子は2人共<打鉄>を装着。量産機ばかりの中に1人専用機を纏ったセシリアの姿はよく目立つ。

やはりというか代表候補生として操縦経験の長いセシリアと違って、相手の機動は落ち着きが無く無駄も多い。セシリアのビットにいいように追いかけて回されている。

それよりも一夏とミシエルの目を引いているのは残る1人、のほほ

んさんの動きだ。

「なんつーか、あの動きは——」

「……猫、だな」

昔のSF映画に出てくるUFOにも似た独特の空中機動能力がISの特徴なのだが、のほほんさんのそれはまさしく猫宜しく飛んだり跳ねたり、野生の獣みたいな動きだと2人は同じ思いを抱いた。

日本刀に似た実体刀の斬撃も、のほほんさんは「うわーこわいよー」と叫びながらするりとかわしてみせた。悲鳴は何とも気が抜けるが斬撃の軌道を見切った上での必要最低限の回避である。

反撃も的確で、装備したショットガンを至近距離で叩き込むと相手が反撃に移る前に素早く離脱。離れて行ったのほほんさんに気を取られた所をセシリアのビットが追撃。

着実に、確実に。対戦相手のシールドエネルギーを削っていく。

「のほほんさんが囷役でセシリアが止めって感じだな。チームワークも即興だろけどしっかりしてるし、結構相性良さそうだなあの2人って」

「……多分、のほほんさんのあの戦い方は天然だな。本格的に磨けばシャルロット達ともタメを張れるかもしれないな」

それから一瞬ミシェルは考え込み、

「……だが失礼に当たるのは分かっているんだが、どうしてものはほんさんが必死に自分を鍛える姿が思い浮かばないのは何故だ」

汗水たらして自分の身体を苛め抜いてる絵面よりもあの猫のきぐるみを着てこたつで丸くなってる姿がよっぽどお似合いだと思ってしまう。

しかしのはほんさんの実力は本物だ。相手の攻撃に対し、直撃は殆ど食らっていない。

押されれば引き、引けば押す。〈ブルー・ティアーズ〉のビットの回避に必死になれば「それ」と力の抜ける声を上げながら突撃して相手の足を止めさせ、そこに放たれたセシリアのレーザーライフルによる一撃が少女達の1人に絶対防御を発動させた。

こうなればセシリアのビットの十字砲火にレーザーライフル、加えてのはほんさんの猛攻を一身に浴びる事になったもう片方のシールドエネルギーが底を突くのも時間の問題である。

片方が墜とされてから1分も経たず、セシリアとののはほんさんの勝利が決定した。

2人しか居ない男子更衣室にまで届いてくるアリーナを包むどよめきは、代表候補生の一角の見事な戦い方のみならず意外なダークホ

「スの登場に驚いてのものかもしれない。

「・・・・・・・・次は俺達の番か」

「よっしゃ、それじゃあ早く行こつぜミシエル」

「・・・・・・・・相変わらず派手ねー、ミシエルの戦い方って」

「まったくだ。お陰で一夏が目立たなかったではないか」

「いや充分一夏も注目浴びてた気がするんだけど」

そりゃ悉く自分に当たる射撃だけ見切って刀1本だけで叩き落とす
続ければ観客の度肝を抜くに決まっている。

「言われてみればそうかもしれないが、やはりもう片方のミシエルの戦いの方が人目を引いていたからな」

「あー、それは否定できないわね」

箒と鈴からしてみれば分かりきっていた事ではあるが、一夏・ミシエルペアは至極順当に1回戦を勝ち抜いてみせた。

結果は大方の予想通りではあったものの、問題はその内容である。

クラス代表決定戦などでその实力を見せつけた一夏と違い、学園に入学してから公の場で試合を行っていなかったミシエルの戦いぶりは、やはり観客の度肝を抜いた訳で。

さっきまで試合の様子を映していたモニターに目を向けてみると、『しばらくお待ち下さい』のテロップとアリーナの整備にいそしむ職員達の姿が。

「——なんてったってミシエルが使う武器って爆発系ばかりだし」

鈴が思い出すは試合開始直後にミシエルが言い放ったこの一言。

『正面から行かせてもらおう。それしか能が無い——全てを
焼き尽くすだけだ』

その発言に凍りつく対戦相手——それが命取り。

次の瞬間一斉に放たれるミサイル、砲弾、銃弾の嵐。爆炎に2人の少女が呑み込まれた瞬間、思わず『あああの2人死んだな』と考えてしまった人間は一体どれほどのものだろう。

その結果が現在職員達が補修中のアリーナの地面である。一体どんな弾頭使ったんだと小一時間問い詰めたい。実際試合後千冬にお説教されているミシエルの姿が目撃されたとかしいとか。

ちなみにミシエルが使用したミサイルや砲弾に使用されていたのはサーモバリック弾頭。燃料気化爆弾の発展型としてより高威力を誇る弾頭である。

「正直、一夏よりもミシエルの方が厄介かもしれないな。あの弾幕と火力は脅威にも程がありすぎる。斬りかかろうにも弾幕が激し過ぎて近づけないし、仮に近づけても」

「AICの盾に捉まればジ・エンドよね。私の衝撃砲も防がれちゃうし、何より一夏の存在も忘れちゃいけないし」

「少しでも気が取られようものなら躊躇い無く一夏は斬り込んでくるからな。味方の射撃が当たるのも恐れないと来ている」

実際先程の試合もミシエルの開幕一斉射撃によって片方はその弾幕に一気に押し潰されて戦闘不能に陥っていたが、もう片方は何とか回避に成功し生き延びてみせた（それでも半分以上シールドエネルギーを失っていたが）。

そこに襲いかかったのが一夏である。

その時の少女の反応も中々の物で、一夏の接近に気付くとライフルを数発発射したただが見事に反撃を見せ……。そしてそれをあっさり<雪片式型>に受け取められてバツサリと一刀両断された。

その間、僅か15秒。ちなみにミシエルが撃って撃ちまくっていた時間は10秒程。その間撃ったミサイル・銃弾・砲弾は合わせて数百発。

絶対トリガーハッピーだろあの野郎。きつと撃ってる最中あのバイザーの下で邪悪且つ獰猛な笑みを浮かべてたに違いない。

逃げられなかった少女？勿論医務室送りである。ISの防御機構のお陰で無傷ではあるがむしろ精神的ショックによるものが理由だ。

遺言は『炎の壁が……。』であつた。

「いや死んでないってば」

「何処を見て言っているんだ鈴」

「細かい事は気にしないで。でも本当あの弾幕は反則よ。何アレ、本当にIS？まるで戦艦よ！」

「むしろ要塞だろう。狙うとすればアレだけの弾幕だ、弾切れの瞬間を見計らって攻撃を集中すれば良いかもしれぬが、やはり問題はAICか……」

「でもリロードや武器交換の際も高速切替をミシエルも使ってくるから殆ど無いわ。シャルロット程の速さじゃないからまだマシだけど」

「そして何より一夏がそれを許す訳無いだろうし、ミシエル本人も分かっている筈……」

「厄介ね」

唱和する溜息。鈴など猫みたいな呻き声を漏らしながら頭を掻きまわっている。

「しかし気になっていたのだが、あれだけの数の兵装をどういった原理で同時に扱っているのだ？」

「簡単な話よ。ISのマン・インターフェイスを使って両肩の兵装とかを操作してるの。BT兵器と似たような要領よ」

言うなれば2丁拳銃の更に規模拡大版だ。両手に加え両肩の兵装は

ハイパーセンサーによる補助を受けた思考によって操作しているのである。

「ビットの方も数を減らして数種類の自立機動プログラムを搭載した事でほぼ自立して動くようにしてあるから、セシリアみたいにビットの操作に集中しなくていい分他の事に意識を回せるのよ」

ミシエルは幾つか存在するビットの制御プログラムを目的に応じて切り替えるだけでいい。AICの発動も自動なのでラウラの停止結界の様に意識を集中させる必要も無い。

「その代わり自立機動する為の機構以外にもAICなんての積んだせいでビットがアレだけ大きくなっちゃったんだろうし、防御か迎撃しか行わないのもそこまで遠くまで離れたら操作できなくなるか、そこまで柔軟な機動プログラムが組まれてないのかも——っていうのが予想ね」

それ以外にもAICによる防御とレーザー砲による迎撃を同時に行えない、という弱点もある。

「どっちにしても十分厄介な事に変わりはないな」

「そうよねえ。ただでさえ一夏1人だけでもヤバいのに」

だけど、と2人は決意を新たに握り拳を作って見つめ合う。

「確かに2人の実力は絶大だ！だがだからといってここで挫ける訳にはいかん！」

「その通り！あっさり負けを認める訳に似はいかないわ！絶対一夏に思い知らせてやるのよ！！そう」

「一夏の妻としての、本当の実力を！」

それなりに学園内に自分達と一夏の関係は広まりつつあるが、それでも2人にはまだ足りない。

ならばこの学年別トーナメントを勝ち上がり、実力を学園内の女子中に知らしめてやれば、箒と鈴達を乗り越えて一夏を奪い取ろうと企んでいる者達も諦めるに違いないだろう。

ぶっちゃけた話、一夏に対して言った『まだ他の女の子に色目使ってる（箒&鈴視点）からお仕置きしてやる』云々は然程本気で言ったつもりではなく、まあ精々………半分ぐらいしか考えちゃいない。ないっただけ。

「そろそろ出番だな。行くぞ鈴！」

「オツケー箒！存分に暴れてやるんだから！！」

「・・・・・・・・フツ、やはりコイツらは恐れるに足りんな」

箒と鈴の試合を見たラウラの第一声がこれである。

「いや、でも油断とかしちゃダメだからね？っていうか2人共普通に強かったと思うけど」

「だがあの程度なら私1人でも十分だろう。そもそも私のくシユヴアルツェア・レーゲン>との相性も悪過ぎる」

それに関してはシャルロットも同意見だ。鈴のく甲龍>の武装は連結式の青龍刀と衝撃砲。どちらも容易に停止結界で防げるし、く打鉄>を纏う箒も実体験を用いた接近戦に偏っている。

先程の試合もそれを証明するかのよう、箒は積極的に斬り合いに持ち込もうと突撃を繰り返していた。く白式>と違って一応く打鉄

>も射撃兵装が使えるだろうに、何かこだわりでもあるのだろうか？

コンビネーションそのものは筭が斬り込み役で鈴が衝撃砲で援護という役割分担ではあったが鈴も接近戦に持ち込む事が多い。実際さつきも衝撃砲で壁際まで追い込んでから青龍刀の連撃を叩き込んで決着をつけている。

「——だがあの男には及ばない」

だが一夏程の技量と速さはない。普通の生徒相手なら十分圧倒出来るかもしれないが、逆に両手とプラズマ手刀と6個のワイヤーブレードを自在に操るラウラなら比較的簡単に押し切れるだろう。

その辺りはやはり生まれてからずっと軍隊で鍛えられてきたラウラと1年余りしか訓練を積んでいない鈴の地力の差か。そもそも何も知らない一般人から、僅か1年で代表候補生の座を奪い取った鈴の方が異常なのである。才能や潜在能力は鈴の方が上なのかもしれない。

勿論自力以外にも機体性能の差も大きい。ラウラからしてみれば、<甲龍>は安定性と燃費を重視し過ぎて『大人し過ぎる』機体だった。

「だがまさかこんなに早くあの男との決着をつけれるとはな」

「1回戦勝てばいきなりミシエルと対戦かあ。うーん、なんかいきなりというか中途半端なタイミングな気が」

ラウラは日頃浮かべている氷のように冷たい無表情か不機嫌そうなムツリ顔が嘘みたいな満面の笑みを浮かべているが、年頃の少女らしいというよりも得物を前にした獣じみた凶暴な笑いである辺りちょっとシャルロットには悲しい。

どうすればもっとラウラが女の子らしくなってくれるんだろうかと内心肩を落とすシャルロットはまるで子供の将来に悩む母親のようだった。

まあ、ラウラの保護者（クラリツサ他黒ウサギ部隊の人達）から彼女の事頼まれているし、似たようなもんである。

ラウラとシャルロットの試合が次に迫り、アナウンスが2人の名を呼んだ。

「こうしてはいられん！行くぞシャルロット、出撃だ！！」

「わ、わわわ、引っ張らないでよー！」

「正直、意外でしたわね」

「せしりー、何のこと？」

「いえ、こちらの事ですわ」

考えていた事が口に出てしまい、思わず取り繕ってしまう。

セシリアの脳裏を占めていたのは、隣にいるこのペアを組んだ少女についてであった。『意外』というのはこの少女が思わぬ実力者だった事について。

誰にするか悩んでいる内にペアの申し込みが締め切りになってしまい、抽選の結果こちらはのんびりしている内に申し込みを忘れてしまった彼女とペアを組む事に相成ったのだが、

「のほほんさんは学園に入る以前にもISの操縦経験が御有りなので？」

「んーん、お友達の整備のお手伝いとかで触った事はあるけど、

自分で動かしたりはぜんぜん」

「ならやはり才能……というよりも天然と仰るべきなのでしょうね」

「？」

奇しくもミシエル達が抱いた感想と同じ考えを口に漏らしながら、思考はつい数分前に繰り広げられていた戦いを脳裏で再現する。

ラウラとは直接相見えた事が無くても一夏との決闘は間近で観戦したから、その実力は痛い程理解している。

あのドイツの代表候補生は、強い。誰かに自分と彼女。どちらが強いか聞かれたら素直に認めないだろうけど、同じ代表候補生として上りつめてきた中で鍛えられてきた射手としての観察眼は、冷静に自分との実力差を見抜いていた。

加えて彼女と手を組んでいるのはシャルロット・デュノア。器用貧乏というなかれ、その全距離に対応した戦闘能力と敵に自分のペーすに持ち込ませない戦い方はまさに驚異的。

何よりそんな戦い方のせいか、チーム戦になると仲間に合わせるのがとても上手い。その視野の広さとの確な援護はセシリアも羨ましくなる。

そんな2人が手を組めば、どうなるか。

「しゃるしゃるもラウっちも強いよね」

「シャルロットさんの援護射撃で相手からの接近を許さず、動きが止まればラウラさんの猛攻。堅実ですが、その強さは生半可な物ではありませんわ」

ラウラが前衛でシャルロットが後衛。シャルロットの高速切替での絶え間無い射撃はあのミシエルの伴侶なだけあると思わせる密度の濃さで相手を縫い付ける。

防御に移って足を止めた途端ラウラが襲いかかり、プラズマ手刀とワイヤーブレードで切り刻む。対戦相手の片割れが助けに入ろうにもシャルロットの弾幕が許さない。

弾幕といえどシャルロットの射撃は正確だ。命中弾も多く、撃たれる側は仲間の助けも反撃も出来ないままシールドエネルギーを削られる。

片方を仕留め終えたラウラが加わればもう勝敗は決まったも同然。

停止結界すら使われる事無く、ラウラとシャルロットは2回戦へと勝ち進んだ。

「次の対戦は一夏とミシエルさんが相手、ですか」

「どっちが勝つんだろうね？どっちも勝てたらいいよね」

「それはちよつと無理な相談だと思いますわよ？」

友人としては、組んでる相手が気に入らない相手でもシャルロットに勝って欲しいと思う。直に接するようになってからは大分マシになったけれど、今でもちよつとだけミシエルの事は苦手なままだ。

恋する乙女としては、一夏が勝利して欲しいと願う。恋愛感情というのは難儀な物で、もう彼には相手が居て―しかも2人―日頃仲睦ましくされるのを見せつけられても、そう簡単に恋の炎は鎮火してくれない。

・・・2人娶ったのなら、もう1人ぐらい仲間に入れさせてくれないのでしょうか？

望む答えが返ってきそうにない願望に肩を落としながら、セシリア

はのほんさんと一緒に他の試合の観戦に集中する事にした。

2 - 8 : Black vs White : Bullet & Blade

Aブロック・2回戦。

アリーナの中心で一夏とミシエル、ラウラとシャルロットが向かい合っている。

「思ったより早いが、一々雑魚の相手をする手間が省けたというものだ」

「今度こそ、決着をつけてやる」

「ミシエル。分かっていると思うけど、お互い手加減無しだからね」

「………了解している」

ミシエルはメカニカルな兜に包まれた頭部を大きく回して首を鳴らす。それを合図に、男の中でスイッチが切り替わる。

「それでは諸君———楽しい愉しい戦争を始めよう」

ミシエルの言葉が試合開始の合図。

まず真っ先に突貫したのは一夏だった。一目散に一振りの刀だけ握って突っ込む先はやはりラウラ。その行動にラウラは獰猛な笑顔で

一夏を出迎える。

「ラウラあああああああああッ！！！」

「そうだ来い、織斑一夏！今こそ貴様も私も我らが大好きな闘争の時間だ！！！」

「僕はそこまで好きじゃないけどね！」

ラウラは左手だけプラズマ手刀を展開し、右手の停止結界で一夏を迎え撃つ気満々だ。

けれど忘れてはいけない。これは、『タッグマッチ』なのだ。

「・・・・・・・・全弾、持っていけ」

<ホーネット・ネスト>のミサイルカバーが展開、纏めて飛び出すマイクロミサイルは一夏を避け、左右から大きく横から回り込むコースを描いてラウラとシャルロットへ襲いかかる。

シャルロットが両手にショットガンを装備して迎撃。散弾が命中したマイクロミサイルは他の弾頭を巻き込んで爆発を起こす。

次の瞬間、爆炎の代わりに広がった白い煙が一夏とラウラを呑みこみ、アリーナの中心部を包み込んだ。シャルロットは咄嗟に煙から逃れアリーナの外周近くまで飛びのく。

余りの煙の濃さと範囲にラウラと一夏の姿を全く見つけられないでいる。空中に上がって見下ろした煙の塊はまるでわたあめみたいに中心部に居座っていて、しばらく消える気配は無い。

「ジャムスモークなんて、やってくれるじゃんミシエル！ラウラ、大丈夫！？」

『話しかけるな！今手が離せん！』

プライベート・チャネルで話しかけてみたが激しい剣戟の金属音混じりのラウラの声に余裕は無かった。

このジャムスモークは特殊な金属粒子を含んだ煙幕を散布する事によりISの索敵レーダーを無効化にする代物で、煙幕の中心部なら索敵やロックオンはほぼ不可能にされてしまう。

五感を強化するハイパーセンサーは無事だが、アレだけの濃度だと視界がどれだけあるかも怪しい。それは一夏も同じ筈だろうけど――

「こうやって分断して各個撃破が狙い、って事かな？」

「……………一応はな」

視線を前に戻すと、同じ位の高度まで浮上してきた夫の姿。全身が

装甲に覆われているせいでどんな顔をしているのかは分からないのがシャルロットには不満だ。彼の顔を見ていると安心するのに。

1対の大型ビット、＜シールド・オブ・アイギス＞をミシエルは身体の前に配置している。ハイパーセンサーと連動したビットは自動的に動くので、ミシエルは機動と攻撃に集中できる。

しかし、ずっとミシエルの傍に居たシャルロットは無敵の盾の弱点も理解している。

「でもそう簡単には思い通りに行かせないよ？」

小悪魔の笑みでシャルロットはショットガンを格納すると新たに武装を選択し直す。

「AICの弱点はエネルギー兵器には効果が薄い事。これなら簡単にミシエルの盾も撃ち抜く事が出来る」

そして現れたのは、全体的に四角い長大なライフル。＜スターライトmk3＞の対抗馬として有名なミラージュ社製ハイレーザーライフル、その名も＜唐沢＞。

何故和名なのかは企業秘密である。

ミシエルはバイザー越しに呻いた。

「ビームは………マズイ」

「ビームじゃなくてレーザーだよ」

バジュツ！という独特の砲声と光弾が空を切り裂く。躊躇うまでも無くミシエルはレーザーを回避した。

シャルロットの言った通り、AICでエネルギー兵器は防げないし直接弾を受け止める目的の盾じゃないからアレだけ高出力のレーザーも防げない。それなりに固いから1発ぐらいは耐えられるかもしれないが代わりに膨大な熱量に中身が損傷しかねなかった。

だから逃げる。機動力で照準を振りきるのではなく、連射のタイミングを呼んで別方向に切り返す避け方。それでもシャルロットには何時まで通じるのやら。

「撃ち負けはしない………当たるのならな」

ミシエルも反撃する。左腕の<グリムリパー>で牽制射撃。青白いレーザーと5発に1発装填されている曳光弾の赤い光が交差する。左肩の<レイnstroom>も加わりシャルロットの周囲で紅蓮の花が咲く。彼女は愛機のその高い機動力で直撃を回避。その間も射撃の手を緩めない。

更に右肩のレールガンも起動される。武装名は<ネイルシューター>、長距離射撃用レールガンランチャーだが使用弾頭を切り替える

事で様々な局面にも対応できる。

今回選択したのは空中炸裂弾。電磁加速され秒速km単位で発射された砲弾はシャルロットの数m手前で炸裂し、数百の破片が飛来したそのままの速度で彼女に襲いかかった。

1つ1つが装甲車すら貫通しかねない位の超高速の破片が複数シャルロットに食らいついた事により、<リヴァイヴ・カスタム？>のシールドエネルギーがごっそりと減る。

やはり手数と攻撃範囲の広さはミシェルの方が上だ。代わりに<唐沢>のレーザーも1発命中しており、それなりのダメージを被つてはいたがまだ彼の方に分がある。

だがシャルロットには他にも手がある。

「ならこれはどうかな？」

次にシャルロットが展開したのは肩に背負うタイプの大型兵装だ。長方形型で大きさだけでもシャルロットを超えるだろう巨大なそれが、<リヴァイヴ・カスタム？>の両肩近くに固定された。

そのの正体もミシェルは知っていた。だからこそ、今度は隠れている顔に一筋の汗を浮かべてしまった。

だってそれ、個人に向けて撃つような代物じゃないだろ！？

「……………そんなの持ってたっけ？」

「今日に備えて実家に頼んで送ってもらったんだ。ミシエルが相手だとこんな使わない限り勝てそうにないからさ。てなわけで行くよ！！」

両肩のランチャーから飛び出す大型ミサイル。それは通常ISに搭載されるような小型ミサイルとは大きく違う、大型の戦闘機か爆撃機に搭載されるべき規模の代物だ。それがまっしぐらに予想外の事態に凍りついていたミシエルへ突っ込む。

<シールド・オブ・アイギス>防御モード。ミサイルを停止させるのではなく、純粹に物理的な盾代わりにしながらミサイルの迎撃に移る。<グリムリパー>と右手のフルオートショットガンをミサイルの進路上とにかくくばら撒いて——1発が誘導装置周辺を破壊されあらぬ方向へ。

もう1発は——航空機用から転用された燃料気化爆弾の制御装置が作動し、効果を発揮する。

弾頭から燃料が爆発的に放出され空気と攪拌、コンマ数秒遅れで信管が作動し、空気と最適な混合率に達した散布された燃料に着火。

アリーナ上空に、紅蓮の太陽が誕生した。

視界を奪われた状態での戦闘経験は滅多に無い。

だが『滅多に無い』と『全く無い』は意味合いが大きく違う。ラウラには同じような経験をした事が数回ある。

「（山中でのサバイバル訓練を思い出せ）」

着の身着のまま、他にはナイフ一本だけ与えられて険しい山の中に置き去りにされた状態でのフォックスハンティング。

文明の手が全く届いていない大自然において、星の光すら届かない山中が生み出す闇はラウラにとって大きな敵もあり、また味方でもあった。

闇が黒から白に変わっただけ、要はそれだけの話。要領は変わらない。

「（余計な音は切り捨てる。空氣の動きを感じ取れ、あの男の氣配を、臭いを、呼吸を探すのだ）」

ハイパーセンサーの感度を上げる。觀客の歡声やミシエルとシャルロットの戦闘音は思考からカット。周辺の空氣の揺らぎを解析し、一夏の氣配を探り……………

「———！」

振り向きざまにプラズマ手刀が閃く。超高熱の刃の根元の手首の装甲が<雪片式型>の側面にぶつかり合い、双方の攻撃は弾かれた。

すぐに一夏は後退し、再び白い闇の中へ消えた。ラウラの想像以上の隠行だ。ラウラの額に汗の珠が滲む。

「貴様は私の予想を超えてくるな、織斑一夏。まさかここまで無音サイレントキリング暗殺術にも長けているとは思ひもよらなかったぞ」

「闇稽古、って知ってるか？俺以上に氣配も掴ませない人は何人も居るさ」

「日本の剣術という物は思ったよりも奥が深いのだな。だが私とてこの程度の事はこなせるぞ！」

今度はラウラから動く。空気のイレギュラーな動きと僅かに感じ取れる一夏の気配から位置を推測、そこへプラズマ手刀を振るう。

見つけた。向こうもラウラの攻撃を感じ取って迎撃態勢に移っていた。一瞬の交錯でお互いのアンロックユニットを浅く削り、すぐに反転し相手へ斬り込む。

下手に守りに入ったら負けだ。また気配を見失う前に食らいつかなくて是不なる。僅かな隙も見せないから射撃武器も停止結界も使えない。何度も何度も擦れ違いながら近接戦を繰り返す。

濃い煙のせいで一夏とラウラの戦いぶりが見られない一部の観客からは不満のざわめきが聞こえてきているが、2人の思考からは見世物になっている自覚はとつくの昔に忘れ去っていた。今はただ、目の前の強者とぶつかり合う事だけに全力を傾けるだけ。それ以外など知った事が。

ミシエルがお膳立てしてくれたこの状況、無駄に過ごす訳にはいかない。

「っと！」

「逃げるなあ！」

またも退く一夏。逃がすまいと追撃を試みるラウラだが残念ながら外してしまう。

「シッ！」

「甘い！」

素早く側面へ回り込んだ一夏が突きを放つ。それを半身になって流すと、逆にラウラがプラズマ手刀を一夏の腹に突き立てようとする。一夏は身を擦ってどうにか回避に成功。その体勢から向きを前後反転してラウラに向き直す。

上段に振り被った一夏の構えに、振り下ろされるだろう刀を受け止めるべくラウラも一瞬両腕を持ち上げかけ——それはフェイクだ。刀を傾け両手を腰の所まで下ろし、横薙ぎの斬撃が放たれた。

「小癪なあ！」

上げられていた手を鋭く<雪片式型>に叩きつけ、強制的に軌道変更を余儀なくされた斬撃は<シュヴァルツエア・レーゲン>の脚部装甲と腰部パーツを斜めに傷つけるに留まった。

特に深い傷を負った腰部パーツが脱落し、内蔵されていたワイヤーブレードの1つが地面に転がる。

それを見て一夏はこれ見よがしにニヤリと顔を歪める。

「その程度かよ？」

「なんの、まだまだこれからだ！」

その時である。頭上で膨大な熱波と衝撃が生じたのは。

アリーナ上空で生じた巨大な火球は、正体不明機の襲撃により更に強固にされた遮断シールド越しでさえビリビリとアリーナ中を震わせ真夏の日差しを更に酷くしたような熱感を観客達に浴びせた。すわまた緊急事態か何かか、と勘違いしそうなほどの衝撃である。

地上まで到達した衝撃波は突風として2人の元にも届き、反射的に顔を庇って踏ん張らなければそのまま吹き飛ばされそうな位強烈だった。アリーナ中心に止まっていたジャムスモークの塊も呆気無く霧散し風に流されていく。

白一色の世界から解放された一夏とラウラの目にまず映ったのは・
・
・
・
血の様に真っ赤な太陽だった。

正確には太陽ではなく、燃料気化爆弾の起爆によって発生した炎の塊である。まるで遠雷の様に低く腹に響く音が学園に敷地中に広がっていく。

2人の後方で物々しい衝撃音が生じた。思わず今度は何事か、と2

人一緒に振り向けば、全身から煙を立ち上らせながらも着地したミシエルの姿が。

「大丈夫かよミシエル!?」

「………あー、死ぬかと思った」

意外と余裕がありそうな返答であった。ラウラはラウラで、非常に何か言いたげにむっつりしながら近くに下りてきたシャルロットの方を見る。突如生じた燃料気化爆弾による膨大な気圧の変化のせいで耳鳴りが酷い。

「FAEBを用いるのならばせめて警告ぐらいは発したらどうだ。それにあんな物まで持ってきているとは聞いてないぞ」

「ごめんごめん、中途半端な物じゃミシエルに通用しそうにないからね」

シャルロットが浮かべているのは天使の笑みなのだがやらかした事は非常に過激であった。

というか規定自体に使用禁止と書かれてはいないとはいえ実戦などではなく試合、それも学生同士の対戦で航空機用の燃料気化爆弾を引っ張ってくるなど前例がなかったりする。普通そんな発想すらしない方が当たり前なのだが。

「……実の所、予想以上に強力だったせいでシャルロット自身も巻き込まれかけて自爆しかけたりしたのだが、直撃を食らったミシエルよりはよっぽどマシだろう。」

「……シャルロット。聞きたい事があるんだが」

「なあにミシエル？」

「……俺、シャルロットを怒らせるような事したのか？それならすぐにでも謝るが……」

「ううんそんな事無いよ！何時もミシエルは優しくしてくれて僕は幸せだよ—— た、たまーに意地悪で強引な時もあるけどね。べ、ベッドの上とか」

「おい、皆見てるんだからなー？」

「一夏の言う通りである。早くも耳年増な少女達の耳がダンボと化していた。」

「でも僕だってこういう時ぐらい勝つてみたいもん。ラウラも仲間だから勝たせてあげたいし、ミシエルと一夏相手じゃ真正面からだと生半可なやり方じゃ勝てそうにないからね」

「言いつ分は解った。まあ納得しておくとしよう。ミシエルも一応まだ動けそうだ。」

「まだやれそうか？」

「……寸前でAICを全力で機動させたお陰で衝撃波の大部分は無効化できた。冷却が完了するまでしばらくビットは使えないが、まだまだ戦える」

爆発による超高熱もシールドバリアーと全身装甲の2段階で何とか凌ぐ事が出来た。両方が無ければ絶対防御が発動してもう動けなくなっていただろう。

武装の方は機体の一部である両腰の<アグニ>以外は機体とは違ってそこまでの熱には耐えられなかったのか、どれも表面が軽く溶解してしまっている。誘爆を起こさなかったのは幸運だった。

暴発しないようまずマガジンを切り離し、次に武器本体を捨てて予備の兵装を展開。2丁目のオートマチックショットガン<ドラゴンプレス>と複合アサルトライフル<ケルベロス>を両手に装備。

「よし、次はプランBでいこう」

「ああん？ねえよんなもん」

「うおい！？」

「……すまん。何故かこう言わなきゃならない気がするっ
い」

「頼むぜ全く」

「……………それじゃあ仕切り直しとしよう」

「また来るよラウラ、気をつけて」

「誰に言っている？戦いはこれからだ！」

戦闘再開。

「（さっきのでかなりシールドエネルギーは削れた筈。このまま一気に畳みかけてミシエルに自分のペースに戻らせないようにしなきゃ！）」

今のシャルロットに残されている攻撃手段は意外と少ない。先程の大型ミサイルだけでその拡張領域の半分以上を占めていた為だ。

AICが使えない以上今のくラファール・レクイエム>には実弾兵

器も効果が出る。シャルロットはエネルギーの消費が激しい<唐沢>から愛用のショットガン<レイン・オブ・サタデイ>の2丁持ちに切り替え、距離を詰める。

第2世代機である<リヴァイヴ・カスタム？>が第3世代機の<ラファール・レクイエム>に勝る点は、あちらが火力・防御力と引き換えにしたその機動力だ。高速かつ鋭角な方向転換を織り交ぜた機動で攪乱しつつ攻撃を加えていく。

「（・・・・・・A I Cが使えない間にケリをつける算段か。退けばそのまま追いまわされるだけ、ならば・・・・・・）」

ミシエルは右腕の実体盾を掲げながら自らシャルロットへと接近を試みた。多少の被弾は無視してこちらからも左手の<ドラゴンブレス>を連射。

2丁同時に放たれるシャルロットの砲火よりもフルオートで放たれるミシエルの弾幕の方が倍近く激しかった。相対距離が近づくにつれ被弾の量も増し、先に攻勢に出たシャルロットの方の被害が大きかった。

地を駆ける猛牛の如き迫力で突き進んできたミシエルに対しシャルロットは飛び、頭越しに交錯する。空中で一回転しながら眼下のミシエルに散弾の一斉射。それを受け止めながらもミシエルは右手の<ケルベロス>で頭上を薙ぎ払い、銃剣で片方のショットガンを真ん中から切り裂く。

相手の方に向き直るのはミシエルの方が早かった。<ラファール・

レクイエム>はトップスピードこそ他の機体に劣りがちだが、P I Cの改良によって瞬発力と旋回能力が高められている。

未だ背中を向けたままのシャルロットの背中に<ケルベロス>のセミオートカノンが放たれた。弾種は対I S用榴弾。

「きゃあっ！」

着弾し爆発が起こる。ミシエルと比べやや上回っていたシールドエネルギーの残量が早くも逆転。

負けじと破壊されたショットガンを捨て、矢継ぎ早に高速切替を用いてシャルロットも<ケルベロス>を展開した。同じく榴弾を装填したセミオートカノンを連射、ミシエルの周囲に着弾して揺さぶりをかけていく。

——その爆煙に隠れてミシエルの手元が一瞬閃いた事にシャルロットは気付けない。

ミシエルが着地した丁度足元には先程捨てられた<グリムリーパー>の弾装が転がっていた。

顔を動かさずハイパーセンサーで周囲の状態を確認。向こうは向こうで激戦中の相棒たる一夏はラウラと共にミシエルの少し後方だ。

一夏にプライベート・チャネルを繋ぐ。こんな時、余計な素振りも声も必要ないこのやり方ありがたい。

『……少々眩しいぞ。タイミング、合わせられるか？』

『オツケーだ、何時でも良いぞ！』

ミシエルは再びセミオートカノンを放った。今度は十分余裕があったので、危なげなく距離を取って榴弾の爆発から逃げようとシャルロットが動く。

発射されたのは榴弾ではなかった。

またもアリーナで閃光が迸る。今度は紅蓮の業火ではなく、白熱電球の光を100万倍強くしたような白く眩い光に観客の目まで眩む。

「（これは閃光弾！？高速装填ソニック・ロードか！！）」

高速装填——高速切替の応用で、武器本体ではなくマガジンのみを拡張領域に収められた予備マガジンと交換する技術である。

<ケルベロス>のセミオートカノンに用いられる砲弾には榴弾のみならず様々な種類がある。ミシエルは高速装填によって榴弾用のマガジンと閃光弾が装填されていたマガジンを一瞬で交換していたのだ。

予想外の出来事にシャルロットのみならず、一夏と戦っていたラウラも思わず動きを止めてしまう。

一夏はミシエルに背を向けている形だったので直接閃光を見ていないから無事で、ミシエルは顔全体が装甲に覆われバイザーが必要以上の光をシャツアウトしているから平然としていられた。

もちろんハイパーセンサーがすぐさま保護機能（原形が宇宙用なだけに太陽などの光から目を保護するよう設定されている）を発動させてシャルロットの視力を回復させたが——時既に遅し。

「・・・・・・・・少し痛いぞ」

瞬時加速を発動させたミシエルがもはやシャルロットの目前に居た。

両手の銃を捨て、右腕の実体盾を切り離して、100口径電磁加速型徹甲爆裂射突型ブレード<ウルティマラティオ>を構えて。

「まだまだあつー!!」

それでも簡単にやらせるものかと、自爆覚悟でシャルロットは榴弾を放ち。

・・・・・・グン！と身体を低くしながら勢い良く右回りに身体を捻ったミシエルの動きによって、榴弾は彼の左肩が在った所を空しく通り過ぎる。

放たれるミシエルの一撃。アップーとフックの中間、斜めに突き上げられた拳がレールガンの応用で加速した鉄杭もろともシャルロットの腹部を直撃した。

「きゃあああああああ！！！」

シャルロットの身体が真上へと舞う。右拳を高々と天へ突き出した体勢で固まったミシエルが指向性爆薬起爆させる必要も無く、その時点でシャルロットのシールドエネルギーは底を突いた。

たつぷり数秒間、高々と吹き飛んだシャルロットの身体は限界点まで到達すると、やがて重力に引かれ落下。

そのまま地面に激突、なんてのはミシエルが許す筈も無く、真下に回り込んでしっかりと落ちてきた妻をキャッチしてみせた。

完全無欠のお姫様だっこの体勢である。顔の部分を、ミシエルはほんの少しだけ唇の端を持ち上げた。

「・・・・・・・・俺の勝ちだ」

「むー・・・・・・・・あーあ、やっぱり負けちゃった。やっぱりミシエルには敵わないなあ」

「・・・・・・・・それはむしろ俺のセリフなんだが」

「え？そう？」

「ああ……よく言うだろう？先に惚れた方が負け、とな。だから俺はシャルロットに負けっぱなしだ」

「もう、人前で恥ずかしい事言うの禁止ー！」

とか言いつつえへーとか満面の笑みでミシエルの首元に顔を擦りつけるシャルロットであった。

……若干名、やさぐれ気味にブラックコーヒーを求める少女達が居たとか居ないとか。

こちらは甘ったるい空気謎一片の入る余地も無い一夏とラウラ。

閃光弾が炸裂した瞬間、一夏もまた行動を起こしていた。このミシエルがラウラから引き出させてくれた一瞬の隙は自分の体重分の金よりも価値がある。

シャルロットと同様、ラウラもすぐさま視力を取り戻し一夏の姿を捉

えようとして――――目前に迫る影。直撃コースで回避は間に合わない。

咄嗟に停止結界で受け止める。何かと思えばそれはミシエルが切り離れたくグリムリパー>の大型マガジン。供給口に見え隠れする鈍色の光から、全弾撃ちきられていない事が分かる。

「（あの男は何処に――――）」

ようやく気付く。一夏がラウラから離れ、先程までミシエルの居た場所に立っている事に。

そして<グリムリパー>のマガジンを蹴り飛ばした一夏が彼の捨てた―まだ弾の残っている―<ドラゴンブレス>フルオートショットガンを構えている事に。

『……………どうせならその場で仲間の銃を借りて使ってみるのはどうだ?』

訓練時にミシエルの言ったあの言葉。それが可能になる様、ミシエルは自分が装備する銃器類全てに使用許可を出し、一夏でも使用できるようにしておいたのだ。

彼の他のアドバイスも踏まえ、この日の為に射撃訓練もそれなりに積んできた。銃の癖も大体覚えている。それに散弾だから、大雑把な狙いでも当たりやすい。

散弾のフルオート連射。シュートされたマガジンに意識を集中していたラウラは対応できない。中身の残るマガジンに次々着弾。高熱を浴びて脆くなっていたマガジンは耐え切れなかった。

小さくない爆発が怒った。予想外の事態に集中が途切れ、爆風と破片がラウラを襲った。

「こ……の、猪口才なああああ!!」

「うおおおおおおおおおおっ!!!!」

マガジンの爆発で姿勢が崩れた所に一夏は突貫をかけた。<雪片式型>を逆手に握った左手で銃身を押さえながら連射を続行。ラウラもワイヤーブレードで迎撃。凶刃と銃弾の雨が交差し、ぶつかり合い、互いのシールドエネルギーを削る。

一夏の右手の中でカチリと銃が音を奏でた。弾切れだ。ならばと一夏は<ドラゴンブレス>を槍に見立て思い切り投げつける。助走の加速を加えられた銃は銃剣を先にラウラ目指して飛んでいく。

ラウラは身を擦るだけでそれを回避した。停止結界を一つ使っているのはさっきの二の舞。今真に集中すべきは刀を構えて突き進んでくるあの男だけ——!!!

<雪片式型>の刀身が光り輝いている。<零落白夜>、この男もこれで決着をつける気だ。

ならば私もこの瞬間に全てを賭ける。両手に展開したプラズマ手刀にありったけのエネルギーを動員しより強力な刃を生み出し、

「一夏あああああああああああああああああああああああ
っ!!!!!!!!!!」

「ラウラあああああああああああああああああああああああ
あっ!!!!!!!!!!」

まるで最初の決闘の焼き直しの様に絶叫しながら、2人は己の刃を振り抜いた。

一瞬の静寂の後。

ゆっくりと崩れ落ちたのは、
ラウラの方だった。

視界の端で、シールドエネルギーの残量を示す数字が急速に減少していく。

（負けるのか………私は!?!）

最初は嫉妬からだった。

戦う為だけに生み出された存在の頂点から転がり落ち、『欠陥品』の烙印を押された自分を鍛えあげ、より高みに押し上げてくれた教官——織斑千冬。

極限まで研ぎ澄まされた名匠のナイフの様な最強の乙女たる彼女を、話題に出す度ただの人間へと音締めてしまう存在こそが——彼女の弟、織斑一夏。

そんな姿をこれ以上見たくなかったから、その織斑一夏を叩き潰すと誓った。

彼さえ居なくなればきっと自分が望む彼女になってくれると、憧れの教官だった頃に帰ってくれると………その考えは多分見当外れの妄執に過ぎなかったと、今更になって思い返す。

今も教官に憧れている事に変わりはない。彼女みたいに強くなりたいたと、凜々しくありたいと、現在進行形で切に願っている。

（もつと・・・・・・・・力を・・・・・・・・）

最初はそこいらの少女達と大して変わらない、ISをファッションの一部しか考えていない腑抜けた男と思っていた。その昔ミシエルからも話を聞いていたけれど、その時も無様に彼に助けられたそうだから装に違いないと一層強く感じていた。

それは違った。最強の乙女の弟もまた、立派な『戦士』だった。

あの眼光。あの気配。あの身のこなし。端端から感じ取れる教官と同じ匂いを感じ取れた。直接相対する度に、その感覚が強くなっていく。

憎悪すらしていた筈なのに、今となっては食事すら共にしても不快とは思わない。ミシエルとシャルロットも共に居てくれたせいかもしれないけれど、むしろ居心地の良さすら感じてしまつて。

今の織斑一夏と自分の関係を端的に表すとすれば、まさしく『ライバル』と呼ぶに相応しいかもしれない。あの嫌悪感も、最初の決闘以降何処へやら。

（勝ちたい——私は、勝ちたいんだ・・・・・・・・・・！！）

だからこそ、織斑一夏には負けたくない。

戦う為の兵器として生み出された存在としてではなく、織斑千冬の背中を追いかける教え子としてでもなく。

1人の人間として、ラウラ・ボーデヴィツヒとして――
織斑一夏に勝ちたいと、強く願った。

……その願いを聞き入れたのが、彼女の愛機に密かに仕込まれていた邪なる存在とは、なんたる皮肉。

『力が欲しいか』

「（力が………欲しい）」

そしてラウラは自ら悪魔との契約を結んでしまう。

『力が欲しいのならば――――くれてやる！――！』

V Tシステム――――起動。

届いた、と一夏は確信していた。

だからこそ、背後からの衝撃にまるで対応し切れず、成すすべなく吹き飛ばされてしまった。落雷でも炸裂したかのような痺れの伴うそれに、一夏の身体は痙攣し軽く地面の上でのたうち回ってしま

「一夏・・・・・・・・・・！」

「ラウラ!？」

ミシェルとシャルロットの驚きの叫び。何事かと痛む身体を押して振り向けば、ラウラのISが黒い泥か粘土と化していく姿が目飛び込んでくる。

外気に露出していたISスーツを纏ったラウラの人形の様な肢体、そして顔の部分までやがてその泥に覆われてしまった。

「何だよ一体!？」

それは観客達も同じ感想である。困惑に包まれる観客を余所に、早くも異常事態と判断されたのか、避難を促す警報と共に観客席が隔壁によってアリーナと遮断されていく。

残るは一夏とミシエル、エネルギー切れでISの展開が解除されたシャルロットのみ。

「ねえミシエル。『アレ』、何だと思う？」

「……どちらにせよ、ロクな物ではないのは確かだろう」

はたしてラウラは大丈夫なのか。そう思っている内に黒い泥―と呼ぶには金属的な光沢が強かったが―はやがて形を成し、変化が止まる。

その姿はまさにISを纏った女性の姿に酷似していた。人形というよりは粘土の塊から作り上げた像のようで、手には実体刀。もっと正確に言えば<雪片式型>とよく似ている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・千冬、姉？」

無意識の内にそう呟きながら、一夏は自然と<雪片式型>を中段に構えていた。

刹那、変化を止めた黒いISが動く。こちらは居合いの構えを取りつつ一夏の懐へ飛び込み、間合いに到達するや否や黒い日本刀を一閃させる。

「ふつ——ざけんなあああああああああああ
あああああああああ！！！」

一夏が上げた雄叫びは、ミシェル達が初めて聞くほど怒りの籠もった荒々しい叫び声だった。

振り抜かれた逆袈裟をいなす。すると黒いISは刀を最上段に持ち上げギロチン宜しく垂直に落とす。それを一夏は受け止めてみせたが、パワーが違うのか頭上に掲げられた<雪片式型>はジリジリと沈んでいく。

「ちい・・・・・・・・シャルロット、離れておけ」

身を守るものが無いシャルロットが巻き込まれないよう黒いISの背後に移動しながら、ミシェルはこれまた予備の<ケルベロス>アサルトライフルを展開し構える。

すると黒いISの動きが止まり、ゆつくりとミシエルの方を向いた――
かと思った次の瞬間、黒いISはミシエルに刃の矛先を変えて斬りかかってきた。速い………！

「くっっ………！」

咄嗟にミシエルもライフルを持ち上げて盾代わりにするので精一杯だ。セミオートカノンの砲身を両断してライフル部分に半分近く食い込む程度で止まってはいたが、下手すれば<ケルベロス>ごと一刀両断されていた所である。

両腕は塞がれてれる。が、両手が塞がっていてもまだ使える武器がミシエルにはあった。

「すまんラウラ………！」

<アグニ>展開。出力は出来る限り抑えて黒いISが弾き飛ばされる程度に留めるつもりだったが、黒いISはその動きに反応したのか刀身をライフルから引き抜くと次は横薙ぎに振り回した。肩部装甲に当たり、逆にミシエルの方が後方へ吹っ飛ばされる。ライフルも何処かへ飛んでいってしまった。

「ミシエル！」

「大丈夫だシャルロット、平気だ！……それよりも早く安全な所に隠れてくれ！」

駆け寄ろうとするシャルロットを抑えるミシエルの元に代わりに一夏が近づいてきた。表情はやはり獰猛に変貌していたが、瞳には燃えるような怒りと共に冷徹な履正も同居していた事に安堵する。

「ミシエル——悪いけど、コイツには手を出さないでくれ」

「一夏……あれは何だと思う」

「アイツは……間違いない、アレは千冬姉のデータだ。詳しい事はわかんねーけどそれだけは分かる。アレは千冬姉を真似した存在なんだ！」

「……そうか、VTシステムか」

「知ってるのかミシエル？」

「ヴァルキリー・トレース・システム……過去のモンド・グロツソの戦闘データをトレースするシステムだが……IS条約でどの国も企業も研究が禁止されている代物だ」

「それがラウラのISに積まれてたってか？——ふざけんな
——」

「ああ確かに……俺も腹が立つ」

言葉を交わす内に2人の顔が更に険しく歪んでいく。

「気に入らねえ。そりや強くなりたくて力を求める気持ちは俺だつて嫌ってほど分かるけど・・・アレは違うだろうが！自分の努力で手にした物じゃないだろうが！ただの千冬姉の猿真似、それ以下だ！！」

「・・・・・・・・早く止めた方が良いだろう。教師達が駆けつけたらどうなるか分からん。ケリをつけるなら今の内だ」

「言われなくても分かってる。コイツの相手は、俺の仕事だ」

一夏がく雪片式型>を構え直しながら前に出ると、再度黒いISが襲いかかってきた。斬撃を敢えて一夏は受け止める。

やっぱりだ。確かに散々受け、払い、叩き込まれてきた千冬姉の剣筋によく似てはいるし、反応も早く一撃一撃は激しく重い、剛の剣でも違う。やはり姉の猿真似以上のそれではない。技も無ければ意思も無い、感情無き機械が振るうその剣は棍棒を振り回しているのと大差が無かった。

千冬姉の剣はもっと疾く、もっと鋭く、一片の無駄も無く刀を振るう姿は優雅ですらあった。

兄弟子の剣はもっと激しく、もっと苛烈で、触れずともその身から放たれる剣気だけでも身が切れてしまいそうなほど研ぎ澄まされて

いた。

2人がそこまでの技量を手にする事が出来たのは才能と努力と――
――『強くなる』、その確固たる意志を持った人間だからこそ。

故に織斑一夏はこの手で真似事しか出来ない木偶人形を倒さなければならぬ。ただ組み込まれた動きしか出来ない機械に討ち勝たなくてはならない。

「人間を、無礼るなああああああつ――！！」

黒いISの刀を受け留めていた<雪片弐型>の刀身を傾け、黒い刃がその側面を滑る。大きく<白式>を身に付けた一夏よりも大きな図体が斜めに傾ぎ、胸元がガラ空きとなる。

その機を逃さず一夏は<零落白夜>を起動。必要以上に大きく光り輝く刃なんて必要ない。ただ目の前の相手を斬り倒せる刃を求める一夏の意識に呼応したかのように<雪片>弐型の刀身が変化。小ぶりな日本刀の形に形成された純白のエネルギー刃が柄から先に構築

される。

躊躇い無くそれを横一文字に振り抜いた。胸元を横断し、ぱっくりと黒い泥製の身体が割れる。止めとばかりに純白の刀を天目指して高々と掲げ、正中線沿いに唐竹割りを放った。

——十字に切り裂かれた黒いISの身体から、まるで蛹から孵化した蝶の様にすると姿を現した一夏はその手にしっかりと抱きとめた。

——私は、教官の様になりたかった。

『俺だって、千冬姉みたいに強くなりたいさ』

——あの人は私の憧れだった。

『それも同じだよ。カッコいいもんな千冬姉って』

——私は作られた存在だ。鋼鉄の子宮の中から生まれ、父親と母親などただの遺伝子提供者の俗名に過ぎない。

『……俺だって、親の顔も名前も全然知らないさ』

——私はただ強くあろうとした。兵器として生み出された私にとって、それが生きる理由だと信じていたからだ。

『ラウラは兵器なんかじゃない。立派な人間……ただの可愛い女の子だよ』

——ミシエル達と最初に出会った時にも同じ事を言われた覚えがあるが、本当にそう感じているのか？

『こんな事で嘘つく必要が何処にあるんだよ？』

——そうか……

『でも本当良かったよ、平気そうで。いきなりISが変なのに変わって取りこまれてたからさ、俺もミシエルもみんなも心配したんだぜ？』

——貴様も心配してくれたのか？

『当たり前だろ。今じゃラウラも俺にとって大切な人間なんだから』

.....

『.....おい?』

——今なら教官の言っていた事の意味が分かる気がするな。

『何の話だよ』

——貴様には秘密だ。絶対に教えてやらん。

『ひつでえ!』

——1つだけ、教えてくれないか。

『何だよ』

——貴様はどうしてそこまで強い。どうしてそこまで強くなれたのだ? 何故そこまで強くなろうと思ったのだ?

『.....やりたい事があるんだ』

——それは一体.....?

『誰かを守る事。これまで俺は守られてばかりだった。ミシエルが俺を守ろうとしたせいで死にかけて、千冬姉に助けてもらって、俺は自分が守られてばかりの甘ったれたガキだって事にようやく気付いたんだ』

.....

『自分の身を守る力も持っていない事がどうしようもなく悔しかった。自分を犠牲にしても俺を守る為に行動してくれたミシエルや千冬姉の姿が、どうしようもなく眩しかった。だから強くなりたかった。自分のためだけにじゃない、周りの誰かを守る為に、ただ誰かの為に戦えるだけの力が欲しかった』

——私も同じだ。教官のあの強さが眩しくて、だからあの人に憧れた。

『憧れるのは別に良いさ。誰だって誰かには憧れる——でもこう言っちゃなんだけど、ラウラのISに仕込まれてあったアレ、アレは違う。アレは単なる千冬姉の猿真似以下だ』

——存在そのものには気付いていなかったとはいえ、その力を使う事を選んでしまった私には耳が痛いな.....

『だってそうだろ？俺もお前も、千冬姉みたいになりたいとは思っても——千冬姉『そのもの』には決してなれやしないんだから』

.....

『俺は俺で、ラウラはラウラ。俺達は千冬姉じゃない。千冬姉そのものにはなれないし、千冬姉そのものになる必要は何処にも無い。俺達は皆、別々の存在なんだから。だから、ラウラ』

——何だ？

『一緒に強くなるうぜ？一緒に強くなって——千冬姉を見返して、もう心配しなくても大丈夫だって、認めさせてるんだ』

——私に出来るだろうか？もしかして今回の事で教官に見捨てられたりは………

『そんな事ある訳無いって。だって——千冬姉だぞ？俺の姉だぞ？それに………』

——それに？

『——言っただろ？ラウラは1人じゃないんだ。俺も、ミシエルも、シャルロットも、ずっとお前と一緒に居るさ』

——貴様も、私と共に居てくれるのか？

『当たり前だろ？だって、俺達は——』

そう言いながらあの男は微笑みながら、私に掌を伸ばして——
………

目を覚ました場所は医務室前の廊下だった。

「・・・・・・・・寝ちまってたのか俺」

「流石に一夏も疲れたんじゃない？一夏とミシエルだけ2回戦ったんだし」

「それならシャルロットもじゃない。そっちも大丈夫なの？」

「僕は大丈夫」

「・・・・・・・・・・見ての通りだ。そこまで心配する必要はない」

教師達からアリーナでの出来事について事情聴取をされた後一夏達はラウラを見舞いに医務室へとやってきたのだが、先客としてやってきていた千冬が先にラウラと話がしたいという事で待っていて、ラウラが目覚めてからは2人だけでの話し合いという事で医務室から追い出されたのである。

ちなみに学年別トーナメントは生徒達の安全を考え強制終了。今後の試合も中止し今回の優勝者は無しという事になった。

千冬の面会が終わるまで待っている間にいつの間にか意識が飛んでいたのだが、目覚めてからの一夏の目はまだ何処か遠くを見ている。

「どうかしたのか一夏？」

「・・・・・・何か、ラウラと2人つきりで話した様な気がする」

うすらぼんやりとした様子の一夏の耳にはデュノア夫婦以外の面子から発せられたビキッ！ってひび割れた感じの音は不幸にも届かない。

ちなみに一夏以外に医務室前でたむろしているのはミシエル・シャルロット・箒・セシリア・鈴といったいつもの顔ぶれである。

「んー、えらくリアルな夢だったな。プライベート・チャネルで話するのに似てたけど違うような・・・・・・うーん」

「そういえば聞いた事がありますわね。IS 同士の情報交換ネットワークの影響により、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が発生するそうですね。実際に起こる例は稀だそうですけれど」

「ふーん、そうなんだ——って何で箒と鈴が不機嫌そうな顔するんだよ」

「操縦者同士の波長が合うという事は……」

「一夏とあの女の仲が良くなってるって事よねえ……」

「いやいやそれはちょっとおかしいというか飛躍し過ぎなんじゃないかな？」

「……2人共落ち着いてくれ。騒ぐと織斑先生に怒られない」

扉一枚向こうに居る鬼の存在を思い出して意気消沈する箒と鈴。

2人は、特に箒の方は強く恨めしげというか、複雑な感情なこもった視線を一夏に投げかけながら拗ねた口調で呟く。

「……私も、専用機が欲しい。専用機があれば、もっと一夏との関係が深まるかもしれないのに」

「なら専用機貰える位頑張ってお偉いさんの目に留まる事ね。代表候補生ぐらいになれば専用機も支給されると思うわよ？」

「代表候補生といえば日本の代表候補生も同じ学年に所属していますわね。クラスは4組で、確かお名前は――」

医務室の扉が開いた。千冬の姿に手近なベンチに腰かけていた一同は一斉に腰を上げる。

「ラウラの具合はどうなんだ千冬姉！」

「織斑先生だ。全身に負担がかかったせいでしばらく安静にしてなければならぬが命に別条はない。だが一応怪我人なんだから騒ぎ過ぎるな――」

千冬が言い終わるよりも早くまず一夏とミシェルとシャルロット、出遅れて箒と鈴とセシリアが後を追って医務室へ飛びこむ。

やれやれまだまだ青いな、と首を振りながらもそのまま離れて行く千冬の口元には薄く苦笑が浮かんでいた。

「「「ラウラ！」「」」

「お前達・・・・・・・・」

「・・・・・・・・無事で何よりだ」

「心配したんだよ。本当に大丈夫なんだね？」

「あ、ああ。教官からはしばらく安静にしているとは言われたが、深刻な異常は特に無さそうだ」

「やれやれ心配掛けさせないでよ全く。いきなりISが思いっきり変わって呑み込まれたかと思って見てたのに途中で締め出されたから気になって仕方なかったわよ」

「でも鈴もラウラの事心配してくれてたんだろ？もっとそういうのは素直に言ってあげればいいのに」

「う、うるさいうるさいうるさいー！」

照れ隠しに暴れようとした鈴を止めてから、ラウラの方に向き直すとふと赤と金の瞳と目が合う。

じ〜〜〜〜つと、少女の視線は一夏に固定されていて向けられている側は無性に落ち着かなくなる。

「・・・・・・・・一夏」

「な、何だ、ラウラ」

こうやってハッキリと下の名前を呼ばれたのは初めてな気がする。

「もう一度聞かせて欲しい————お前は、お前達は私の傍に、

一緒に居てくれるのか？」

そう言つて少女は少年達に手を伸ばす。まるで縋るように、温もりを求めるかのように。

当たり前だろ、と少年はその手を握つた。

強く、強く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9247y/>

僕の恋人はお兄ちゃん？

2011年11月29日22時49分発行